



HAL
open science

北方の想像界 とは何か?

Daniel Chartier

► **To cite this version:**

Daniel Chartier. 北方の想像界 とは何か?: 倫理上の原則. Arctic Arts Summit; Imaginaire Nord, 157 p., 2019, Isberg, 978-2-923385-33-4. <hal-02173778>

HAL Id: hal-02173778

<https://hal.science/hal-02173778>

Submitted on 4 Jul 2019

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

Copyright



ダニエル・シャルティエ

北方の想像界 とは何か？

倫理上の原則



ARCTIC ARTS SUMMIT

IMAGINAIRE | NORD

北方の想像界とは何か？

倫理上の原則

この日本語版は日本ケベック学会の協力のもとに出版されました。
ここに厚く御礼申し上げます。

Cette édition en japonais est publiée en collaboration avec l'Association japonaise
des études québécoises, que nous remercions.

日本語版

ダニエル・シャルティエ
北方の想像界とは何か？ 倫理上の原則

Rovaniemi, Arctic Arts Summit /
Montréal, Imaginaire | Nord,
“Isberg”, 2019.
ISBN 978-2-923385-33-4

Version française/French version

Qu'est-ce que l'imaginaire du Nord? Principes éthiques
ISBN 978-2-923385-24-2

Norsk versjon/Norwegian version

Hva er forestillingene om det nordlige? Eitiske prinsipper
ISBN 978-2-923385-26-6

Dansk version/Danish version

Hvad er forestillingen om det nordlige? Eitiske principper
ISBN 978-2-923385-28-0

Русская версия/Russian version

Что такое воображение Севера? Этические принципы
ISBN 978-2-923385-30-3

English version

What is the Imagined North? Ethical Principles
ISBN 978-2-923385-25-9

Sámi versuodna/Sami version

Mii lea davi govvádallan? Ebtalaš prinsihpat
ISBN 978-2-923385-27-3

Сахалыы биэрсийэ /Yakut version

Хоту дойдуну онорон көрүү диэн тугуй? Этикэ бириинсинтэрэ
ISBN 978-2-923385-31-0

Svensk version/Swedish version

Vad är föreställningarna om det nordliga? Eitiska principer
ISBN 978-2-923385-29-7

Suomenkielinen versio/Finnish version

Mikä on kuviteltu pohjoinen? Eettisiä periaatteita
ISBN 978-2-923385-34-1

Føroysk útgáva/Faroese version

Hvat er tað ímyndaða Nordur? Eitiskar grundreglur
ISBN 978-2-923385-35-8

Design : André Cândido

Photos : Imaginaire | Nord

Back photo : Pernille Ingebrigtsen

© 2019

nord.uqam.ca

puq.ca/catalogue/collections/liste-isberg-72.html

国立国会図書館

Bibliothèque et Archives nationales du Québec

北方の想像界とは何か？

倫理上の原則

多言語出版：日本語、フランス語、ノルウェー語、
デンマーク語、ロシア語、英語、北部サーミ語。
この出版物は北方の 14 言語に翻訳されています。

訳：小倉和子・河野美奈子

ダニエル・シャルティエ

ARCTIC ARTS SUMMIT
IMAGINAIRE | NORD

ISBERG

2019

北方の想像界とは何か？ 倫理上の原則	9
Qu'est-ce que l'imaginaire du Nord? Principes éthiques	33
Hva er forestillingene om det nordlige? Ethiske prinsipper	55
Hvad er forestillingen om det nordlige? Ethiske principper	75
Что такое “воображение Севера”? Этические принципы	97
What is “the Imagined North”? Ethical Principles	119
Mii lea davi govvádallan? Ehtalaš prinsihpat	139

北方の想像界とは何か？ 倫理上の原則

訳：小倉和子・河野美奈子（フランス語版より）

要旨：北方は、西欧世界の芸術家や作家たちによって何世紀も前から想像され、表象されてきた空間である。それによって、時間の経過とともに言説の層が次第に厚みを増し、「北方の想像界」が作られてきた。その北方とは、スカンジナビアのことであったり、グリーンランド、ロシア、北極圏、あるいは南北両極のことであったりする。ところが、西欧人たちが北極に到達したのはわずか1世紀前のことにすぎない。そのため「北方」は二重の視線の産物となる。すなわち外部の視線（表象、とりわけ西欧的表象）と、内部の視線（イヌイット、スカンジナビア、クラーなどの北方文化）である。前者はしばしば単純化され、後者は無視されるため、もし「北方」について全体的な視野から研究したいと思うなら、次の2つのことを問わなければならない。すなわち、北方を想像界によってどのように定義するか？ 南によって軽視されてきた文化も含めて、北方諸文化について完全な視点を獲得するために、われわれはどのような倫理上の原則に基づいてそれらを検討すべきか？ われわれはここでこれら2つの問いに答えようと思う。まず、北方の想像界を定義し、次に、文化的北極地方を「ふたたび複雑化させる」ための包括的プログラムを提案することによってである。

北方の想像界とは何か？

何世紀も前から¹、西欧世界の芸術家や作家たちは寒い世界を想像し、表象してきた。しかし、もう少し近くから仔細に検討してみると、その世界はいくつもの異なる想像界に分岐していることが分かる。「北方」、スカンジナビア、グリーンランド、北極地方、南北両極、さらに冬である。それらは、形態（水平性）や色（白、ライトブルー、バラ色がかった色調）の単純性、氷や雪や寒さを表すあらゆる特徴をもった存在、精神的・倫理的価値（連帯）の混成物として表現されることがもっとも多いが、しかしまた、「彼方」とも接合しながら表現される。その「彼方」とは、北極地方が始まる場所であり、ヨーロッパのエクメーネ〔地球上で人類が居住しようと考えられる地域*〕の果て、未知で、空っぽで、人の住まない遠い「自然の」世界のほうに開かれた場所、すなわち北極圏のことである。これらの表象は1つの記号体系を形成しており、それをここでは簡便に「北方の想像界」と呼んでおく。

表象されたあらゆる空間と同様に、「北方」も外部と内部という二重の視線の産物である。これは、北方に関する「諸表象」と「北方諸文化」が生み出してきた諸作品とに区別することができる。前者は主としてドイツ、フランス、イギリス、そしてアメリカ合衆国の想像界がもたらしたものだが、この領土のさまざまな文化的空間をあまり区別せずに、北極地方や南北両極

原注

¹ 本稿の初版は「北方の想像界とは何か？」（« Qu'est-ce que l'imaginaire du Nord ? »）というタイトルで以下の雑誌に発表された。*Études germaniques*, vol. 71, n° 2, 2016, p. 189-200.

* 以下、本文中の〔 〕内は訳注。

日本語版

のほうに尊大な視線を向け、由来となっている諸文化（イヌイット、サーミ〔スカンジナビア半島北部ラップランドに住む人々〕、クリー〔北米の先住民の最大部族の1つ〕、イヌー〔カナダ東北部、ラブラドル半島東部出身のアメリカインディアンの1民族。モンタニエ＝ナスカピとも〕、スカンジナビアなど）にはあまり注意を払わない。後者は自己の外にまで波及することもあるが——スカンジナビア文化の場合がそれで、ヨーロッパにおいては明らかに美化されて受容されている——、先住民 *autochtone* の文化についてはそのかぎりではない。先住民の文化は、人が住まず、住むことができない北極のイメージを強調しようとする修辞学的目的をともなって、長いあいだ過小評価されてきたのである。根強い政治的・民族的偏見によってそうだった場合も多い。いずれにしても、外部によってつくられた「北方の諸表象」と「北方」領土で生まれた「北方諸文化」とは、どちらも同じ領土を参照しているにもかかわらず、しばしば言説の層が異なっているためほとんど出会うことがない。こうした隔たりは他の領土が表象される場合にも多かれ少なかれ観察されるものだが、「北方」、とくに「北極圏」の想像界は、何世紀ものあいだ経験より言説によって培われてきたという点で特別である。そのため、「内部から」の言説の層と「外部から」の言説の層の自立性が強調される。人間が北極に行ったのはたった1世紀前のことだが、何千年も前から北極を想像してきたことを念のため思い出しておこう。要するに、北方や北極地方についての表象や受容に影響をあたえる2つの社会政治的現象を思い出すことが重要なのだ。一方には、先住民の土地が植民地化されるという一般的状況があり、そのために寒冷

北方の想像界とは何か？

地の文化的で人間的な側面は沈黙を強いられてきた。そして他方には、「北方」統治が南部の首都や権力者に左右されるという一般的傾向がある。彼らは（ほとんど経験に基づかない）自分たちの知識と自分たち自身が必要としているものの状況に応じて北方を管理しており、そのために隔たりが生じるのである。

したがって、北方と北極地方に関して、しばしば西欧によって作りあげられた、容易に接近できて記号学的にきわめて一貫性のある（単純化された）「諸表象」と、北方「諸文化」とが存在し、この北方「諸文化」のうちのいくつか（ロシアやスカンジナビア）はよく知られているが、他のもの——周極〔circumpolaires、極地周辺の意〕空間や先住民のそれ——はまったく知られていないのである。したがって、「北方」を全体的な視野から、不平等な見え方のする多様性を考慮しながら研究しようとするれば、次のような2つの問いを立てる必要がある。それらの問いは、一見したところ互いに隔たっているように見えるが、われわれのケースでは必然的に関係しているものである。すなわち、北方を想像界によってどう定義するか？ 南によって軽視されてきた文化も含めて、北方諸文化について完全な視点を獲得するために、われわれはどのような倫理上の原則に基づいてそれらを検討すべきか？

日本語版

北方を想像界によって定義すること

北方、冬、北極地方に関して発せられたすべての言説は共時的 — ある一定の時期について — 、あるいは通時的 — ある特定の文化について — にあとづけることのできるものである。それらはさまざまな文化や形態から生まれ、何世紀ものあいだに総合と競争という二重の原則²に基づいて蓄積されたもので、「北方の想像界」と呼ぶことのできるものを形成している。それは、多元的で流動的な記号体系であり、発話と受容の状況に応じてさまざまな機能のしかたをする。

今から 10 年ほど前、この「北方の想像界」という概念を展開したとき、私は並行して次のような仮説を提示した。すなわち、北方に関する、そして北方による多様で互いに異なる諸々の文化と認識の彼方に、1 つの共通した美学的土台が存在しているのではないだろうか、という仮説だった。その土台はそのあと、個別には「北方」に特有のものでなくても、文化的観点からは独特で「北方」なるものにふさわしい記号の総体を構成するさまざまな特徴に従って分岐させることのできるものではないだろうか、と考えたのである。北方についての考えを表現するために西欧文化が何世紀もかけて築いてきた記号の総体が「北方の想像界」なるものを構成しているのである。その特徴のいくつかを確認したり、修正したりする新しい提案がな

² この言説間の総合と競争の原則は、ヴォルフガング・イーザーによって提案され、受容美学のなかに組み込まれた読解理論に着想を得たもので、拙著『古典的なものの出現』で表明されたものである。(L'émergence des classiques, Montréal, Fides, 2000.)

北方の想像界とは何か？

されるたびに手を加えられてきた総体であり、そうした新しい提案のなかには、ようやく考慮されるようになってきた先住民や地域の文化からの提案も含まれている。それは活気ある、「有機的な」総体であり、歴史的な時代や諸状況にしたがって変化する。あらゆる記号体系と同様、この総体は想像世界の特徴を部分的に喚起することによってその世界を開かせてくれるが、そのことは結果的に北方を表象するための方法の節約にもなる。たとえば、ライトブルーが今日ではその機能を果たしている。それを用いるだけで、寒さと広大さと氷からなる世界が読者や観客に呼び起こされ、記号体系全体と結びつく。

したがって、言説の諸世紀が構築したあらゆる体系と同様、北方の想像界から離れたり、その土台に異議を唱えたりするためには、それを脱構築するか修正するかなければならないが、いずれにしても考慮はせざるをえない。それはイヌイットのフィクションの最初の長編映画である『氷海の伝説』³の制作者たちが、北極について西欧がイメージしているものの特徴を1つ1つ取り上げながらそれらを脱構築することによって賢明におこなっていることである⁴。彼らは観客が西欧文化によって構築されてきた北方の想像界という記号体系のコードを所有していることを知っていて、それを用いながら、この領土についての新しい認識を示し、それが以前のものに付け加わり、その間

³ ザカリアス・クヌク『アタナグユアト』(原題)。(Zacharias Kunuk, *Atanarjuat*, Canada, 2001, 172 min.)

⁴ たとえば、登場人物は誰も飢えや寒さに苦しんではいないし(ある場面では、1人の男が裸で氷上を走ってさえいる)、誰も迷う者もなく、狡猾で卑怯なイヌイットもいて、争いは複雑である。

日本語版

題点やコードをずらすのである。ヴォルフガング・イーザーによって記述された読書行為の過程⁵と同様、文化というものは、想像界に養分を与えてそれを方向づける新しい提案を競って取り入れ、蓄積し、配置し、定めるのである。想像界は、蓄積と競争の過程によって選別された新しい文化的提案にしたがって変化しながらも、その一貫性を保つ。たとえば『氷海の伝説』の成功〔2001年カンヌ映画祭カメラドール賞受賞〕により、この映画は北方の想像界を現代的に方向づけるために一定の役割を果たすことができた。たとえこの映画が賞を取らなかったとしても、この想像界に関する言説を蓄積することにはもちろん貢献できただろうが、その場合、そのコードをこれほど大きくずらすことはできなかつただろう。

「北方の想像界」という概念を提出することはこのように、領土を理解する方法を変え、その領土がようやく文化的で人間的な側面を含み、表象、想像界、領土、および文化のあいだの諸関係の美学的で政治的な性格を把握できるようになるために批評の現場を開くことになるのである。北方の想像界について語ることは、文化的表象と領土のあいだに繋がりがあること——これは自明の理ではない——を前提としていて、現実の場所が、そこから生まれた表象の諸形態に影響をあたえることを示唆することになる。そのことは一見したところ、芸術の諸形態というものそれぞれで定義されるものであると考える現

⁵ ヴォルフガング・イーザー『読書行為 — 美学的効果の理論』。(Wolfgang Iser, *L'acte de lecture. Théorie de l'effet esthétique*, Bruxelles, P. Mardaga, coll. « Philosophie et langage », 1985 [1976].)

北方の想像界とは何か？

代性やポストモダン性とは矛盾するように見えるかもしれない。もっとも、「場所」の概念もまた文化的に構築されたものであるという視点から考察され、したがってこちらも独自の法則に支配されていると考えられるなら話は別だが。残るは、現実の場所と表象された場所のあいだにあるとされる関係をどう確定するかであり、それは、場所についての考え方が言説の重なりと競争によって定義されるとき可能になる。じっさい、このことは場所についての考え方が必ずしも物質性によって誘発されるわけではなく、逆に、言説も現実という観念から完全に解放されうるわけではない、ということを暗示している。場所というものは経験、言説、物質性、文化的形態、そして記憶から成る人間の複雑な構成物を形成しているのである。こうしたことすべては現実的なもの、人間的なもの、そして現実——それが物質的であろうと、言説的であろうと、あるいは記号学的であろうと——に関わっている。

通常言われていることに反して、北方が西欧文化において1つの「場所」とみなされうるのかどうか問うことは正しいだろう。北方の表象史を読むとむしろ、「北方」は「場所」ではなく、「空間」として定義されてきたことが納得できる。空虚さ、広大さ、白さに結びついたその性格を強調することで、ときとしてこの領土に住む人々の経験を軽視する表象体系を発展させてきたのである⁶。何世紀ものあいだ、北方の現象学的知識は自明

⁶ 北方の空間と場所の関係については、共著『北方の場所——北方の場所の地図作成に向けて』を見よ。(Le lieu du Nord. Vers une cartographie des lieux du Nord, Québec et Stockholm, Presses de l'Université

日本語版

のものではなかった。西欧人たちは北方に、エクメーネの彼方の領土（にもかかわらず彼らはテキストからそこを想像しながら探検しようと懸命に務めてはいたのだが、それには時間がかかった）、したがって知られざる場所を見ることのほうを好んでいた。そのうえ、彼らは、そこで生活している人々（イヌイット、サーミ、クラーなど）の言説の一部を——初めは無知だったために、のちには排除したことにより——知らずにいた。そのようにして、西欧の多くの物語において、「北方」は物質的あるいは現象学的現実を考慮せずに物語をはめこむことができる没個性的な鑄型となる。ただし、想像界における「北方」に特有の一連の基準と性格が尊重されれば、である。探検家の物語から詩にいたるまで、映画やコマーシャルのような大衆文化から視覚芸術にいたるまで、歌から冒険小説にいたるまで、表象と知覚によって捏造された想像界の全体が、歴史的観点から人間がつくりあげた文化的な構造物とみなされうる「北方」に結びつけられる。そのすべては、状況に適合しながら、もろもろの時代やジャンル、技術や文化を横断する美学的一貫性のもとに置かれるのである。それを自分のものだと言主張する諸文化は、自らに特有であり、自らを規定してくれる総合のなかで、特殊なものの一部と普遍的なものの一部を結び合わせる。こうしてアイスランドは、自己を規定する他のアイデンティティの層（島嶼性、スカンジナビアへの帰属）に北方の想像界をつけ加えることによって、自分なりに北方の想像界を我が物にするのである。

du Québec et Université de Stockholm, coll. « Droit au pôle », 2015.)

北方の想像界とは何か？

北方の想像界について語るためにはしたがって、次のようなものについて考察しなければならない。すなわち、場所に関する考え方について、物質的な場所、経験された場所、想像された場所、表象された場所のあいだの関係について、空間や場所の概念について、記号体系の秩序立った通時的な組成について、複文化性について、特殊なものと同普遍的なものについて、そして北方に関する西欧的定義が提示するいくつかの言説の取捨選択について、である。それこそが方法論的、理論的、美学的、そして政治的なプログラムの全体である。それはまだ完全に作業中の状態だが、北方や北極地方についての総合的研究のなかに文化的で人間的な側面を取り入れることが、これですぐ可能になる。

この記号体系は二重の特殊性をもっている。すなわち、そこに住んでいる人々によってはほとんど作り上げられることがなかったという点と、大部分はそこに行ったことのない人々によって思考されたものだという点である。そのことによって言説や想像力の一貫性や力が減るわけではないが、寒冷世界をほんとうに知るため、そこに住む人々が語ること、彼らが何を必要とし、何に憧れているかを認識するため、文化的で知的な観点から北方、北極地方、寒冷世界をそのものとして考えるためには、多くの挑戦が必要である。この記号体系はまた、場所よりも空間として考えられてきた領土、そこに己の活力を保証するための資源の宝庫しか見ていなかった権力者たちに支配されてきた領土に関する外部からの言説で成り立っているという歴史

日本語版

性ゆえ、その複雑性のすべてを解放するためには、いくつかの倫理的な制約と処方も課す。

文化的北極地方を「ふたたび複雑化する」ための包括的プログラム

北方の想像界を研究することは、複文化的で周極的な方法で、北方や冬や北極地方のさまざまな表象を学際的な観点から分析することを意味する。文化的な「北方性 *nordicité*」や「冬季性 *hivernité*」の概念に基づき、また、「一定の領土にたいして慣例的に適用される、何よりもまず文化的な言説⁷」と見なされる北方の定義に基づいて、われわれはこの言説の歴史的進展と変奏を、したがって北極地方と北方についての考え方の進展を研究することができる。

このような知的態度は諸々の表象を介して、科学、歴史、社会、そして芸術が何をもたらしたかを考察する眼差しを可能にしてくれる。それらの表象は、科学にとっては動機付けや提案の源となり、人間や社会の変化の方向を示し、歴史を決定づけ、

⁷ ダニエル・シャルティエ「北方へ、そして沖へ——北方をめぐる表象と語りの形式」、ジョー・ブシャール、ダニエル・シャルティエ、アメリカ・ナドー（編）『文学、映画、視覚芸術における想像界の諸問題』所収。（Daniel Chartier, « Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives », Joë Bouchard, Daniel Chartier et Amélie Nadeau [dir.], *Problématiques de l'imaginaire du Nord en littérature, cinéma et arts visuels*, Montréal, Université du Québec à Montréal, Département d'études littéraires et Centre de recherche Figura sur le texte et l'imaginaire, coll. « Figura », 2004, p. 7.)

北方の想像界とは何か？

芸術作品にとっては当然の帰結となるものである。このような見通しは、共通の土壌において知のさまざまな伝統が未曾有の出会いを果たすことを可能にする。それらの伝統は、北方や北極地方の思想家たちが長らく呼んできたように、「学際的」で「複文化的」なアプローチを実現すべく一点に集中する。そのアプローチは、この生態系の環境的、社会的、文化的観点から見た複雑さと脆弱さを理解するために唯一可能なものである。

寒冷世界をもはや領土的にではなく周極的に理解することを擁護することにより、この寒冷世界を、解決、考察、共通の立場を必要とする1つの全体としてとらえることができるようになる。もちろん、その全体を構成している文化や言語がさまざまであることは考慮しながらである。その文脈からすれば、寒冷世界について受け入れ可能な見方を提示するには、複言語的、複文化的、そしてしばしば対立をはらむ方法でその全体を関連づけることがぜひとも必要になってくるだろう。

北方に関する文化研究は文化的表象の検討に基づくものであり、したがって、北方、北極地方、そして冬に関する重要な争点の論証的分析と複国家的、複分野的、多元的アプローチによって、想像界にたいする人間の関わり方の研究を刷新することを目指している。

文化的で人間的な側面の考察は北方に関する、そして北方におけるあらゆる研究にとって必要欠くべからざるものである。ところが、それこそが北極地方や北方に関する政策、寒冷世界の統治を目的とした合意、科学的あるいは技術的プロジェクト

日本語版

がしばしば忘れてたり等閑視したりしてきた側面なのである。たとえば、1977年にケベックの北方のクリーやイヌイットと締結された歴史的合意である「ジェームズ湾・北ケベック協定⁸」は政府と先住民のあいだで結ばれた現代における最初の合意の手本としてしばしば言及されるが、領土の共同もしくは独占的な利用に直接影響のある伝統的習慣以外、先住民の文化についてはまったく触れていない。北方の文化的で人間的な側面を知らないことは、周極的な関係と表象の複雑さを否定することになり、領土に即さない政策を打ち立てることにもつながりかねない。その意味で、社会文化的観点から北方と北極地方の定義を確定し、築く原理、方法論、実践について考察することが望ましい。

北極地方の定義に関していくつかの基本原則と知的立場を思い出す必要がある。それらのなかには、北極地方の定義に含まれる言葉の多様性、周極的観点の必要性、複分野性、先住民と外来の視点の考慮、「自然の」そして都市部の側面、多言語主義、間文化主義、そして北極地方を「ふたたび複雑化する」ために新たな語彙を提示する必要性が含まれている。

寒冷世界を指し示し、限定するために用いられた言葉を手短かに調査してみると、互いに一致したり、異なっていたり、ときには無分別に使用されたりする定義どうしの重なりが明らかに

⁸ この重要な条約とその影響については、たとえばアラン＝G ガニオン、ギー・ロシェ（編）『ジェームズ湾・北ケベック協定への眼差し』を見よ。（Alain-G. Gagnon et Guy Rocher [dir.], *Regard sur la Convention de la Baie-James et du Nord québécois*, Montréal, Québec / Amérique, 2002.）

北方の想像界とは何か？

なる。当然ではあるが、「北極地方」、「南極大陸」があり、「極地地域」、「北極圏」がある。それらの言葉は十分明確に定められた領土を示してはいるが、地理学者たちはその境界の厳密さに疑いをいだいている。次に、「北方」、「寒冷世界」、さらに「冬」がある。これらの言葉は、寒さとは何かという話し手の見方次第で、より流動的で変化しやすい見地に関わっている。北方とはどこか、という問いも、ロンドン、メキシコ、ブエノスアイレス、ヌーク〔デンマーク領グリーンランド最大の都市、同島自治政府の首都〕、ヤクーツク〔ロシア連邦サハ共和国の首都〕のどこに身を置いているかに応じて異なってくる。さらに、歴史＝政治的総体が存在する。それはスカンジナビア、ロシア、シベリア、カナダ、ヌナヴィク〔ケベック州北部イヌイット居住地域〕、そしてアラスカである。最後に、それらの総体と重なり合う再編もある。イヌイットの世界、北大西洋地域、周極エリア、北方周辺エリアなどである。どの言葉にも複数の意味があり、いくつかの特徴（地理、政治、言語、文化、気候）にこだわりを持ち、他の特徴は無視している。また、どの言葉もそれを用いることによって、寒冷の、極地の、北極地方の、北方の、そして冬の世界を一般的に定義する他の概念の使用をずらしてしまう。これらの概念の存在を意識することは、少なくともその人の思考と北方研究の対象を明確にすることを可能にしてくれる。

北極世界の大部分の思想家は、人々がこの地域を周極的な「1つの全体」と見なすことを執拗に求めている。異なる国家、ネイション、文化、歴史、関係の総和として見なすことである。

日本語版

北極地方は1つの考え方として自らを定義づけることができるべきである。だが、歴史的には北極はむしろ、とくに1世紀前からは、南の権力による非合法の影響力によって思考され、定義づけられ、統治されてきたのである。イカルイト〔カナダ、ヌナヴト準州の首都〕は長いあいだオタワによって規定されていた。フェアバンクス〔米アラスカ州第2の都市〕はワシントンによって、ヌークはコペンハーゲンによって、そしてヤクーツクはモスクワによって規定されていたのである。すでに見たように、西欧的想像力の観点から見ると、文化を通して配置された北極地方は、イギリス、ドイツそしてフランスの文化が組み合わされた産物である。そしてその文化にアメリカの大衆文化が付け加えられている。資源開発の観点から見ると、鉄道は南が発展するために必要としている鉱物を北から運び、電線は大都市へ電気をもたらし、道路は森を南の市場と繋げることを可能にしている。北方は「南の」文化によって思考され、南の物質的要求に応じる。その観点から見れば、北方と北極地方の文化表象が問題となるとき、北方の形態と役割が単純化されていることを確認したとしても驚くべきではない⁹。遠く、空っぽで、純粹で、「危険で」、「幻惑的で」、白く、寒く、凍った「北方」の特徴は自らの外にある¹⁰。「北方」は南の想像的で物質的

⁹ 現代の作品における生態学の概念に関連する単純化と複雑性の関係については、たとえば周極的芸術家パトリック・ヒューズについての拙論「北極地方の単純化／複雑性：ノルウェーの芸術家パトリック・ヒューズの作品」を見よ。（«Simplification / Complexity of the the Arctic: The Work of Norwegian Artist Patrick Huse» Patrick Huse, *Northen Imaginary. 3rd Part*, Oslo, Delta Press et Pori Art Museum, 2008, p. 49-53）

¹⁰ 言説としての北方のいくつかの特徴については、ダニエル・シャル

北方の想像界とは何か？

な要求に応じて自己を限定する思考のなかにあるのだ。反対に「周極的」ヴィジョンは、存在論的定義として北方を即自的存在とみなすことを課し、北方を構成する多様な部分を結ぶ関係や、それぞれの文化、立場、歴史性のあいだの差異を考慮することを課すだろう。このようなヴィジョンは北方を自己定義的な全体として、そして同時に北方の豊かさと複雑性を明らかにする多彩な全体として定めることを可能にする。

というのも、ケベックの言語学者で地理学者でもあるルイ＝エドモン・アムランによれば、単一分野の観点から北極地方を考察することは1つの代償を払うことになるからである。つまり、「単一分野からのアプローチではつねに複雑な問題を理解するための適切で不可欠な知識を十分に作り出すことはできない¹¹」のである。その脆弱さゆえ、気候的例外性ゆえ、よく知られていないという特徴ゆえ、「北方」は複分野的観点から考察されなければならない。いわば「全体論的」観点であり、「ヌナ」〔大地〕や「シラ」〔宇宙〕というイヌイットの概念に通じるものである。他のすべての地域にとって本当のことは、このような脆弱な社会＝文化的＝生態系においては一層あてはまるのである。このことは、純粋科学と社会科学だけでなく、社会科学と文化研究、文化研究と文化創造の実践とのあいだでの絶えざ

ティエ「北方へ、そして沖へ。北方をめぐる表象と語りの形式」を見よ。(Daniel Chartier, «Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives», p. 9-26.)

¹¹ ルイ＝エドモン・アムラン『寒冷地の反響』を見よ。(Louis-Edmond Hamelin, *Écho des pays froids*, Sainte-Foy, Les Presses de l'Université Laval, 1996, p. 86.)

日本語版

る対話を意味している。この複分野的視点は精神の贅沢ではない。北方の研究、介入、開発といったすべての計画に課せられるべき要求なのである。

地理学者のなかには北極地方を地中海と比較した人たちがいたが、それは当然ながら気候によるものではなく、北極の周辺に多様な起源を持つ人々が生きているからである。それは先住民（イヌイット、クリー、サーミ、イヌーなど）であると同時に、外来の人々（アイスランド人、フィンランド人、ロシア人、アメリカ人など）である。先住民あるいは非先住民の観点のどちらか一方しか考慮しないような北方研究は必然的に、その地域について誤った解釈を引き起こしてしまうだろう。どちらか一方を排除してしまえば、北方において作用している諸関係全体を考慮することはできない。

研究にあたり倫理的観点から重要な規定が存在する。すなわち、先住民の声は歴史的に知られることなく、文化制度においてほとんど保存されなかったため、彼らの声は今日、特別な注意を払う必要がある、ということである。私はここでラブラドル海岸沿いにあるヘブロン村の例を提示しよう。イヌイットが住んでいたこの村はニューファンドランド州政府〔当時。2001年にニューファンドランド・ラブラドル州と改称〕の名の下に、モラヴィア人宣教師たちによって管理され、ハドソン湾会社〔毛皮通商を主たる目的として1670年に設立された英国の特許会社。19世紀後半からは小売業に転換〕から物資が供給されていたが、1959年に行政決定により乱暴にも閉鎖されてしまった。もしこの悲劇——強制的に移住させられた何人ものイヌイ

北方の想像界とは何か？

ットが村の閉鎖から数年間のうちに亡くなった——に導いた出来事を再構築したいと望むなら、ニューファンドランド州の政府文書を読むことができるだろう。そしてハドソン湾会社の記録と報告書を見つけることも容易だろう。これらの文書は出版され、遺産として保護の対象になっている。またモラヴィア人宣教師たちの詳細な往復書簡も容易に参照することもできる。それらはすべてデジタル化され、修道会の資料館で閲覧可能である。だが何かが欠けていないだろうか。イヌイットの反応と意見と声は、彼らが自身の記憶を保存するためのいかなる制度化された手段も持っていなかったため消えてしまったのである。先住民の視点が浮かび上がるには、研究者側の特別な注意が必要である。ときとしてその視点を見つけ出すことができないならば、「沈黙の歴史」のために余地を残しておかなければならない。それは北方における争点や力関係を示しており、いくつかの歴史的出来事を倫理的に誠実に語るためである。ヘブロン村の歴史をキャロル・ブライス＝ベネットは「剥奪¹²」と呼んでいる。これは顕著な一例ではあるが、もちろん北方世界で唯一の事例というわけではない。

¹² キャロル・ブライス＝ベネットのエッセイは、ラブラドルにおける先住民の意図せぬ移住についての歴史とその帰結をたどったものである。この場合だけが例外ではなく、他の強制移住（アラスカ、グリーンランド、ロシア）も同じような悲劇的結果を招いている。（キャロル・ブライス＝ベネット『立ち退かされた者たち：ヘブロン、ラブラドルからのイヌイットの追放』(Carol Brice-Bennett, *Dispossessed: The Eviction of Innuit from Hebron, Labrador, Montréal et Nain (Labrador), Imaginaire | Nord et Gouvernement of Nunatsiavut*, coll. « Isberg », 2017.)

日本語版

北極に関してよく知られた表象は、真っ白で、寒く、遠方
あり、人が住んでおらず、また住むこともできない、凍った、
なにもない世界としてそれを示すことがもっとも多い。言うま
でもなく、こうした意味で北極は都会的ではなく「自然なもの」
として見られている。つまり、エクメーネの向こう側で、北極
は文化にとっての空白で荒涼とした空間を象徴しているのであ
る。より温暖な地帯に比べれば、北極地域があまり人の住んで
いない場所であることは認めねばならない。地球の人口統計上
の分布は、赤道地帯周辺の幅広い部分に人口が集中しているこ
とをはっきりと示している。しかしながら、寒冷地域にも数々
の村落や町、そして大都市さえもある。それらの村落や都市は、
人間的、社会的、技術的、文化的、エネルギー的な著しい試練、
さらに夏季と冬季のはっきりした交替 — この交替は、建物の
設備を夏冬兼用にすることを強いる — という試練に決然と立
ち向かっている。たとえばモンレアルは 350 万人の住民を有し
ながら、— 北緯 45 度という理由ではなく、その冬の厳しさと
長さのせいで — 世界でもっとも寒い大都市（100 万都市）と
みなすことができる。気候そのものからくる制約を抜きにして、
文化と社会の視点から 1 つの都市を評価した場合、亜熱帯と亜
北極の気候を交互に繰り返す都市で生活するということはどん
な意味をもっているのだろうか。住宅環境、都市計画、資源管
理、生活様式への個人的および集团的順応に対する北極的条件
の影響は、現在まであまり考慮されてこなかった。というのも、
とりわけ北方の大衆イメージがむしろ、人があまり住まず、寂
れた、人口過疎地域に向けられていたからである。ところが、
つねにそのような状況だというわけではないのである。ここで

北方の想像界とは何か？

また、北方と北極地方に関する複雑性を把握することを想像界が邪魔している。周極世界をよりよく理解するためには、以上のようにこの世界を特徴づける都市部と非都市部との問題を考慮に入れることが重要である。

周極世界で対立し合ったり、相互に影響し合ったりしている多様な視点を理解できるようになるには、先住民の言語であろうが、その他に由来する言語であろうが、また外国語であろうが、いくつもの言語が、どれほど周極世界の概念やパラダイムを構築してきたか知る必要がある。世界的にはあまり話されていなくても北方では話されている言語（たとえばデンマーク語やノルウェー語）は、北極地方を定義づけるのに大きな影響力を持っていた。特にこれらの国出身の探検家が彼らの旅行記を多数発表したことがその理由である。また、ドイツ語をはじめとする外国語は、北極の探検や植民地拡大にはあまり関係しないが、北極を理解するためには本質的な役割を担う。最後に、周極地域は先住民の言語が世界でもっとも現存している地域である。クリー語、イヌクティウト語〔カナダで話されるイヌイット語〕、グリーンランド語〔グリーンランドで話されるイヌイット語〕、ヤクート語〔ロシア連邦サハ共和国を中心にヤクートのあいだで話される〕は、それらの主要地域を除いて理解されることは限られているにもかかわらず、今もって日常言語であり、文化的創造と文化的伝達の言語であり続けている。それゆえ、北方と北極地方についての研究に関するあらゆる計画には、多言語的側面を想定しなければならず、単一言語主義あるいは二言語主義でさえ、北方について偏った不完全な見方

日本語版

を招くことを理解しなければならない。解決策は、簡単なものではないが、多数ある。個人でいくつもの言語を知っていること、翻訳、そして、複数言語のチームも、争点となっているものについての誤解を取り除くことを可能にしてくれる。

北方は1つの「間文化的実験室」を築き上げている。われわれは、異文化間交流が最初に発生したのは20世紀の都市においてだとみなすことが習慣となっている。しかしながら、北極地方のそれぞれ孤立した場所はしばしば、それらが建設された当初から、異なった文化出身の男女が集まり、接触や交易ができる場所であった。宣教や炭坑、またはダム建設地、さらには監禁場所の場合がそうだった。そこでは、関連国のさまざまな地域からだけでなく、移民として外国から来た多様な文化を持った人々もあてにされていた。さらに、周極の各文化は、南方あるいは北方の2つないしはいくつもの文化の総合の産物である。こうして、複文化的相互作用は北方および北極地方の定義となる。場所に応じて、先住民と外来のものとの、ある程度の規模の調和のとれた混成が存在する。たとえばグリーンランド人のアイデンティティは、今日では宣教者やデンマークの植民者や近年の移民とむすびついた100年以上の歴史を持つイヌイットのいくつもの文化の総合である。

周極性、複分野性、先住民性、都市性、多言語主義、間文化主義はどれも、北方と北極地方についての研究にたいして方法論的な慎重さを課す。これらの性質は前提条件であり、それなしでは北極地域はまたしても「単純化」され、自己について自力で考える力を欠いたものになってしまう。さらに、ルイ＝エ

北方の想像界とは何か？

ドモン・アムランが自著のなかで示したとおり、「北方」は、その特殊性と独自性を説明するために、新たな用語と固有の語彙を創造するよう呼びかける¹³。これらの新語のなかには「北方性」、「冬季性」、「滑性 glissité」のような、今日では日常言語に取り入れられている言葉も含まれている。これらの言葉はフランス語のために作り出されたものだが、いくつもの周極言語に広く翻訳されている。これらの新語は、北方を構成する諸々の差異と同時に、この地域を他の世界とは異なるものとして確立させるまともにも敬意を払わねばならない北方研究の新たな現場を切り拓く可能性を持っている。

結論

北方および北極地方に関するあらゆる研究においては、文化的で人間的な側面を考察しなければならない。しかし、その側面とは、—— バリー・ロペス¹⁴の表現を借りるなら —— 自らの「北極地方の夢」を寒冷世界に投影する西欧の伝統が軽視してきたものであり、豊かな想像界や魅惑的な記号体系が軽視し

¹³ ルイ＝エドモン・アムランについては『ケベックの北方性』(Louis-Edmond Hamelin, *La Nordicité du Québec*, Québec, Presses de l'Université du Québec, 2014)の他に、『寒冷地の反響：北方をめぐる言説』(*Écho des pays froids, Discours du Nord*, Québec, GÉTIC, Université Laval, coll. « Recherche », 2002)、『ケベックをつくる言葉 第二部：冬と北方』(*Le Québec par des mots. Partie II : L'hiver et le Nord*, Sherbrooke, Presses de l'Université de Sherbrooke, 2002)も見よ。

¹⁴ バリー・ロペス『北極地方の夢——北方のランドスケープにおける想像力と欲望』(Barry Lopez, *Arctic Dreams. Imagination and Desire in a Northern Landscape*, New York, Scribner, 1986, 464 p.)

日本語版

てきたものである。その記号体系は、幾世紀にもわたる言説によって構築されてきたものだが、そこに住む人々への配慮やその地域の地理的現実の一部がまさしくそこから排除されてしまっている。周極世界の豊かさと多様性を考慮する「現実なるものの生態学」〔ピエール・ヌヴーの1988年の著作のタイトルより〕を取り戻すためには、北方、冬、北極地方を「ふたたび複雑化する」という考え方を提案し、擁護しなければならない。そこに到達するためには、つぎのような仮説を擁護する必要がある。(a) 北方と北極地方はつねに相互作用をもった諸々の場所から成り立っている、(b) 文化的で人間的な諸側面が領土との関係をあらかじめ決定している、(c) 北方と北極地方は、複分野的視点に基づいて、複文化的で周極的な方法で考察されなければならない、(d) 周極的概念は、北方を、解決、考察、共通の立場を必要とする全体としてとらえる。それを構成している文化や言語がさまざまであることを考慮しながら、複国家的、複言語的、複文化的、そしてしばしば対立の原因をはらむ方法ではあるが。

この二重の努力、すなわち、まず初めに複文化的で歴史的な観点から北方の想像界という記号体系を理解し、問い直す努力、次に複分野的で複言語的、対象と調和した研究を実現するために倫理上の原則を打ち立てる努力がなければ、北方や冬や北極地方はそれらがもっている文化的豊かさを取り除かれた、紋切型が産み出されつづける空間に留まるだろう。

ダニエル・シャルティエ
ケベック大学モンリアル校

Qu'est-ce que l'imaginaire du Nord ?

Principes éthiques

Résumé – Le Nord est un espace imaginé et représenté depuis des siècles par les artistes et les écrivains du monde occidental, ce qui a mené, au fil du temps et de l'accumulation successive de couches de discours, à la création d'un « imaginaire du Nord » — que ce Nord soit celui de la Scandinavie, du Groenland, de la Russie ou du Grand Nord, ou encore des pôles. Or les Occidentaux ont atteint le Pôle Nord il n'y a qu'un siècle, ce qui fait du « Nord » le produit d'un double regard, de l'extérieur — les représentations, surtout occidentales — et de l'intérieur — les cultures nordiques (inuites, scandinaves, cries, etc.). Les premières étant souvent simplifiées et les secondes méconnues, si l'on souhaite étudier le « Nord » dans une perspective d'ensemble, nous devons donc poser deux questions : comment définir le Nord par l'imaginaire ? Selon quels principes éthiques devons-nous considérer les cultures nordiques pour en avoir une vue complète, incluant notamment celles qui ont été minorées par le Sud ? Nous répondrons ici à ces deux questions, d'abord en définissant l'imaginaire du Nord, puis en proposant un programme intégrateur pour « recomplexifier » l'Arctique culturel.

Depuis des siècles¹, les artistes et écrivains du monde occidental imaginent et représentent le monde froid. Lorsque l'on s'y penche de plus près, celui-ci se décline en des imaginaires différenciés — le « Nord », la Scandinavie, le Groenland, l'Arctique, les pôles, voire l'hiver — qui se présentent le plus souvent dans un amalgame s'appuyant sur une simplification des formes — horizontalité — et des couleurs — blanc, bleu pâle, teintes rosées —, sur la présence de la glace, de la neige et de tout le registre du froid, sur des va-

¹ Une première version de cet article a été publiée sous le titre « Qu'est-ce que l'imaginaire du Nord ? » dans la revue *Études germaniques*, vol. 71, n° 2, 2016, p. 189-200.

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

leurs morales et éthiques — solidarité —, mais aussi, à sa jonction avec un « au-delà » où commence l'Arctique, sur la fin de l'écoumène européen et sur l'ouverture vers un monde « naturel », inconnu, vide, inhabité et éloigné : le Grand Nord. L'ensemble de ces représentations forme un système de signes, que j'appelle ici par commodité « l'imaginaire du Nord ».

Comme tout espace représenté, le « Nord » est le produit d'un double regard, de l'extérieur et de l'intérieur, que l'on peut distinguer entre les « représentations » du Nord et les œuvres des « cultures nordiques ». Les premières, fruits d'un imaginaire principalement allemand, français, anglais, puis états-unien, distinguent peu les différents espaces culturels du territoire et portent leur regard haut vers l'Arctique et les pôles, avec peu de considération pour les cultures (inuïtes, sâmes, cries, innues, scandinaves, etc.) qui en sont issues. Les secondes ont parfois une extension hors d'elles-mêmes — c'est notamment le cas des cultures scandinaves, dont la réception en Europe bénéficie d'un préjugé nettement mélioratif —, ce qui ne s'applique cependant pas aux cultures autochtones, qu'on a longtemps minorées, parfois avec l'objectif rhétorique de renforcer l'image d'un Arctique inhabité et inhabitable, souvent par des préjugés politiques et ethniques persistants. Quoi qu'il en soit, les « représentations du Nord » créées de l'extérieur et les « cultures nordiques » issues des territoires du « Nord » se rencontrent peu, se posant souvent comme des couches discursives différenciées, bien qu'elles soient toutes deux liées au même territoire de référence. Cette distance peut s'observer pour d'autres ensembles territoriaux représentés, mais l'imaginaire du « Nord », surtout du « Grand Nord », se distingue en ce qu'il

VERSION FRANÇAISE

s'est forgé sur le discours plus que sur l'expérience pendant des siècles, ce qui a accentué l'autonomie des couches discursives « de l'intérieur » et « de l'extérieur ». Rappelons pour mémoire que l'homme s'est rendu au Pôle Nord il n'y a qu'un siècle alors qu'il l'imagine depuis des millénaires. Enfin, il importe de rappeler deux phénomènes sociopolitiques qui ont une incidence sur la représentation et la réception du Nord et de l'Arctique : d'une part, le contexte général du colonialisme autochtone, qui a renforcé la mise sous silence des aspects culturels et humains des territoires froids, et d'autre part, la tendance générale de gouvernance du « Nord », dominé par des capitales ou des puissances du Sud, qui l'administrent en fonction de leurs connaissances (peu nourries de l'expérience) et des circonstances de leurs besoins propres, avec les écarts que cela peut engendrer.

Existente donc des « représentations », souvent occidentales, du Nord et de l'Arctique, facilement accessibles et d'une grande cohérence (simplifiée) sémiologique, et des « cultures » du Nord, certaines bien connues (de Russie, de Scandinavie) et d'autres totalement méconnues — des autres espaces circumpolaires et des Autochtones. Si l'on souhaite étudier le « Nord » dans une perspective d'ensemble et en tenant compte de sa multiplicité d'inégale visibilité, nous devons donc poser deux questions de prime abord éloignées, mais nécessairement articulées dans notre cas : comment définir le Nord par l'imaginaire ? Selon quels principes éthiques devons-nous considérer les cultures nordiques pour en avoir une vue complète, incluant notamment celles qui ont été minorées par le Sud ?

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

Définir le Nord par l'imaginaire

L'ensemble des discours énoncés sur le Nord, l'hiver et l'Arctique, que l'on peut retracer à la fois synchroniquement — pour une période donnée — ou diachroniquement — pour une culture déterminée —, issus de différentes cultures et formes, accumulés au cours des siècles selon un double principe de synthèse de concurrence², forment ce qu'on peut appeler « l'imaginaire du Nord ». Il s'agit d'un système de signes pluriel et mouvant, qui fonctionne de manière variable selon les contextes d'énonciation et de réception.

En développant, il y a une dizaine d'années, cette notion d'« imaginaire du Nord », je suggérais en parallèle l'hypothèse qu'il existerait, au-delà des cultures et des perceptions diverses et divergentes *sur* le Nord et *du* Nord, une base esthétique commune que l'on pourrait ensuite décliner selon des caractéristiques qui, si elles ne sont pas propres au « Nord » dans leur individualité, composent tout de même un ensemble de signes original et propre à ce qu'est le « Nord » d'un point de vue culturel. L'ensemble de signes établi au fil des siècles par la culture occidentale pour représenter l'idée du Nord, ensemble constamment retravaillé par de nouvelles propositions — dont aujourd'hui celles des cultures autochtones et régionales, enfin considérées — qui en confirment ou en modifient certaines

² Ce principe de synthèse et de concurrence des discours, inspiré de la théorie de la lecture proposée par Wolfgang Iser et inscrit dans une esthétique de la réception, a été énoncé dans mon ouvrage *L'émergence des classiques*, Montréal, Fides, 2000.

VERSION FRANÇAISE

caractéristiques, constitue ce qu'est « l'imaginaire du Nord ». Il s'agit d'un ensemble vivant, « organique », qui évolue selon les périodes historiques et les contextes; comme tout système de signes, il permet d'ouvrir un monde imaginaire par l'évocation partielle de ses caractéristiques, ce qui permet une économie de moyens pour représenter le Nord. La couleur bleu pâle, par exemple, exerce aujourd'hui cette fonction : il suffit de l'utiliser pour induire chez le lecteur, chez le spectateur, un univers fait de froid, d'immensité et de glace, qui renvoie au système de signes dans son ensemble.

Aussi, comme tout système constitué par des siècles de discours, il faut, pour s'en détacher ou pour en contester les fondements, le déconstruire ou le retravailler, mais dans tous les cas, en tenir compte : c'est ce que font avec intelligence les créateurs du premier long-métrage inuit de fiction, *Atanarjuat*³, en reprenant une à une les caractéristiques occidentales de l'image de l'Arctique pour les déconstruire⁴. Ils savent que le spectateur *possède les codes* du système de signes qu'est l'imaginaire du Nord, construit par la culture occidentale, et ils l'utilisent pour suggérer une nouvelle perception de ce territoire, qui s'ajoute aux précédentes et en déplace les enjeux et les codes. À la manière du processus de l'acte de lecture décrit par

³ Zacharias Kunuk, *Atanarjuat*, Canada, 2001, 172 min.

⁴ Par exemple, aucun des personnages ne souffre de la faim ou du froid (dans une scène, un homme nu court même sur la glace), personne ne se perd, certains Inuits sont retors et déloyaux, les conflits sont complexes.

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

Wolfgang Iser⁵, la culture reçoit, accumule, dispose, pose en concurrence les nouvelles propositions qui alimentent et orientent l'imaginaire. Ce dernier garde sa cohérence tout en se modifiant au fil des nouvelles propositions culturelles, filtrées par des processus d'accumulation et de concurrence. La consécration d'*Atanarjuat*, par exemple, a permis à ce film de jouer un rôle dans l'orientation contemporaine de l'imaginaire du Nord; s'il n'avait pas été primé, le film aurait certes contribué à l'accumulation des discours sur cet imaginaire, mais sans en déplacer de façon aussi importante les codes.

Poser la notion d'« imaginaire du Nord » transforme ainsi la manière de concevoir le territoire, pour qu'il inclue enfin les aspects culturels et humains, et ouvre un chantier critique pour arriver à appréhender la nature esthétique et politique des liens entre les représentations, l'imaginaire, le territoire et la culture. Parler d'imaginaire du Nord suppose l'existence d'un lien entre les représentations culturelles et le territoire — ce qui n'est pas une évidence —, et revient à suggérer qu'un lieu *réel* puisse avoir une incidence sur les formes de représentations qui en sont issues. De prime abord, cela semble aller à l'encontre de la modernité et de la postmodernité, qui défendent le caractère auto-définitoire des formes artistiques, sauf si l'on considère la notion de « lieu » dans une perspective de construction culturelle, donc elle aussi gouvernée par ses propres règles. Il reste à établir ce que pourraient être les liens entre un lieu *réel* face à un

⁵ Wolfgang Iser, *L'acte de lecture. Théorie de l'effet esthétique*, Bruxelles, P. Mardaga, coll. « Philosophie et langage », 1985 [1976].

VERSION FRANÇAISE

lieu *représenté*, ce que permet la notion d'*idée du lieu* lorsqu'elle est définie comme une superposition et une concurrence des discours. En effet, cela implique que la matérialité n'induit pas nécessairement une idée du lieu et qu'inversement, le discours ne puisse pas être entièrement détaché de la notion de *réalité*. Les lieux forment une complexe composition humaine, faite d'expériences, de discours, de matérialité, de formes culturelles et de mémoire. Tout cela renvoie au réel, à l'humain et à la réalité, que cette dernière soit matérielle, discursive ou sémiologique.

À l'encontre des discours usuels, on peut avec raison se demander si le Nord peut être considéré comme un « lieu » dans la culture occidentale. Une lecture de l'histoire des représentations du Nord convainc plutôt que le « Nord » a été défini comme « espace » et non comme « lieu » : l'insistance sur ses caractéristiques liées à la vacuité, à l'immensité et à la blancheur a conduit au développement d'un système de représentations qui fait parfois fi de l'expérience humaine du territoire ⁶. Pendant des siècles, la connaissance phénoménologique du Nord n'a pas été une évidence : les Occidentaux préféraient voir dans le Nord un territoire *au-delà* de l'écoumène (qu'ils s'évertuaient toutefois à tenter d'explorer, ce qui a pris du temps, tout en l'imaginant à partir de textes) et donc soustrait à la connaissance. De plus, ils ignoraient — par méconnaissance, puis par exclusion — une partie des discours de ceux qui y vivent (Inuits,

⁶ Sur les rapports entre espace et lieu dans le Nord, voir l'ouvrage collectif *Le lieu du Nord. Vers une cartographie des lieux du Nord*, Québec et Stockholm, Presses de l'Université du Québec et Université de Stockholm, coll. « Droit au pôle », 2015.

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

Sâmes, Cris, etc.). Dans bien des récits occidentaux, le « Nord » renvoie ainsi à une matrice neutre sur laquelle on peut situer un récit sans égard à la réalité matérielle ou phénoménologique, pour autant qu'on respecte une série de critères et de caractéristiques qui sont propres au « Nord » dans l'imaginaire. Des récits des explorateurs à la poésie, de la culture populaire, filmique et commerciale aux arts visuels, de la chanson au roman d'aventures, tout un imaginaire forgé de représentations et de perceptions renvoie à un « Nord » qui peut être considéré historiquement comme une construction humaine et culturelle, le tout dans une cohérence esthétique transversale qui traverse les époques, les genres, les techniques et les cultures, tout en s'adaptant aux contextes. Les cultures qui s'en revendiquent allient une part de particulier et une part d'universel dans une synthèse qui leur est propre, qui les définit : ainsi, l'Islande s'approprie à sa manière l'imaginaire du Nord en l'ajoutant aux autres couches identitaires qui la définissent (l'insularité, l'appartenance à la Scandinavie, etc.).

Parler d'imaginaire du Nord impose donc une réflexion sur l'idée du lieu, sur les rapports entre le lieu matériel, vécu, imaginé et représenté, sur les notions d'espace et de lieu, sur la constitution systémique et diachronique des systèmes de signes, sur la pluriculturalité, sur le particulier et l'universel, et sur les inclusions et les exclusions de certains discours de la définition occidentale du Nord. C'est là tout un programme méthodologique, théorique, esthétique et politique, encore largement en chantier, mais qui permet enfin d'inclure les aspects culturels et humains dans la recherche générale sur le Nord et l'Arctique.

VERSION FRANÇAISE

Ce système de signes a la double particularité d'avoir été peu élaboré par ceux qui y habitent et celle d'avoir été pensé en grande partie par d'autres qui n'y sont jamais allés. Cela n'enlève pas à sa cohérence et à sa puissance d'un point de vue discursif et imaginaire, mais cela pose des défis considérables pour une véritable connaissance du monde froid, pour une reconnaissance des discours, besoins et aspirations de ceux qui y vivent et pour, d'un point de vue culturel et intellectuel, penser le Nord, l'Arctique et le monde froid *par lui-même*. Ce système de signes impose aussi, en raison de son historicité — il est fait de discours de l'extérieur, sur des territoires pensés comme espaces plutôt que comme lieux, et contrôlés par des puissances qui n'y voyaient qu'un réservoir de ressources pour assurer leur vitalité — certaines contraintes et prescriptions éthiques, pour arriver à en dégager toute la complexité.

Un programme intégrateur pour « recomplexifier » l'Arctique culturel

Étudier l'imaginaire du Nord signifie analyser, de manière pluriculturelle et circumpolaire, les différentes représentations du Nord, de l'hiver et de l'Arctique, selon une perspective interdisciplinaire. En s'appuyant sur les concepts de « nordicité » et d'« hivernité » culturelles et sur la définition du Nord considéré comme « d'abord et avant tout un discours culturel, appliqué

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

par convention à un territoire donné⁷ », on peut étudier les évolutions historiques et les variations de ce discours, et par conséquent l'évolution de l'idée de l'Arctique et de l'idée du Nord.

Une telle position intellectuelle permet de poser un regard qui considère les apports scientifiques, historiques, sociaux et artistiques par l'entremise des représentations, source de motivations et de propositions de la science, vecteurs de changements humains et sociaux, déterminants de l'histoire et suite conséquente de réalisations artistiques. Ainsi, cette perspective permet une rencontre inédite, sur un terrain commun, de différentes traditions du savoir. Celles-ci convergent pour tenter de réaliser, comme l'ont longtemps appelée les penseurs du Nord et de l'Arctique, une approche « interdisciplinaire », et « pluriculturelle », seule possible pour tenir compte de la complexité et de la fragilité — d'un point de vue environnemental, social et culturel — de cet écosystème.

En défendant l'idée d'une conception circumpolaire et non plus territoriale du monde froid, on pose ce dernier comme un tout qui appelle des solutions, des réflexions et des positions communes, tout en tenant compte des différentes cultures et langues qui le composent. Dans ce contexte, il apparaît impossible de proposer une vision recevable du monde froid sans

⁷ Daniel Chartier, « Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives », Joë Bouchard, Daniel Chartier et Amélie Nadeau [dir.], *Problématiques de l'imaginaire du Nord en littérature, cinéma et arts visuels*, Montréal, Université du Québec à Montréal, Département d'études littéraires et Centre de recherche Figura sur le texte et l'imaginaire, coll. « Figura », 2004, p. 7.

VERSION FRANÇAISE

l'articuler de manière plurilingue, pluriculturelle et, souvent, conflictuelle.

La recherche en études culturelles sur le Nord, prenant appui sur un examen des représentations culturelles, vise donc un renouvellement des études sur les rapports de l'homme à son imaginaire, par une analyse discursive des enjeux du Nord, de l'Arctique et de l'hiver, ainsi que par une approche plurinationale, pluridisciplinaire et pluraliste.

La considération des aspects culturels et humains fait partie intégrante et nécessaire de toute recherche *sur* et *dans* le Nord; pourtant, c'est là tout un pan souvent oublié ou négligé des politiques arctiques et nordiques, des ententes visant la gouvernance du monde froid, ainsi que des projets de recherche scientifique ou technique. Par exemple, l'entente historique conclue avec les Cris et les Inuits du Nord du Québec en 1977, la *Convention de la Baie-James et du Nord québécois*⁸, souvent citée en modèle des premières ententes contemporaines entre un État et des peuples autochtones, ne fait aucunement mention des cultures autochtones, outre les pratiques traditionnelles qui ont des répercussions directes sur l'utilisation conjointe ou exclusive du territoire. Ignorer les aspects culturels et humains du Nord conduit à nier la complexité des rapports et des représentations circumpolaires, et peut conduire à l'établissement de politiques mésadaptées au territoire. En ce sens, il convient de réfléchir sur les principes, la méthodologie et les pratiques qui déter-

⁸ Sur cet important traité et ses suites, voir par exemple Alain-G. Gagnon et Guy Rocher [dir.], *Regard sur la Convention de la Baie-James et du Nord québécois*, Montréal, Québec/Amérique, 2002.

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

minent et fondent la définition du Nord et de l'Arctique dans une perspective socioculturelle, puisqu'elles ont des incidences politiques et éthiques fondamentales.

Il faut rappeler quelques principes de base et quelques positions intellectuelles sur la définition de l'Arctique, parmi lesquels : la variété des termes qu'elle couvre; la nécessité d'une perspective circumpolaire; la pluridisciplinarité; la prise en compte des points de vue autochtones et allochtones; les aspects « naturels » et urbains; le multilinguisme; l'interculturalisme; et enfin, le besoin de proposer un nouveau vocabulaire pour « recomplexifier » l'Arctique.

Un rapide inventaire des termes utilisés pour désigner et circonscrire le monde froid dévoile une superposition de définitions qui se recourent et se distinguent les unes des autres, et qui sont parfois employées sans discernement : il y a bien sûr les termes « Arctique », « Antarctique », « Région polaire » et « Cercle arctique », qui renvoient à des territoires assez bien définis, mais dont la rigidité des frontières est remise en question par les géographes. Puis, il y a le « Nord », le « monde froid », voire l'« hiver », qui renvoient à des considérations plus mouvantes, variables selon la perspective du locuteur : qu'est-ce qui est froid ? Où est le Nord, selon que l'on se place à Londres, à Mexico, à Buenos Aires, à Nuuk, à Iakoutsk ? Ensuite, il y a des ensembles historico-politiques : la Scandinavie, la Russie, la Sibérie, le Canada, le Nunavik, l'Alaska. Enfin, il y a des regroupements qui se superposent à ces ensembles : le monde inuit, la région Nord-Atlantique, l'aire circumpolaire, l'aire circumnordique, etc. Chaque terme porte des valeurs, une insistance sur certaines

VERSION FRANÇAISE

caractéristiques (la géographie, la politique, la langue, la culture, le climat) et en néglige d'autres; chaque terme déplace par son emploi l'usage des autres notions qui définissent de manière générale le monde froid, polaire, arctique, nordique et hivernal. Prendre conscience de l'existence de ces notions permet, à tout le moins, de préciser l'objet de sa pensée et de sa recherche nordique.

La plupart des penseurs du monde arctique insistent pour que l'on considère la région comme « un tout » circumpolaire, comme la somme de ses différents États, nations, cultures, histoires et rapports. L'Arctique doit pouvoir se définir par lui-même comme une idée, alors qu'historiquement il a plutôt été pensé, défini et gouverné, depuis un siècle surtout, par les influences parallèles de puissances du Sud. Iqaluit a longtemps été déterminée par Ottawa, Fairbanks par Washington, Nuuk par Copenhague et Iakoutsk par Moscou. On l'a vu, d'un point de vue imaginaire occidental, l'Arctique tel que posé par la culture est le produit combiné des cultures anglaise, allemande et française, auxquelles s'est ajoutée la culture populaire états-unienne. D'un point de vue de l'exploitation matérielle, les voies ferrées transportent du Nord les minerais dont a besoin le Sud pour son développement, les lignes électriques apportent l'électricité aux grandes villes, les routes permettent au bois de joindre ses « marchés » du Sud. Le Nord est pensé par la culture « sudiste » et il répond à ses besoins matériels. De ce point de vue, il ne faut pas être surpris de constater une simplification des formes et des fonctions quand il est question des représentations culturelles du Nord et

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

de l'Arctique⁹ : lointain, vide, pur, « en danger », « fascinant », blanc, froid et glacé, le « Nord » trouve ses caractéristiques hors de lui¹⁰, dans une pensée qui le circonscrit en fonction de besoins imaginaires et matériels du Sud. Une vision « circumpolaire » imposerait au contraire de le considérer *en soi*, de manière ontologique et définitoire; de prendre en compte les liens qui unissent les différentes parties qui le composent, ainsi que les distinctions entre leurs cultures, leurs positions et leurs historicités. Cette vision permet à la fois de poser le « Nord » comme un tout autodéfinitoire et comme un tout varié qui en dévoile la richesse et la complexité.

Car il y a un prix, selon le linguiste et géographe québécois Louis-Edmond Hamelin, à considérer l'Arctique dans une perspective monodisciplinaire : « L'approche mono-disciplinaire ne permet pas de produire assez de connaissances pertinentes et nécessaires à la compréhension d'une question, toujours complexe¹¹. » Par sa fragilité, par son exception climatique, par le degré de sous-connaissance qui le caractérise, le « Nord » doit être considéré d'un point de vue pluridisciplinaire, « holiste » si on le veut — ce

⁹ Sur les rapports de simplification et de complexité, liés au concept d'écologie dans une œuvre contemporaine, voir par exemple mon article sur l'artiste circumpolaire Patrick Huse : « Simplification / Complexity of the Arctic: The Work of Norwegian Artist Patrick Huse », Patrick Huse, *Northern Imaginary. 3rd Part*, Oslo, Delta Press et Pori Art Museum, 2008, p. 49-53.

¹⁰ Sur quelques caractéristiques du Nord comme discours, voir Daniel Chartier, « Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives », p. 9-26.

¹¹ Louis-Edmond Hamelin, *Écho des pays froids*, Sainte-Foy, Les Presses de l'Université Laval, 1996, p. 86.

VERSION FRANÇAISE

qui rejoint les notions inuites de « nuna » et de « sila ». Ce qui est vrai pour toute autre région l'est encore plus pour un tel socio-culturo-écosystème fragile. Cela implique un dialogue constant entre les sciences pures et les sciences sociales, mais aussi entre les sciences sociales et les études culturelles, et entre les études culturelles et les pratiques de création culturelle. Ce point de vue pluridisciplinaire n'est pas un luxe de l'esprit : c'est une exigence qui devrait être imposée à tout projet de recherche, d'intervention et d'exploitation nordiques.

Certains géographes ont comparé l'Arctique à la Méditerranée, non en raison de son climat, bien sûr, mais parce que vivent autour du pôle des populations issues d'une riche variété d'origines, à la fois autochtones (Inuits, Cris, Sâmes, Innus, etc.) et allochtones (Islandais, Finlandais, Russes, États-Uniens, etc.). Une recherche sur le Nord qui ne considérerait que l'une ou l'autre des perspectives autochtone ou non autochtone conduirait nécessairement à une mésinterprétation de la région. L'exclusion de l'une ou de l'autre ne permet pas de considérer l'ensemble des relations qui sont en jeu dans le Nord.

Il existe une prescription importante du point de vue de l'éthique de la recherche : comme les voix autochtones ont historiquement été ignorées et sont peu conservées dans les institutions culturelles, elles requièrent aujourd'hui une attention particulière. Je donne ici l'exemple du village de Hebron, sur la côte du Labrador. Ce village, occupé par les Inuits, administré par les missionnaires moraves au nom du gouvernement de Terre-Neuve, et approvisionné par la Compagnie de la Baie-d'Hudson, a été sauvagement

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

fermé par une décision administrative en 1959. Aujourd'hui, si l'on souhaite reconstruire les événements qui ont conduit à cette tragédie — plusieurs Inuits, déplacés de force, sont décédés dans les années qui ont suivi la fermeture de leur village —, on pourra lire les archives gouvernementales à Terre-Neuve; on retrouvera aussi facilement les relevés et rapports de la Compagnie de la Baie-d'Hudson, qui ont fait l'objet de publications et de sauvegarde patrimoniale; on consultera aussi aisément les minutieuses correspondances des missionnaires moraves, qui ont toutes été numérisées et qui sont disponibles aux archives de la congrégation. Mais que manque-t-il ? Les réactions, les opinions et les voix des Inuits, qui, ne disposant d'aucun instrument institutionnel pour conserver leur mémoire, ont disparu. Le point de vue autochtone nécessite de la part du chercheur une attention spéciale pour émerger; parfois, à défaut de le retrouver, il faudra laisser une place pour une « histoire du silence », significative des enjeux et rapports de force dans le Nord, pour éthiquement et honnêtement raconter certains événements historiques. L'histoire de Hebron, que Carol Brice-Bennett qualifie de « dépossession¹² », en est un cas manifeste, mais certes pas unique dans le monde arctique.

¹² L'essai de Carol Brice-Bennett retrace l'histoire et les conséquences d'un déplacement involontaire de population autochtone au Labrador; ce cas n'est pas unique, et d'autres déplacements forcés (en Alaska, au Groenland, en Russie) ont eu des répercussions aussi tragiques (Carol Brice-Bennett, *Dispossessed: The Eviction of Inuit from Hebron, Labrador*, Montréal et Nain (Labrador), Imaginaire | Nord et Government of Nunatsiavut, coll. « Isberg », 2017).

VERSION FRANÇAISE

Les représentations populaires de l'Arctique le présentent le plus souvent comme un monde blanc, froid, éloigné, inhabité et inhabitable, glacé et vide. Il va sans dire que l'Arctique est vu dans ce sens comme non urbain et « naturel » : au-delà de l'écoumène, il symbolise pour la culture un espace de vacuité et de désolation. Il faut admettre que la région arctique est peu peuplée, si on la compare aux zones plus tempérées. La disposition démographique de la Terre illustre clairement une concentration de la population humaine dans le large pourtour de la zone équatoriale. Pourtant, le monde froid compte aussi des villages, des villes et même des métropoles, qui font face à des défis humains, sociaux, techniques, culturels et énergétiques considérables, en plus d'une alternance prononcée entre les saisons estivale et hivernale, qui oblige à la construction de doubles équipements architecturaux. Montréal, par exemple, avec ses 3,5 millions d'habitants, peut être considérée — non en raison de sa latitude à 45 degrés, mais en fonction de la sévérité et de la durée de son hiver — comme la grande ville (de plus d'un million d'habitants) la plus froide au monde. Que signifie, hors des contraintes directement climatiques, vivre dans une ville au climat en alternance subtropical et subarctique, si on l'évalue d'un point de vue culturel et social ? L'incidence des conditions nordiques sur le milieu bâti, la planification urbaine, la gestion des ressources et l'adaptation collective et individuelle des modes de vie a été peu considérée jusqu'à présent, notamment parce que l'image populaire du Nord renvoie plutôt à une région peu habitée, désolée et de faible population. Or ce n'est pas toujours le cas. Ici encore, l'imaginaire fait écran pour saisir la complexité du Nord et de

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

l'Arctique. Pour bien comprendre le monde circumpolaire, il importe ainsi de prendre en considération les problématiques urbaines et non urbaines qui le caractérisent.

Pour arriver à comprendre les points de vue différents qui s'opposent et interagissent dans le monde circumpolaire, il faut reconnaître à quel point plusieurs langues, qu'elles soient autochtones, allochtones et étrangères, en ont construit l'idée et les paradigmes. Des langues peu parlées dans le monde mais l'étant dans le Nord (par exemple, le danois et le norvégien) ont eu une grande incidence sur la définition de l'Arctique, notamment en raison des explorateurs originaires de ces pays et qui ont publié de nombreux récits de leurs voyages. Des langues étrangères, par exemple l'allemand, ont peu de lien avec l'exploration ou l'expansion coloniales du Nord, mais jouent un rôle essentiel dans sa compréhension. Enfin, la région circumpolaire est celle où les langues autochtones demeurent les plus vivantes au monde : le cri, l'inuktitut, le groenlandais, le iakoute, bien que leur connaissance hors de leurs zones primaires soit limitée, demeurent des langues usuelles, de création et de transmission culturelles. Il faut donc prévoir une dimension multilingue dans tout projet de recherche sur le Nord et l'Arctique et reconnaître que le monolinguisme ou même le bilinguisme conduisent à une vision biaisée ou incomplète du Nord. Les solutions, quoique lourdes, sont multiples : la connaissance personnelle de plusieurs langues, la traduction ainsi que les équipes plurilingues, qui permettent d'aplanir la méconnaissance des enjeux.

VERSION FRANÇAISE

Le Nord constitue un « laboratoire interculturel ». Par habitude, nous voyons dans les villes du XX^e siècle les premiers foyers des échanges interculturels. Pourtant, les postes isolés de l'Arctique ont souvent été, dès leur fondation, des lieux de convergence d'hommes et de femmes venus de différentes cultures, en situation de contact et d'échange : c'est à la fois le cas des missions, puis des mines, des sites de construction de barrages, voire des lieux de réclusion, qui comptaient sur une population aux cultures variées, venue à la fois de différentes régions des pays concernés et, par l'immigration, de l'étranger. De plus, chaque culture circumpolaire est le produit d'une synthèse de deux ou plusieurs cultures, du Sud ou du Nord. Les interactions pluriculturelles sont ainsi définitoires du Nord et de l'Arctique. Selon les lieux, il existe une mixité plus ou moins grande, plus ou moins harmonieuse entre les origines autochtones et allochtones. L'identité groenlandaise, par exemple, est aujourd'hui une synthèse de plusieurs cultures inuites centenaires, alliées à celles des missionnaires, des colonisateurs danois et à une immigration récente.

La circumpolarité, la pluridisciplinarité, l'autochtonité, l'urbanité, le multilinguisme et l'interculturalisme imposent chacun des précautions méthodologiques pour la recherche sur le Nord et l'Arctique, et ils sont des prérequis sans lesquels la région circumpolaire se retrouve une fois de plus « simplifiée » et dénuée de sa capacité à se penser par elle-même. De plus, comme l'a démontré dans ses travaux Louis-Edmond Hamelin, le « Nord » appelle à la création de termes nouveaux et d'un vocabulaire propre pour rendre

QU'EST-CE QUE L'IMAGINAIRE DU NORD ?

compte de sa spécificité et de son originalité¹³. Ces néologismes, parmi lesquels on compte des termes aujourd'hui entrés dans la langue courante, comme « nordicité », « hivernité », « glissité », inventés pour la langue française, mais largement traduits dans plusieurs autres langues circumpolaires, permettent d'ouvrir un chantier nouveau pour la recherche sur le Nord, qui se doit d'être respectueuse à la fois des différences qui composent la région et des convergences qui en fondent la différence par rapport au reste du monde.

Conclusion

Il faut considérer, dans toute recherche sur le Nord et l'Arctique, les aspects culturels et humains, bien que ceux-ci aient été minorés par la tradition occidentale, qui projette sur le monde froid ses « rêves arctiques » — pour reprendre l'expression de Barry Lopez¹⁴ —, par un imaginaire riche, un système de signes fascinant, construit par des siècles de discours, mais dont ont précisément été exclues les considérations de ceux qui y vivent, ainsi qu'une part de la réalité géographique de la région. Il faut proposer et défendre l'idée

¹³ De Louis-Edmond Hamelin, outre *La Nordicité du Québec* (Québec, Presses de l'Université du Québec, 2014), voir *Écho des pays froids, Discours du Nord* (Québec, GÉTIC, Université Laval, coll. « Recherche », 2002); *Le Québec par des mots. Partie II : L'hiver et le Nord* (Sherbrooke, Presses de l'Université de Sherbrooke, 2002).

¹⁴ Barry Lopez, *Arctic Dreams. Imagination and Desire in a Northern Landscape*, New York, Scribner, 1986, 464 p.

VERSION FRANÇAISE

de « recomplexifier » le Nord, l'hiver et l'Arctique, pour rétablir une « écologie du réel » qui tienne compte de la richesse et de la variété du monde circumpolaire. Pour y arriver, il faut défendre les hypothèses selon lesquelles (a) le Nord et l'Arctique se composent de lieux en interaction constante; (b) les aspects culturels et humains prédéterminent le rapport au territoire; (c) le Nord et l'Arctique doivent être envisagés de manière pluriculturelle et circumpolaire, selon une perspective interdisciplinaire; (d) une conception circumpolaire pose le Nord comme un tout qui appelle des solutions, des réflexions et des positions communes, tout en tenant compte des différentes cultures et langues qui le composent, d'une manière plurinationale, plurilingue, pluriculturelle et, souvent, conflictuelle.

Sans ce double effort, d'abord de compréhension et de remise en question du système de signes qu'est l'imaginaire du Nord, d'un point de vue pluriculturel et historique, puis de précaution éthique par des principes de réalisation de la recherche, multidisciplinaire, plurilingue et en accord avec l'objet étudié, le Nord, l'hiver et l'Arctique demeureront des espaces vidés de leur richesse culturelle et propres à la reconduction de lieux communs.

Daniel Chartier

Université du Québec à Montréal

Hva er forestillingene om det nordlige? Etske prinsipper

Oversatt fra fransk til norsk av Solveig Helene Lygren
og Birgitte Vågnes Bakken

Abstrakt – «Det nordlige» har gjennom århundrer blitt forestilt og fremstilt av kunstnere og forfattere fra den vestlige verden. Som følge av gradvis oppsamling av ulike diskursive lag, har med tiden «forestillinger om det nordlige» oppstått. Dette nordlige dekker både Skandinavia, Grønland, Russland, det høye nord og polene. Det er imidlertid bare et århundre siden de vestlige nådde Nordpolen, noe som gjør at det «nordlige» er produktet av et dobbelt blikk, ett fra utsiden – fremstillingene, som oftest vestlige – og ett fra innsiden – de nordlige kulturene (inuittiske, skandinaviske, cree-, etc.). De første er ofte forenklede, mens de andre er miskjente. Hvis vi ønsker å studere det «nordlige» i et helhetsperspektiv, må vi derfor stille oss to spørsmål: Hvordan kan man definere det nordlige gjennom det forestilte? Og hvilke etske prinsipper må vi ta i betraktning for å kunne studere de nordlige kulturene i et helhetsperspektiv som inkluderer de som er blitt marginalisert av sørligere kulturer? I denne teksten svarer jeg på disse to spørsmålene, først ved å definere hva forestillingene om det nordlige er, deretter ved å legge frem et inkluderende program for en mer sammensatt forståelse av det kulturelle Arktis.

Gjennom århundrer har vestlige kunstnere og forfattere forestilt seg og skildret den kalde verden. Denne fremstilles gjennom ulike forestillinger om «det nordlige»¹, Skandinavia, Grønland, Arktis, polene og vint-

¹ I den franske originalteksten brukes uttrykket «de Nord», som vi har valgt å oversette med «det nordlige» for å vise at det ikke bare er tale om et geografisk område som Norden eller lignende, men at det er et begrep som innbefatter både geografiske, kulturelle, kunstneriske og menneskelige aspekter. Noen steder i teksten, hvor det fremkommer at det er snakk om det nordlige som et geografisk område, bruker vi «de nordlige områdene» eller «nordområdene».

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

ren, som oftest presentert som en forenklet helhet ved hjelp av horisontale former, og farger som hvit, lys blå og blek rosa. Forestillingene bygger på forekomsten av is, snø og alt som er kaldt, samt på moralske og etiske verdier knyttet til solidaritet. De spiller også på en forbindelse til «det hinsidige», der Arktis begynner, ved enden av det europeiske økumene, det bebodde og begripelige Europa, og ved begynnelsen av «det naturlige», en ukjent, øde og ubebodd verden langt borte: Det høye nord. Samlet utgjør disse fremstillingene et tegnsystem, som jeg her kaller «forestillinger om det nordlige».

I likhet med alt forestilt rom er fremstillingen av «det nordlige» produktet av et dobbelt blikk, ett fra utsiden og ett fra innsiden. Vi kan derav skille mellom fremstillinger *av* det nordlige og fremstillinger *fra* de nordlige kulturene. Fremstillingene *av* det nordlige er hovedsakelig skapt gjennom tyske, franske, engelske og amerikanske forestillinger, og disse skiller sjelden mellom ulike kulturelle rom innenfor et område. De fokuserer på Arktis og polene, men tar lite hensyn til kulturene (inuitter, samer, cree, innuer, skandinaver, etc.) som stammer fra disse områdene. Fremstillingene *fra* de nordlige kulturene har noen ganger en utstrekning utover seg selv, noe som særlig gjelder de skandinaviske kulturene, hvis mottakelse i Europa nyter godt av positivt forutinntatte holdninger. Dette gjelder imidlertid ikke for urbefolkninger, som lenge har blitt marginalisert, ofte med den retoriske hensikt å styrke bildet av et ubebodd og ubeboelig Arktis, gjerne støttet av vedvarende politiske og etniske fordommer. Fremstillingene *av* det nordlige, skapt utenfra, og fremstillingene *fra* de nordlige kulturene, skapt i de nordlige områdene, møtes i liten grad, men fremstår derimot

NORSK VERSJON

ofte som to ulike diskursive lag, til tross for at de begge har samme område som referansepunkt. Denne avstanden gjelder også for andre grupper fremstilte områder, men forestillingen om det nordlige, og særlig den om «det høye nord», skiller seg ut ved at den tar utgangspunkt i en diskurs snarere enn i det som er blitt erfart gjennom århundrene. Dette har ført til at de to diskursive lagene, et skapt innenfra og et utenfra, eksisterer uavhengig av hverandre. Tenk bare på at mennesket nådde Nordpolen først for et århundre siden, men har forestilt seg stedet i flere årtusener. Det er også viktig å huske på to sosiopolitiske fenomen som har hatt innvirkning på fremstillingen og mottakelsen av det nordlige og Arktis: På den ene siden har man koloniseringen av urbefolkningene, som har bidratt til at de kulturelle og menneskelige aspektene ved de kalde områdene har blitt brakt til taushet. På den andre siden ser man den generelle tendensen til styring av nordområdene, som er dominert av hovedsteder og sørlige myndigheter og som administrerer disse områdene ut fra egen kjennskap (som er lite basert på erfaring) og egne behov, med den avstanden dette kan skape.

Det finnes altså fremstillinger, ofte vestlige, av det nordlige og Arktis, som er lett tilgjengelige og som i høy grad preges av (forenklet) semiologisk overensstemmelse seg imellom. I tillegg finnes det fremstillinger av nordlige kulturer, noen av dem velkjente, som Russland og Skandinavia, og andre fullstendig miskjente, som andre sirkumpolare områder og urbefolkninger. For å studere «det nordlige» i et helhetsperspektiv, som tar hensyn til mangfoldigheten og de ulike gradene av synlighet, må vi derfor stille to spørsmål som først kan virke uvesentlige, men som i

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

vårt tilfelle er nødvendig å artikulere: Hvordan kan man definere det nordlige gjennom det forestilte? Og hvilke etiske prinsipper må vi ta i betraktning for å kunne studere de nordlige kulturene i et helhetsperspektiv som inkluderer de som er blitt marginalisert av sørligere kulturer?

Å definere det nordlige gjennom det forestilte

De ulike diskursene om det nordlige, vinteren og Arktis kommer i ulike former, stammer fra ulike kulturer og har blitt samlet i løpet av århundrene etter et dobbelt prinsipp om syntese og konkurranse.² Diskursene kan kategoriseres enten ut fra en gitt periode eller ut fra den bestemte kulturen de fremstiller, og utgjør samlet det vi kan kalle «forestillinger om det nordlige». Det er snakk om et bevegelig og mangfoldig tegnsystem, som fungerer på ulik måte ut fra hvilken kontekst noe fremstilles eller mottas i.

Da jeg noen tiår tilbake utviklet begrepet «forestillingen om det nordlige», lanserte jeg samtidig en hypotese om at det på tvers av de ulike kulturene *i* nord og de motstridende oppfatningene *om* det nordlige, også finnes et felles estetisk fundament bestående av unike, kulturspesifikke tegn for det nordlige. Disse tegnene, samlet av den vestlige kulturen gjennom mange århundrer for å skulle representere ideen om det nordlige, har stadig blitt bearbeidet gjennom nye tilskudd.

² Prinsippet om syntese og konkurranse i diskurser, som er inspirert av Wolfgang Isters leseorienterte litteraturteori og som plasserer seg i den estetiske responsteorien, har jeg lagt frem i Daniel Chartier: *L'émergence des classiques*, Montréal: Fides, 2000.

NORSK VERSJON

Forestillingene om det nordlige bekrefte og korrigeres gjennom for eksempel at ur- og lokalbefolkning omsider tas med i beregningen. Tegnsystemet er levende og «organisk», og det forandrer seg gjennom historiske perioder og i ulike kontekster. I likhet med alle tegnsystemer, åpner det for en forestilt verden ved bruk av tegnene, noe som gjør det mulig å representere hele konseptet om det nordlige bare gjennom noen få tegn. Fargen lyseblå har blant annet denne funksjonen: det er nok å bruke denne for å fremkalle et kaldt og uendelig univers av is hos tilskueren, som blir hensatt til tegnsystemet i sin helhet.

I likhet med alle systemer utformet over flere århundrer med diskurser, må man, for å kunne problematisere dets grunnlag og løsrive seg fra det, dekonstruere og omarbeide det. Samtidig må man forholde seg til det eksisterende systemet, slik skaperne av den første inuittiske langfilmen, *Atanarjuat*,³ gjorde med hell da de tok utgangspunkt i en av de vestlige idéene om Arktis, for så å dekonstruere denne.⁴ De visste at seerne *bebersket kodene* i tegnsystemet som utgjør forestillingene om det nordlige, skapt av den vestlige kulturen, og brukte disse som utgangspunkt da de presenterte sin egen forestilling av dette stedet. Denne forestillingen blir en del av den eksisterende forestillingen, men tilfører den nye problemstillinger og koder. På samme måte som i Wolfgang Iser's resepsjonsteori,⁵ blir nye

³ Zacharias Kunuk: *Atanarjuat*, 2001.

⁴ For eksempel er det ingen av rollefigurene som lider av sult eller kulde (i en scene løper til og med en mann naken over isen), ingen går seg vill, noen inuitter er utspekulerte og illojale, konflikten er sammensatte.

⁵ Wolfgang Iser: *L'acte de lecture. Théorie de l'effet esthétique*. Brussel : P. Mardaga, 1985 (1976).

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

tilskudd som nærer og former forestillingen tatt opp i kulturen, hvor de samles og stilles opp mot hverandre. Forestillingen bevarer sin koherens samtidig som den former seg etter nye kulturelle forslag, filtrert gjennom en oppsamlingsprosess og gjennom konkurranse. *Atanarjuats* suksess har for eksempel gjort at filmen har hatt betydning for den samtidige forestillingen om det nordlige. Selv om den ikke hadde blitt prisbelønnet, hadde den likevel helt klart bidratt til samlingen av diskurser i denne forestillingen, men uten å omskape kodene på en like omfattende måte.

Å ta utgangspunkt i begrepet «forestillinger om det nordlige» forandrer slik måten vi forstår området på, ved å inkludere de kulturelle og menneskelige aspektene, og ved å igangsette et kritisk arbeid for å kunne få en forståelse av de estetiske og politiske forbindelsene mellom fremstillingene, forestillingene, området og kulturen. Å tale om forestillinger om det nordlige forutsetter at det finnes en forbindelse mellom de kulturelle fremstillingene og selve området, noe som ikke er åpenbart, og antyder at en faktisk forbindelse kan forme fremstillingene som stammer derfra. Dette kan late til å motsette seg modernismens og postmodernismens syn på ulike kunstformers selvstyre, men ikke hvis man betrakter et «sted» som noe kulturelt konstruert, altså noe som også er styrt av sine egne regler. Det gjenstår å etablere det som kunne vært forbindelsene mellom det *faktiske* stedet og det *fremstilte* stedet, og som gjør at vi kan snakke om «idéen om stedet». I denne sammenheng må «idéen om stedet» defineres som summen av alle de konkurrerende diskursene som opptrer samtidig. Dette innebærer både at et reelt sted ikke nødvendigvis fremkaller en idé om (det samme) stedet, og det motsatte, at diskursen ikke kan

NORSK VERSJON

være fullstendig løsrevet fra *virkeligheten*. Stedene danner en kompleks menneskelig konstruksjon, skapt av erfaringer, diskurser, det konkrete, kulturelle uttrykk og minner. Alt dette viser til noe reelt, til mennesket og til virkeligheten, uansett om det er snakk om en konkret, diskursiv eller semiologisk virkelighet.

Et spørsmål de vanlige diskursene ikke tar opp, men som en med rette kan stille, er om de nordlige områdene kan betraktes som et «sted» i den vestlige kulturen. I fremstillingene av det nordlige blir de nordlige områdene historisk sett betraktet som «rom» heller enn «sted». Vektlegging av kjennetegn knyttet til ødemarken, uendeligheten og det hvite har ført til fremveksten av et system av fremstillinger som ikke alltid tar hensyn til menneskenes erfaring i området.⁶ Gjennom århundrene har ikke den fenomenologiske kjennskapen til nordområdene vært en selvfølge. Mennesker i Vesten foretrekker å betrakte det nordlige som noe hinsides det bebodde og begripelige. Likevel er det et område de anstrenger seg for å utforske, men dette har tatt tid, ettersom de har forestilt seg det ut fra tekster og dermed har unndratt seg kunnskap. I tillegg har de utelatt - først som følge av manglende kunnskap, deretter som følge av ekskludering - en del av diskursene til de som bor i områdene (inuitter, samer, cree, etc.) I mange av de vestlige fortellingene fremstår det nordlige dermed som en nøytral matrise hvor man kan plassere en fortelling uten å ta hensyn til den konkrete eller fenomenologiske virkeligheten, så lenge man respekterer en rekke kriterier og kjennetegn som er ty-

⁶ For mer om forholdet mellom rom og sted i det nordlige, se samlingsverket, *Le lieu du Nord. Vers une cartographie des lieux du Nord*, Québec: Presses de l'Université du Québec og Stockholm: Université de Stockholm, coll. «Droit au pôle», 2015.

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

pisk for forestillingene om det nordlige. Fra oppdagelsesfortellingen til poesien, fra populærkulturens film og reklame til billedkunsten, og fra sangen til eventyrromanen, har en hel forestilling blitt bygget på fremstillinger og oppfatninger. Denne forestillingen viser til noe «nordlig» som historisk kan betraktes som en menneskelig og kulturell konstruksjon som innehar en estetisk koherens som går på tvers av epoker, sjangre, teknikker og kulturer, samtidig som den tilpasser seg ulike kontekster. De tilhørende kulturene består av noe individuelt og noe universelt, og dette utgjør samlet en syntese som er deres egen og som definerer dem. Island er på sitt eget vis en del av forestillingen om det nordlige, samtidig som andre kjennetegn (øystatusen, tilhørigheten til Skandinavia etc.) også definerer denne kulturen.

Å snakke om forestillingen om det nordlige bringer altså med seg refleksjon over ideen om stedet, over forbindelsene mellom det konkrete, opplevde, forestilte og fremstilte stedet, over tegnsystemet som både er systemisk og diakront, over det flerkulturelle, over det særegne og universelle og over inkluderingen og ekskluderingen av visse diskurser i den vestlige definisjonen av det nordlige. Dette er et metodisk, teoretisk, estetisk og politisk arbeid som fortsatt er i utvikling, men som gir mulighet for å omsider inkludere de kulturelle og menneskelige aspektene i den generelle forskningen på det nordlige og på Arktis.

Det særegne ved dette tegnsystemet er at det er lite utforsket av dem som bor der, samtidig som det i stor grad er blitt skapt av andre som aldri har vært i disse områdene. Forestillingen og diskursene utgjør et solid og sammenhengende system, men det skaper store utfordringer når det gjelder å få virkelig kjennskap til

NORSK VERSJON

den kalde verden, for å kunne anerkjenne diskursene, behovene og ønskene til de som bor der, slik at disse skal kunne forestille seg den kalde verden *selv*, i et kulturelt og intellektuelt perspektiv. Dette tegnsystemet har gjennom historien basert seg på diskurser utenfra om områder som er blitt betraktet som rom heller enn som sted, og som er blitt styrt av myndigheter som kun betrakter dem som ressurser for å sikre deres eget livsgrunnlag. Derfor er det nødvendig med noen forbehold og etiske påbud i arbeidet for å gripe hele dets kompleksitet.

Et inkluderende program for en mer sammensatt forståelse av det kulturelle Arktis

Å studere forestillinger om det nordlige innebærer å analysere de ulike fremstillingene av det nordlige, av vinteren og av Arktis i et tverrfaglig, flerkulturelt og sirkumpolart perspektiv. Ved å basere seg på konsepter som kulturell «nordlighet» og «vinterhet», samt en definisjon av det nordlige som «først og fremst en kulturell diskurs, vanligvis brukt om et gitt område»,⁷ kan man studere den historiske utviklingen og variasjonene av denne diskursen. På denne måten kan man også studere utviklingen av ideen om Arktis og om det nordlige.

⁷ Daniel Chartier: «Au Nord et au large. Représentations du Nord et formes narratives », i *Problématiques de l'imaginaire du Nord et littérature, cinéma et arts visuels*, Joë Bouchard, Daniel Chartier og Amélie Nadeau (dir.), Montréal : Université du Québec à Montréal, Département d'études littéraires et Centre de recherche Figura sur le texte et l'imaginaire, 2004, s. 7.

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

En slik tilnærming åpner for å betrakte det nordlige gjennom fremstillinger som inkluderer vitenskapelige, historiske, sosiale og kunstneriske bidrag. De kulturelle fremstillingene har ført til vitenskapelige fremskritt og menneskelige og sosiale endringer, og har vært avgjørende for nordområdenes historie og for deres egne kunstneriske produksjoner. Dermed åpner dette perspektivet for et nytt møte, på en felles grunn, mellom ulike kunnskapstradisjoner. Disse møtes i et forsøk på å realisere det tenkere og forskere på det nordlige og Arktis lenge har kalt en «tverrfaglig» og «flerkulturell» tilnærming, som er den eneste mulige tilnærmingen dersom man skal ta hensyn til dette økosystemets kompleksitet og sårbarhet, sett fra et miljømessig, sosialt og kulturelt ståsted.

Ved å forsvare ideen om en sirkumpolar heller enn territorial oppfatning av den kalde verden, fremstiller man sistnevnte som en helhet som krever felles løsninger, refleksjoner og standpunkt, samtidig som man må ta hensyn til de ulike kulturene og språkene som utgjør den. I en slik sammenheng virker det umulig å presentere en akseptabel forestilling om den kalde verden uten å fremstille den som flerspråklig, flerkulturell og med indre motsetninger.

Innen kulturstudier baserer forskningen på det nordlige seg på undersøkelser av kulturelle fremstillinger, med en målsetting om å fornye studiene av forholdet mellom mennesket og dets forestillinger. Dette kan oppnås gjennom en diskursanalyse av spørsmålene som angår det nordlige, Arktis og vinteren, så vel som gjennom en flernasjonal, tverrfaglig og pluralistisk tilnærming.

NORSK VERSJON

Kulturelle og menneskelige aspekter utgjør en integrert og nødvendig del av forskning *på* det nordlige og *fra* et nordlig perspektiv. Dette blir likevel ofte glemt eller neglisjert i politikken som omfatter Arktis og nordområdene, i avtaler om styring av den kalde verden, og i ulike forskningsprosjekter. Et eksempel er den historiske avtalen som ble inngått med urfolket cree og inuittene i Nord-Québec i 1977, *la Convention de la Baie-James et du Nord québécois*,⁸ som ofte betraktes som et eksempel på en av samtidens første avtaler mellom en stat og et urfolk. Urbefolkningens kultur blir overhodet ikke nevnt i avtalen, foruten tradisjonelle praksiser som har direkte følger for delt eller eksklusiv bruk av landområdet. Å ignorere kulturelle og menneskelige aspekter ved nordområdene fører til fornektelse av det sammensatte bildet av sirkumpolare forhold og fremstillinger av det nordlige, og kan føre til en politikk som ikke er tilpasset området. Man bør reflektere over prinsippene, metodologien og praksisene som former og inngår i definisjonen av det nordlige og av Arktis i et sosiokulturelt perspektiv, etter som dette får avgjørende politiske og etiske følger.

Når det gjelder definisjonen av Arktis, må man være klar over noen grunnprinsipper og ideologiske standpunkt. Disse omfatter blant annet variasjonen av terminologi som Arktis dekker, behovet for et sirkumpolært perspektiv, tverrfaglighet, hensyn til urfolks og ikke-urfolks synspunkter, «naturlige» og urbane aspekter, flerspråklighet, interkulturell forståelse, og sist,

⁸ For mer om denne viktige avtalen og dens følger, se for eksempel Alain-G. Gagnon og Guy Rocher (dir.): *Regard sur la Convention de la Baie-James et du Nord québécois*, Montréal: Québec/Amérique, 2002.

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

men ikke minst, behovet for å lage et nytt vokabular for å danne et mer komplekst bilde av Arktis.

En rask gjennomgang av uttrykk som blir brukt for å beskrive og begrense det vi forstår med Arktis, avslører en overlapping av definisjoner som både er sammenfallende og som skiller seg fra hverandre, og som av og til blir brukt uten at man skjelner mellom dem. Begreper som «Arktis», «Antarktis», «polarstrøk» og «den nordlige polarsirkelen» viser til nokså presist definerte områder, men geografer diskuterer likevel hvor rigide grensene her skal være. I tillegg finnes uttrykkene «nord», «den kalde verden», og «vinter», som viser til mer bevegelige konsepter som varierer ut fra hvilket perspektiv man har. Hva er kaldt? Hva er «nord» sett fra London, Mexico, Buenos Aires, Nuuk og Jakutsk? Videre har man historiske og politiske enheter som Skandinavia, Russland, Sibir, Canada, Nunavik og Alaska. Til slutt finnes grupperinger som overlapper disse definisjonene, slik som inuittverdenen, den Nord-Atlantiske regionen, det sirkumpolare området og det sirkumnordiske området. Hvert av begrepene har sin egen betydning som insisterer på visse særpreg (geografi, politikk, språk, kultur, klima) og ekskluderer andre. Bruken av hver term skyver bort andre begreper som på en generell måte definerer den kalde, polare, nordiske og vinterlige verden. Ved å være seg bevisst eksistensen av disse begrepene, kan man, i det minste, presisere det man tenker på og studerer innenfor det nordlige.

De fleste som forsker på den arktiske verden insisterer på at man må betrakte regionen som en sirkumpolar «helhet», som summen av de ulike statene, nasjonene, kulturene, historiene og forholdene. Arktis bør kunne definere seg selv som en egen idé, selv om området

NORSK VERSJON

historisk sett har vært tenkt, definert og styrt av påvirkningskrefter fra sør, spesielt i det siste århundret. Iqaluit ble lenge styrt fra Ottawa, Fairbanks fra Washington, Nuuk fra København og Jakutsk fra Moskva. Vi har sett at Arktis, fra et forestilt vestlig ståsted, slik det fremstilles i kulturen, er et sammensatt produkt skapt i den engelske, tyske og franske kulturen, så vel som i den amerikanske populærkulturen. Når det kommer til materiell utnyttelse, transporterer jernbanen mineraler fra nord til sør, strømlinjer fører elektrisitet til de store byene, og veinettet gjør at skog kan bli transportert til «markeder» i sør. Det nordlige er definert av en «sørlig» kultur og svarer til denne kulturens materielle behov. Således bør man ikke være overrasket over å konstatere en forenkling av former og funksjoner når det er snakk om kulturelle fremstillinger av det nordlige og av Arktis.⁹ Nordområdene blir oppfattet som noe fjerntliggende, øde, rent, «faretruet», «fascinerende», hvitt, kaldt og islagt, og finner sine særpreg utenfor seg selv,¹⁰ i en tankegang som begrenser dem ut fra forestilte og materielle behov fra sør. En «sirkumpolar» visjon tvinger oss derimot til å betrakte det nordlige *i seg selv*, på en ontologisk og definerende måte, og til å ta med i betraktningen det som forbinder de ulike bestanddelene, men også det som skiller de

⁹ Angående forholdet mellom forenkling og kompleksitet i sammenheng med økologiske konsepter i et samtidssverk, se for eksempel min artikkel om den sirkumpolare artisten Patrick Huse i Daniel Chartier: «Simplification / Complexity of the Arctic: The Work of Norwegian Artist Patrick Huse» i Patrick Huse: *Northern Imaginary. 3rd Part*, Oslo: Delta Press og Pori Art Museum, 2008, s. 49-53.

¹⁰ For noen karakteristikker av det nordlige som diskurs, se Daniel Chartier: «Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives» (n. 6), s. 9-26.

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

ulike kulturene, posisjonene og historiene fra hverandre. Dette bildet tillater oss både å presentere det «nordlige» som en selvdefinerende helhet, og å fremvise dens variasjon, rikdom og kompleksitet.

Det koster å betrakte Arktis fra et monodisiplinært perspektiv, ifølge lingvist og geograf Louis-Edmond Hamelin fra Québec. «En monodisiplinær tilnærming tillater oss ikke å produsere viktig kunnskap som er nødvendig for å forstå et så komplekst spørsmål.»¹¹ På grunn av sårbarheten, den særegne klimasituasjonen og mangelen på kunnskap som karakteriserer det «nordlige», må dette bli betraktet fra et tverrfaglig perspektiv, «holistisk» om man vil, som svarer til inuittenes begreper om «nuna» og «sila». Det som er sant for hvilken som helst annen region, gjelder i like stor grad for et slikt sårbart sosiokulturelt økosystem. Dette krever en konstant dialog mellom naturvitenskap og sosialvitenskap, men også mellom sosialvitenskap og kulturstudier og mellom kulturstudier og skapende kunst. Dette tverrfaglige synspunktet er ikke forbeholdt fantasien, men noe man må kreve av alle forskningsprosjekter som griper inn i og gjør bruk av det nordlige.

Noen geografer har sammenlignet Arktis med Middelhavet. Dette er naturligvis ikke på grunn av klimaet, men fordi det rundt Nordpolen lever folkeslag av en rik og variert opprinnelse, både urfolk (inuitter, cree, samer, innuer, etc.) og ikke-urfolk (islandinger, finner, russere, amerikanere, etc.). En studie av nordområdene som bare tar ett av disse perspektivene med i betraktningen, vil nødvendigvis føre til en misoppfatning

¹¹ Louis-Edmond Hamelin: *Écho des pays froids*, Sainte-Foy: Les Presses de l'Université Laval, 1996, s. 86.

NORSK VERSJON

av regionen. Man vil ikke studere helheten av det som står på spill i nordområdene dersom man ekskluderer ett eller flere av disse perspektivene.

Det finnes et viktig påbud når det gjelder etikken i en slik studie. Siden urbefolkningenes meninger historisk sett har blitt ignorert og i liten grad har blitt bevart i kulturelle institusjoner, krever de i dag ekstra oppmerksomhet. Et eksempel er landsbyen Hebron på Labradorkysten. Denne landsbyen, som var bebodd av inuitter, styrt av misjonærer fra Brødremenigheten i Newfoundlands regjerings navn, og forsynt av *Hudson's Bay Company*, ble på en brutal måte stengt etter en administrativ avgjørelse i 1959. Mange inuitter ble tvangsflyttet eller døde i årene etter stengingen av landsbyen. Dersom man i dag vil rekonstruere hendelsene som førte til denne tragedien, kan man lese regjeringsarkivene i Newfoundland. Det er også enkelt å finne rapporter fra *Hudson's Bay Company*, ettersom disse har vært gjenstand for publikasjoner og kulturarv. Det er også enkelt å konsultere de omstendelige korrespondansene til misjonærene, som alle er digitaliserte og tilgjengelige i trossamfunnets arkiver. Så hva er det som mangler? Reaksjonene, meningene og stemmene til inuittene, som ikke har et institusjonelt verktøy for å kunne bevare sitt minne, har blitt borte. For at urbefolkningens synspunkter skal komme for en dag, må forskeren vie dem ekstra oppmerksomhet. Man må av og til, om det ikke kan finnes, gi plass til en «taus historie» som er betegnende for det som står på spill og for maktforholdene i nordområdene. Slik kan man på en etisk og ærlig måte fortelle om visse historiske hendelser. Hebrons historie, som ifølge Carol Brice-Bennett er blitt «frarø-

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

vet» befolkningen,¹² er et godt eksempel, men det er absolutt ikke unikt i den arktiske verden.

Vanlige fremstillinger av Arktis presenterer som regel området som en hvit, kald, fjerntliggende, ubebodd og ubeboelig, frossen og tom verden. Det er selvsagt at Arktis fra dette ståstedet er sett på som ikke-urbant og «naturlig». I kulturen symboliserer Arktis et tomt og øde område hinsides økumenet. Dersom man sammenligner den med mer tempererte soner, må man innrømme at den arktiske regionen er lite befolket. Jordens demografiske disposisjon viser en tydelig konsentrasjon av den menneskelige befolkningen i den store omkretsen rundt den ekvatoriale sonen. Den kalde verden inneholder likevel også landsbyer, byer og til og med metropoler, som står overfor betydelige menneskelige, sosiale, tekniske, kulturelle og energirelaterte utfordringer, så vel som en markant veksling mellom sommer- og vinterårstiden, som krever at man konstruerer doble arkitektoniske utrustninger. Et eksempel er Montréal, som med sine 3,5 millioner innbyggere blir regnet, ikke på grunn av sin breddegrad på 45 grader, men på grunn av dens harde og lange vinter, som den kaldeste storbyen (med mer enn én million innbyggere) i verden. Hva innebærer det, sett bort fra de direkte klimatiske begrensingene, å leve i en by der klimaet veksler mellom subtropisk og subarktisk, dersom man betrakter det fra et sosialt og kulturelt perspektiv? Effekten de nordlige forholdene har

¹² Carol Brice-Bennett's essay beskriver historien og konsekvensene av en ufrivillig flytting av urbefolkningen i Labrador; denne saken er ikke unik, og andre tvangsflyttinger (i Alaska, på Grønland, i Russland) har hatt like tragiske følger. Carol Brice-Bennett: *Dispossessed: The Eviction of Inuit from Hebron, Labrador, Montréal: Imaginaire | Nord, coll. «Isberg», 2017.*

NORSK VERSJON

på det konstruerte miljøet, på den urbane planleggingen, på ressursforvaltningen og på den kollektive og individuelle tilpasningen av levemåte, har i liten grad vært studert frem til nå, nettopp fordi det vanlige bildet folk har av nordområdene viser til en øde region med en liten befolkning. Dette er imidlertid ikke alltid tilfellet. Forenklede forestillinger hindrer oss av og til i å omfavne det nordliges og Arktis' kompleksitet. For å virkelig forstå den sirkumpolare verden, må man derfor inkludere både de urbane og ikke-urbane problematikene som karakteriserer området.

For å forstå de forskjellige synspunktene som motsetter seg hverandre og påvirker hverandre i den sirkumpolare verden, må man anerkjenne i hvilken grad flere språk, det være seg urspråk, ikke-urspråk eller fremmedspråk, har konstruert idéen og paradigmene om den. Språk som er lite snakket på verdensbasis, men som er utbredte i nordområdene (for eksempel dansk og norsk) har hatt stor innvirkning på definisjonen av Arktis, spesielt takket være oppdagere som kom fra disse landene og som har publisert et stort antall reisberetninger. Fremmedspråk, for eksempel tysk, har lite å gjøre med oppdagelsen eller koloniseringen av nordområdene, men spiller en vesentlig rolle i forståelsen av dem. Videre er den sirkumpolare regionen det stedet i verden hvor urspråkene fremstår mest levende. Cree, inuktitut, grønlandsk og jakutisk er fortsatt språkene som brukes for kulturell skapelse og overføring, til tross for at kunnskapen om disse språkene utenfor deres primærsoner er begrenset. Man må derfor inkludere en flerspråklig dimensjon i alle forskningsprosjekter om det nordlige og Arktis, og man må innse at enspråkighet og til og med tospråkighet fører til et ensidig eller ufullstendig syn på det nordlige. Selv

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

om det er krevende, finnes det mange løsninger. Personlig kjennskap til flere språk, oversettelse og flerspråklige team kan rydde misforståelser av veien.

Det nordlige utgjør et «interkulturelt laboratorium». Vi regner vanligvis 1900-tallsbyene som de første stedene for flerkulturelle utvekslinger. De isolerte postene i Arktis har imidlertid, helt siden de oppstod, vært møtestedet for menn og kvinner fra ulike kulturer, både for kontakt og handel. Misjonsarbeid, gruvarbeid, demningskonstruksjon og fengselssoning førte folk dit fra andre regioner i de aktuelle landene og, gjennom innvandring, fra utlandet, da disse aktivitetene var avhengig av en befolkning av varierende kulturer. I tillegg er hver sirkumpolare kultur et produkt av en syntese av to eller flere kulturer, fra sør og fra nord. Flerkulturell interaksjon er derfor karakteristisk for nordområdene og Arktis. De ulike stedene består av en blanding av urfolk og ikke-urfolk, av varierende størrelse og harmoni seg imellom. Et eksempel er den grønlandske identiteten, som i dag er en syntese av flere århundregamle inuittkulturer, kombinert med kulturer som stammer fra misjonærer, den danske kolonimakten og en nylig innvandring.

Sirkumpolaritet, tverrfaglighet, hensyn til urfolk, urbanitet, flerspråklighet og interkulturalitet krever alle metodologiske forhåndsregler i forskningen på nordområdene og Arktis. Uten disse forutsetningene vil den sirkumpolare regionen igjen fremstå «forenklet» og blottet for mulighet til å definere seg selv. I tillegg, som Louis-Edmond Hamelin har vist i sine arbeider, krever det «nordlige» at man lager nye begreper og at man bruker et eget vokabular for å redegjøre for dets

særegenhet og originalitet.¹³ Disse neologismene inkluderer begreper som i dag inngår i dagligtalen. Begreper som *nordicité* (nordlighet), *bivernité* (vinterhet) og *glissité* (glatthet) er konstruerte for det franske språket, men har også i stor grad blitt oversatt til andre sirkumpolare språk. Disse begrepene åpner for et nytt forskningsfelt på det nordlige, som både respekterer ulikhetene som utgjør regionen og de konvergenser som skiller den fra resten av verden.

Konklusjon

I all forskning på det nordlige og Arktis må det tas hensyn til kulturelle og menneskelige aspekter, til tross for at disse har blitt marginalisert av den vestlige tradisjonen. Denne projiserer sine «arktiske drømmer» på den kalde verden, for å låne et uttrykk fra Barry Lopez,¹⁴ gjennom rike forestillinger og et fascinerende tegnsystem. Forestillingene har imidlertid ekskludert betraktningene til de som bor i områdene, i tillegg til en del av den geografiske virkeligheten der. For å gjenetablere en «eksistensens økologi» som tar i betraktning mangfoldigheten og variasjonen i den sirkumpolare verden, må vi fremsette og forsvare en mer kompleks idé om det nordlige, om vinteren og om

¹³ For flere verk av Louis-Edmond Hamelin, i tillegg til *La Nordicité du Québec* (Québec, Presses de l'Université du Québec, 2014), se *Écho des pays froids, Discours du Nord* (Québec, GÉTIC, Université Laval, coll. « Recherche », 2002); *Le Québec par des mots. Partie II : L'hiver et le Nord* (Sherbrooke, Presses de l'Université de Sherbrooke, 2002).

¹⁴ Barry Lopez: *Arctic Dreams. Imagination and Desire in a Northern Landscape*, New York: Scribner, 1986.

FORESTILLINGENE OM DET NORDLIGE

Arktis. For å kunne gjøre det, må vi forsvare hypotesene om at a) det nordlige og Arktis består av steder som kontinuerlig påvirker hverandre gjensidig; b) de kulturelle og menneskelige aspektene forutbestemmer forholdet til området; c) det nordlige og Arktis må forestilles på en flerkulturell og sirkumpolar måte og i et tverrfaglig perspektiv; d) en sirkumpolar oppfatning fremstiller det nordlige som en helhet som fordrer felles løsninger, refleksjoner og posisjoner. Samtidig må en ta hensyn til alle de ulike kulturene og språkene som utgjør denne helheten, som er flernasjonal, flerspråklig, flerkulturell og ofte preget av konflikter.

Man må anstrenge seg for å få en forståelse av og for å kunne problematisere tegnsystemet som utgjør forestillingen om det nordlige. Man må betrakte dette ut fra et flerkulturelt og historisk perspektiv, og ta etiske, tverrfaglige og flerspråklige hensyn i overensstemmelse med studieobjektet. Gjør man ikke dette, blir det nordlige, vinteren og Arktis tømt for det kulturelle mangfoldet, og vi risikerer å videreføre stereotypiene.

Daniel Chartier

Université du Québec à Montréal

Hvad er forestillingen om det nordlige? Ethiske principper

Oversat fra fransk til dansk af Sara Høyrup

Abstrakt – Verdens nord er et opdigtet sted. Op igennem århundrederne har kunstnere og forfattere i den vestlige verden gjort sig forestillinger om og fremstillinger af de nordlige egne. Med tiden og den gradvise ophobning af diskursive lag har det ført til skabelsen af en forestilling om de nordlige egne – det være sig de nordiske lande inklusive Skandinavien eller Grønland, Rusland, Canadas tre nordlige territorier eller polerne. Imidlertid nåede vesterlændingene jo først til Nordpolen i starten af forrige århundrede, og dette forhold har gjort det nordlige til produktet af et dobbeltblik: et blik ude fra de mestendels vestlige forestillinger og fremstillinger og et andet inde fra de nordlige kulturer selv – heriblandt inuitterne, de nordamerikanske indianere og skandinaverne. De vestlige fremstillinger af det nordlige er ofte forsimplede og de lokale kulturers egne opfattelser gerne miskendte. For at kunne studere det nordlige ud fra en samlet betragtning bør vi derfor stille to spørgsmål: Hvordan kan det nordlige defineres gennem forestillinger? Hvilke etiske principper bør ligge til grund for vores syn på de nordlige kulturer med henblik på en samlet forståelse, der inkluderer de kulturer, som sydlige magter og egne har miskendt? Disse to spørgsmål vil jeg besvare i denne tekst. Først vil jeg definere forestillingen om det nordlige og dernæst foreslå en omfattende plan for, hvordan vi kan få øjnene op for polaregningens kulturer i al deres faktiske kompleksitet.

Op igennem århundrederne har vestlige kunstnere og forfattere gjort sig forestillinger om og fremstillinger af den kolde verden. Ved nærmere eftersyn træder flere underkategorier frem: det nordlige, de nordiske lande, Grønland, Arktis, polerne, vinteren ... De bliver som oftest præsenteret i en legering udgjort af en forenkling af formerne (fladhed) og farverne (hvid, lyseblå og lyserøde nuancer), eksistensen af is og sne og hele kulderegisteret, moralske og etiske værdier (solidari-

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

tet). I legeringen indgår også, at her ligger grænsefladen til det hinsides eller begyndelsen på Nordpolen, her er den yderste kant af det beboede Europa og åbningen mod en ”naturlig” verden: ukendt og tom, ubeboet og fjern: det høje nord. Summen af disse fremstillinger udgør et tegnsystem, som jeg for nemheds skyld vil kalde for forestillingen om det nordlige. Fremstillingerne vender jeg tilbage til.

Som det gælder for fremstillinger af ethvert sted, er ”det nordlige” produktet af et dobbeltblik: et blik udefra og et andet indefra, som aftegner sig i henholdsvis fremstillingerne af det nordlige og værkerne fra de nordlige kulturer selv. Fremstillingerne af det nordlige er mest af alt produkter af en tysk, fransk, britisk og sidenhen også amerikansk fiktion om det nordlige. Disse fremstillinger skelner ikke stort mellem de forskellige kulturrum i området og skuer op mod Arktis og polerne uden det store blik for de kulturer, der er opstået dér: inuitter, samer, nordamerikanske indianere, innu-folket, de nordiske nationer og så fremdeles. Værkerne fra de nordlige kulturer rækker under tiden ud over sig selv – det gælder især for de nordiske lande inklusive Skandinavien, som nyder godt af en klart positiv fordom ude i Europa. Det gælder imidlertid ikke for de oprindelige folkeslag, som igennem lang tid er blevet nedvurderet – til tider med det retoriske sigte at styrke billedet af et ubeboet og ubeboeligt polarområde, andre gange grundet sejlivede politiske og etniske fordomme. Under alle omstændigheder mødes de kun sjældent, disse udefrakommende fremstillinger af det nordlige og de nordlige egne faktiske kulturer: De lægger sig mestendels som forskelligartede diskursive lag, skønt de har det samme geografiske område som reference. En sådan afstand kan også iagttages i frem-

DANSK VERSION

stillingen af andre af verdens territorialenheder, men forestillingen om ”det nordlige” og da især om ”det høje nord” adskiller sig ved at være smedet af diskurser mere end af faktisk erfaring op igennem århundrederne. Det forstærker de to diskursive lags adskilte egetliv: Det udefrakommende blik eksisterer uafhængigt af blikket indefra. Vi bør erindre, at mennesket ikke nåede til Nordpolen før blot hundrede år siden, men har gjort sig forestillinger om det nordligste nord i tusindvis af år. Endelig er det vigtigt at erindre to sociopolitiske fænomener, som øver indflydelse på fremstillingen og opfattelsen af det nordlige og af polarområderne: på den ene side den overordnede sammenhæng med kolonialiseringen af de oprindelige folk, som har forstærket det forhold, at kulturelle og menneskelige aspekter af de kolde områder er forstummet. På den anden side den generelle tendens i styringen af de nordlige egne fra hovedstæder og stormagter længere mod syd, som administrerer områderne i henhold til deres eget kendskab, der kun i ringe grad er baseret på faktisk erfaring, og ud fra deres egne behov – med alle de muligheder for fejludslag, det giver.

Der findes således dels de mestendels vestlige, lettilgængelige fremstillinger af det nordlige og af Arktis med en stor semiologisk sammenhængskraft i kraft af deres simplificering, dels de nordlige kulturer, hvoraf nogle er velkendte (Rusland og Skandinavien), mens andre er fuldkommen ukendte (andre egne nær polerne samt oprindelige folkeslag). For at kunne studere ”det nordlige” ud fra et samlet perspektiv med sans for diversiteten og de forskellige grader af synlighed må vi stille to spørgsmål, som ikke er umiddelbart koblede til hinanden, men som begge bringer os vide-

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

re: Hvordan kan det nordlige defineres gennem forestillinger? Hvilke etiske principper bør ligge til grund for vores syn på de nordlige kulturer med henblik på en samlet forståelse, der inkluderer de kulturer, som de sydligere kulturer og magter har miskendt?

Definering af det nordlige gennem forestillinger

Summen af diskurser om det nordlige, vinteren og Arktis kan man både gennemgå synkront (i en given periode) og diakront (for en bestemt kulturs vedkommende). Disse diskurser er opstået i forskellige kulturer og antager forskellige former. Diskurserne er opkoblet gennem århundrederne i henhold til det dobbelte princip om syntese og samtidighed¹, og de udgør tilsammen det, som vi kan kalde for ”forestillingen om det nordlige”. Det drejer sig om et righoldigt tegnsystem i bevægelse, der fungerer forskelligt alt efter de sammenhænge, hvori de udsiges og modtages.

Da jeg udviklede begrebet ”forestillingen om det nordlige” for ti år siden, foreslog jeg samtidig den hypotese, at der findes et fælles æstetisk grundlag i tillæg til diverse og divergerende kulturer og opfattelser af det nordlige og *fra* de nordlige egne og kulturer. Dette grundlag kan man så udvikle i overensstemmelse med særtræk, som skønt de ikke *hver især* kendetegner det nordlige, ikke desto mindre udgør en sum af tegn, som

¹ Dette princip om diskursernes syntese og rivalisering fremsatte jeg i min bog *L'émergence des classiques*, Montréal: Fides, 2000. Princippet er inspireret af Wolfgang Isters teori om læsehandlingen og indskrevet i en receptionsæstetik.

DANSK VERSION

tilsammen kendetegner ”det nordlige” ud fra et kulturelt synspunkt. Summen af tegn, som den vestlige kultur op igennem århundrederne har ladet repræsentere forestillingen om det nordlige, omkalfatres konstant af nye forslag – og nu bliver de oprindelige og lokale folkeslag omsider regnet med. Ved at bekræfte eller modificere visse særtræk udgør tegnene tilsammen ”forestillingen om det nordlige”. Der er tale om en levende og organisk helhed, som er kontekstafhængig og udvikler sig op igennem historien. Ligesom ethvert andet tegnsystem gør dette system det muligt at åbne op for en forestillingsverden med en delvis påkaldelse af denne verdens egenskaber, og det muliggør en økonomi af midler til at repræsentere det nordlige. Farven lyseblå udøver eksempelvis denne funktion for tiden: Det rækker med at bruge denne farve for hos læseren og tilskueren at frembringe et univers gjort af kulde, endeløse vidder og is, som henviser til tegnsystemet i sin helhed.

Som det gælder for ethvert system dannet af århundreders diskurs, må man for at løsrive sig eller bestride grundlaget således dekonstruere eller ændre det. Dette gøres spidsfindigt i verdens første inuitiske spillefilm, *Atanarjuat*², når filmskaberne én for én tager de vestlige forestillinger om Arktis ved vingebenet og dekonstruerer dem.³ Filmskaberne ved, at tilskueren *besidder koderne* til det tegnsystem, som udgør forestillingen om det nordlige, og som er skabt af den vestlige kultur. De bruger disse koder til at foreslå en nyopfattelse af

² Zacharias Kunuk: *Atanarjuat*, 2001, 172 minutter.

³ Fx hverken sulter eller fryser nogen af personerne (i en scene løber en nøgen mand sågar hen over isen), ingen farer vild, nogle af inuitterne er beregnende og uredelige, og konflikterne er komplekse.

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

området, som føjer sig til de foregående og forrykker indsatsen og selve koderne. På samme måde, som det sker i en læseproces (jf. Wolfgang Iser)⁴, indoptager kulturen disse nye forslag, som nærer forestillingen og får den til at ændre retning. Forestillingen indoptager de nye forslag, disponerer over dem og sætter dem op imod de allerede eksisterende. Forestillingen forbliver sammenhængende, samtidig med at den ændrer sig i overensstemmelse med de nye kulturforslag, der filtreres i akkumuleringsprocessen og gennem rivaliseringen. *Atanarjuat's* gennembrud gjorde det eksempelvis muligt for filmen at præge den moderne udgave af forestillingen om det nordlige. Filmen ville – selv hvis den ikke havde modtaget de priser, den fik – have bidraget til ophobningen af diskurser om denne forestilling, men uden priserne ville den ikke have formået at erstatte koderne på så afgørende vis.

Begrebet ”forestillingen om det nordlige” omformer således måden, hvorpå området opfattes. Begrebet medtager de kulturelle og menneskelige aspekter og danner et kritisk afsæt for at begribe den æstetiske og politiske natur af båndene mellem fremstillingerne og området, forestillingen og kulturen. Al tale om ”forestillingen om det nordlige” forudsætter eksistensen af et bånd mellem de kulturelle fremstillinger og området – hvilket ikke er en selvfølge – og lægger op til, at et *faktisk* sted kan have en indvirkning på formerne af de fremstillinger, som er opstået. Dette står i umiddelbar modstrid med moderniteten og postmoderniteten, som jo forsvarer kunstarternes selvdefinerende karak-

⁴ Wolfgang Iser: *L'acte de lecture. Théorie de l'effet esthétique* [Læsehandlingen – teori om den æstetiske virkning], Bruxelles: P. Mardaga, i samlingen ”Philosophie et langage” [Filosofi og sprog], 1985 [1976].

ter. Modsætningen ophæves dog, når man betragter begrebet om ”sted” ud fra et kulturkonstruerende perspektiv, som i sig selv er styret af sine egne regler. Tilbage står at fastslå, hvilke bånd der kan være mellem et *faktisk* sted og *fremstillingen* af et sted. Dette muliggør begrebet ”*forestillingen om et sted*”, der er defineret som en overbygning af rivaliserende diskurser. Reelt indebærer det, at realiteten ikke nødvendigvis fører til en forestilling om et sted, og den anden vej rundt: at diskurserne ikke helt kan fravristes begrebet *realitet*. Stederne udgør en kompleks og menneskeskabt legering gjort af diskurser og realiteter, kulturformer og minder. Alt dette henviser til det virkelige, til det menneskelige og til realiteterne – de være sig faktiske, diskursive eller semiologiske.

I modsætning til de gængse diskurser kan man med god grund spørge, om det nordlige kan regnes for et ”sted” i den vestlige kultur. En læsning af fremstillingerne af det nordlige op igennem historien overbeviser imidlertid om, at ”det nordlige” har været defineret som ”rum” og ikke som ”sted”: Det insisterende fokus på egenskaber forbundet med tomheden, uendeligheden og hvidheden har ført til udviklingen af et system af repræsentationer, som undertiden lader hånt om menneskets faktiske oplevelse af området.⁵ Op igennem århundrederne har det fænomenologiske kendskab til det nordlige ikke været nogen selvfølge: Vesterlændingene foretrækker at forstå det nordlige

⁵ Angående sammenhængene mellem rum og sted i de nordlige egne, se fællesværket *Le lieu du Nord. Vers une cartographie des lieux du Nord* [De nordlige egne som sted – hen imod en kortlægning af de nordlige steder], Québec: Presses de l'Université du Québec og Stockholm: Stockholms universitet, samlingen ”Droit au pôle” [Retten til polen], 2015.

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

som et område *binsides* den beboede verden (som de ikke desto mindre gør sig umage for at udforske, hvilket har taget sin tid, alt imens de har forestillet sig området med udgangspunkt i tekster) – og som således unddrager sig erkendelsen. Desuden er vesterlændingene (både grundet uforstand og eksklusion) uvidende om en del af diskurserne fra de folk, der rent faktisk bor der (inuitter, samer, nordamerikanske indianere osv.). I mangen en vestlig skildring henviser ”det nordlige” således til en neutral matrix, hvorpå man kan placere en beretning uden smålig skelen til den faktiske eller fænomenologiske virkelighed, når blot man respekterer en række kriterier og egenskaber, der kendetegner ”det nordlige” i fantasien. Lige fra polarforskernes skildringer til poesien, fra pop-, film- og kommerciel kultur til billedkunsten, fra sange til eventyrbøger: Det hele er en forestilling dannet af fremstillinger og opfattelser, der henviser til et forestillet og fremstillet sted, som historisk set kan regnes for en menneskelig og kulturel konstruktion. Alt sammen udspiller det sig inden for en forudindtaget æstetisk logik, der gennemløber tidsaldrene, genrerne, teknikkerne og kulturerne og tilpasser sig den givne sammenhæng. Kulturerne, som gør krav derpå, smeder en særegen del sammen med en universel del i en særlig syntese, som definerer lige netop dem. Fx gør Island forestillingen om det nordlige til sin ved at tilføje andre identitetslag, der definerer landet (landet er en ø, landet er en del af det europæiske Norden osv.)

At tale om ”forestillingen om det nordlige” gør det således nødvendigt at reflektere over forestillingen om *sted*, om forbindelserne mellem det faktiske, beboede, forestillede og fremstillede sted, om begreberne om rum og sted, om tegnsystemers strukturelle og diakro-

ne beskaffenhed, om den kulturelle mangfoldighed, om det særegne og det universelle og om inddragelser og udelukkelse af bestemte diskurser fra den vestlige definition af det nordlige. Det er et helt metodologisk, teoretisk, æstetisk og politisk program, som stadig er under opbygning, men som gør det muligt omsider at medtage udeladte kulturelle og menneskelige aspekter i den almene forskning i det nordlige og Arktis.

Dette tegnsystem har det dobbelte særpræg, at det i ringe udstrækning er blevet udarbejdet af dem, der rent faktisk bor i området, og i vidt omfang er udtænkt af andre, der aldrig har været der. Dette forhold tager intet fra tegnsystemets sammenhængskraft og styrke set ud fra et diskursivt og imaginært synspunkt, men det gør det svært virkeligt at opnå et kendskab til den kolde verden: svært at påskønne de faktiske indbygges diskurser, behov og ambitioner og svært ud fra et kulturelt og intellektuelt synspunkt at tænke det nordlige, Arktis og den kolde verden *i egen ret*. Dette tegnsystems historiske karakter udgøres af udefrakommende diskurser om områder opfattet mere som rum end som steder og underlagt kontrol fra magtcentre, der alene betragter områderne som ressourcelagre til sikring af egen levedygtighed. Det indebærer derfor visse pligter og etiske forskrifter at kunne indfri den fulde kompleksitet.

En omfattende plan for at begribe
det kulturelle Arktis i al dets kompleksitet

Studier i forestillinger om det nordlige indebærer en flerkulturel og cirkumpolar analyse af de forskellige

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

fremstillinger af det nordlige, af vinteren og af Arktis set i et tværfagligt perspektiv. Man kan studere de historiske udviklinger og variationer af diskurserne og derigennem udviklingen af forestillingen om Arktis og om norden ved at bruge begreber som det kulturelle ”nordlige” og ”vinterlige” og forstå definitionen af det nordlige som ”primært en kulturel diskurs anvendt konventionelt på et givent område”⁶.

En sådan intellektuel position gør det muligt at tage højde for de videnskabelige, historiske, sociale og kunstneriske bidrag ved fremstillingernes mellemkomst, ophav som de er til videnskabens bevæggrunde og hypoteser, bærere af menneskelig og social forandring, afgørende for historien og en logisk følge af kunstneriske fremstillinger. På den vis muliggør dette perspektiv et hidtil uset møde på fælles grund mellem de forskellige videnstraditioner. De mødes i et forsøg på at gennemføre en tværfaglig og flerkulturel tilgang, som intellektuelle i de nordlige egne og Arktis længe har efterspurgt. Dette er alene muligt med en bevidsthed om kompleksiteten og skrøbeligheden af det nordlige økosystem set fra et miljømæssigt, socialt og kulturelt synspunkt.

⁶ Daniel Chartier: ”Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives” [Ude i det åbne nordpå – fortælleformer og fremstillinger af det nordlige] i *Problématiques de l’imaginaire du Nord en littérature, cinéma et arts visuels* [Problematikker vedrørende forestillingen om det nordlige i litteratur, film og billedkunst], Joë Bouchard, Daniel Chartier og Amélie Nadeau, red., Montréal: Université du Québec à Montréal, Département d’études littéraires (litteraturinstituttet) og Centre de recherche Figura sur le texte et l’imaginaire (forskningscenter for tekst og fiktion), samlingen ”Figura”, 2004, side 7.

DANSK VERSION

Opfatter man den kolde verden cirkumpolart frem for områdeinddelt, ser man den som et samlet hele, der kalder på fælles løsninger, overvejelser og standpunkter uden at glemme den kolde verdens forskelligartede kulturer og mange sprog. En gyldig opfattelse af den kolde verden må i den sammenhæng nødvendigvis være flersproget, flerkulturel og ofte også konfliktfyldt.

Forskningen inden for kulturstudier af det nordlige støtter sig på en undersøgelse af de kulturelle repræsentationer med sigte på en fornyelse af studierne af forbindelsen mellem mennesket og dets forestillinger gennem en diskursanalyse af det, der er på spil i de nordlige egne, Arktis og vinteren, såvel som gennem en flernational, tværfaglig og pluralistisk tilgang.

De kulturelle og menneskelige aspekter udgør en væsentlig og nødvendig del af enhver forskning *om* det nordlige og *i* de nordlige egne. Ikke desto mindre bliver de glemt eller negligeret i de arktiske og nordlige politikker, i aftaler om styringen af den kolde verden såvel som i videnskabelige og tekniske forskningsprojekter. Det gælder eksempelvis for den historiske aftale, der i 1977 blev indgået med indianere og inuitter i den nordlige del af delstaten Québec, *la Convention de la Baie-James et du Nord québécois*⁷, og som ofte fremhæves som model for de første af nutidens aftaler mellem en stat og dens oprindelige folk. Konventionen nævner slet ikke de oprindelige kulturer ud over de traditionelle praksisser, der har direkte indvirkning på den fælles

⁷ Hvad denne vigtige traktat og dens konsekvenser angår, se fx Alain-G. Gagnon og Guy Rocher, red.: *Regard sur la Convention de la Baie-James et du Nord québécois*, Montréal (Et blik på konventionen for Baie-James og Québechs nordområde): Québec/Amérique, 2002.

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

eller ensidige brug af området. Negligering af de nordlige egne kulturelle og menneskelige aspekter fører til en benægtelse af kompleksiteten i de cirkumpolare forhold og fremstillinger. Det kan føre til fastlæggelsen af politiske retningslinjer, der er dårligt tilpasset området, og der er derfor god grund til at reflektere over de principper, den metodologi og de praksisser, som afgør og etablerer definitionen af det nordlige og af Arktis i et sociokulturelt perspektiv. De har nemlig store politiske og etiske konsekvenser.

Man bør ikke glemme visse grundprincipper og intellektuelle standpunkter i definitionen af Arktis, heriblandt følgende: righoldigheden af begreber, der beskriver stedet, nødvendigheden af et cirkumpolart perspektiv, tværfagligheden, inkluderingen af de oprindelige og de tilkomne folks perspektiv, de ”naturlige” og bymæssige aspekter, flersprogetheden, det tværkulturelle og endelig også behovet for at foreslå et nyt ordforråd, der kan favne Arktis i al sin kompleksitet.

En hurtig gennemgang af de begreber, der bliver brugt til at forme og afgrænse den kolde verden, afslører en overvejning af definitioner, der er sammenfaldende men adskiller sig fra hinanden, og som undertiden bruges uden skelnen. Der er selvklart begreberne ”Arktis”, ”Antarktis”, ”polarområde” og ”Polarcirklen”, som henviser til ret klart definerede områder, uden at geograferne af den grund kan tilslutte sig de ret rigide grænsedragninger. Og så er der ”de nordlige egne”, ”den kolde verden” og ”vinteren”, som henviser til mere bevægelige enheder, der varierer alt efter den talendes perspektiv: Hvad vil kold sige? Hvor er de nordlige egne afhængigt af, om man befinder sig i

DANSK VERSION

London, Mexico, Buenos Aires, Nuuk eller Jakutsk? Dernæst er der de historisk-politiske enheder: Skandinavien, Rusland, Sibirien, Canada, Nunavik, Alaska. Og endelig er der fællesskaber, som rækker ud over disse enheder: inuitternes verden, det nordatlantiske område, hele polarområdet eller alle de nordiske lande og så fremdeles. Hvert begreb er værdibærere og insisterer på bestemte karaktertræk (geografien, politikken, sproget, kulturen, klimaet), mens de ser bort fra andre. Hvert begreb fortrænger med sin anvendelse brugen af andre begreber, der definerer den kolde, polare, nordlige og vinterlige verden generelt. En bevidstgørelse om eksistensen af disse begreber gør det om ikke andet muligt at præcisere den undersøgte genstand, når man forsker i det nordlige.

De fleste akademikere på det arktiske forskningsfelt insisterer på at betragte området som et cirkumpolart hele, som summen af de forskellige stater, nationer, kulturer, historier og sammenhænge. Arktis må have lov til selv at definere forestillingen om Arktis, men er op igennem historien og særligt i de seneste hundrede år mest af alt blevet tænkt, defineret og regeret af parallelle indflydelser fra sydligere stormagter. Iqaluit er længe blevet bestemt over af Ottawa, Fairbanks af Washington, Nuuk af København og Jakutsk af Moskva. Man har fra et imaginært vestligt synspunkt set Arktis som et kulturprodukt frembragt i den engelske, tyske og franske kultur, hvortil den amerikanske populærkultur siden har føjet sig. Hvad den konkrete udnyttelse angår, har jernbanesporene transporteret de mineraler, som de sydligere egne havde brug for til sin udvikling, elkablerne har ført elektricitet til storbyerne, og vejene har gjort det muligt for træet at nå frem til sydlige markeder. Det nordlige er udtænkt af den syd-

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

ligere kultur og modsvarer dens materielle behov. Ud fra det synspunkt kan det ikke overraske, at der er sket en simplificering af formerne og funktionerne i de kulturelle repræsentationer af det nordlige og Arktis⁸: fjern, tom, ren, ”i fare”, ”fascinerende”, hvid, kold og frossen. Det nordliges særpræg rækker ud over disse forsimplinger⁹, der afgrænser det nordlige i overensstemmelse med sydligere egnes faktiske og forestillede behov. En cirkumpolar vision byder tværtom at betragte det nordlige *i egen ret* på ontologisk og definitiv vis. Den cirkumpolare vision byder at tage de forhold med i betragtning, der forener de forskellige dele, der udgør det nordlige, såvel som også forskellene imellem de forskellige kulturer, positioner og historie. Denne vision gør det samtidig muligt at betragte det nordlige som et selvdefineret hele og et mangeartet hele og lade dette hele træde frem i al sin righoldighed og kompleksitet.

For som sprogmanden og geografen Louis-Edmond Hamelin fra Québec gør opmærksom på, er det ikke omkostningsfrit at betragte Arktis i et monodisciplinært perspektiv: ”Den monodisciplinære tilgang gør det ikke muligt at producere tilstrækkeligt med relevant og nødvendig viden til at forstå et spørgsmål,

⁸ Hvad angår forbindelserne mellem forsimpeling og kompleksitet, som er forbundne til begreber om økologi i et moderne værk, se fx min artikel om den cirkumpolare kunstner Patrick Huse: ”Simplification / Complexity of the Arctic: The Work of Norwegian Artist Patrick Huse” i Patrick Huse: *Northern Imaginary. 3rd Part*, Oslo: Delta Press og Pori Art Museum, 2008, side 49-53.

⁹ Hvad angår særtræk ved det nordlige som diskurs, se Daniel Chartier: ”Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives” (citeret ovenfor i fodnote 6), side 9-26.

DANSK VERSION

som altid vil være komplekst.”¹⁰ Grundet sin skrøbelighed og sit særlige klima og graden af ukendskab bør ”det nordlige” betragtes fra et pluridisciplinært synspunkt, som man kan kalde ”holistisk”, altså helhedsorienteret, hvilket samler inuit-begreberne om ”nuna” og ”sila”. Det samme gælder for alle områder i verden, men det gælder i endnu højere grad for et sociokulturelt økosystem, som er så skrøbeligt som de nordlige egne. Det kræver en løbende dialog mellem naturvidenskaben og samfundsvidenskaben, men også mellem samfundsvidenskaben og humaniora og mellem humaniora og kulturskabelsen i praksis. Dette tværfaglige synspunkt er ingen åndelig luksus, men derimod et krav der bør pålægges alle nordlige forskningsprojekter og al indgriben i og udnyttelse af området.

Nogle geografer har sammenlignet Arktis med Middelhavet – tydeligvis ikke grundet klimaet, men fordi der rundt om Nordpolen lever befolkninger af meget forskellig oprindelse, såvel oprindelige folk (heriblandt inuitter, nordamerikanske indianere, samer, innuer) og senere tilkomne (heriblandt islændinge, finner, russere, nordamerikanere) En forskning i det nordlige, der udelader de oprindelige eller de tilkomne folks perspektiv fører naturnødvendigt til en fejltolkning af området. Udgrænsningen af det ene eller det andet perspektiv gør det umuligt at forstå summen af de forhold, der er på spil i de nordlige egne.

Der findes et etisk påbud af stor vigtighed for forskningen: De oprindelige folks stemmer bør der lyttes til i særlig grad i dag, eftersom de er blevet ignoreret op

¹⁰ Louis-Edmond Hamelin: *Écho des pays froids* [Ekko fra de kolde lande], Sainte-Foy: Les Presses de l'Université Laval, 1996, side 86.

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

igennem historien og kun i ringe grad er blevet bevaret i kulturinstitutionerne. Tag som eksempel historien om landsbyen Hebron på Labrador-kysten. Her boede inuitter administreret af hernhutter-missionærer på vegne af Newfoundland's regering og forsynet af Hudson's Bay Company, indtil landsbyen blev brutalt lukket ned med en administrativ beslutning i 1959. I dag er det sådan, at hvis man ønsker at rekonstruere begivenhederne, der førte til denne tragedie (mange af de fordrevne inuitter omkom i årene efter lukningen af deres landsby), kan man læse i Newfoundland's regeringsarkiver. Man kan også sagtens finde notater og rapporter fra Hudson's Bay Company, som er blevet offentliggjort og erklæret kulturarv, og man får med lethed adgang til de minutiøse korrespondancer fra hernhutter-missionærerne, som alle er blevet nummereret og gjort tilgængelige i menighedens arkiver. Men hvad mangler der? Inuitternes stemmer. De havde intet institutionelt instrument til at bevare deres reaktioner og meninger for eftertiden, og deres stemmer er derfor forsvundet. De oprindelige folks synspunkter har brug for forskerens særlige opmærksomhed for at dukke frem. Undertiden vil det være umuligt at finde dem, og man må så i stedet overlade en plads til en "tavshedens historie" som udtryk for tvangsforholdene i de nordlige egne, og hvad der var på spil, for etisk og ærligt at kunne genfortælle visse historiske begivenheder. Historien om Hebron, som Carol Brice-Bennett betegner som "frarøvelse"¹¹, er et tydeligt

¹¹ Carol Brice-Bennetts essay skildrer historien og konsekvenserne af en ufrivillig fordrivelse af den oprindelige befolkning til Labrador: Det var intet enkeltstående tilfælde, og andre tvangsforflytninger (i Alaska, Grønland, Rusland) havde lige så tragiske konsekvenser. Carol Brice-Bennett: *Dispossessed: The Eviction of*

DANSK VERSION

tilfælde, men bestemt ikke det eneste i den arktiske verden.

De folkekære fremstillinger af Arktis viser det gerne som en verden, der er hvid og kold, fjern, ubeboet og ubeboelig, frossen og tom. I den optik betragtes Arktis logisk nok som ”naturlig” og uden byer: hinsides den beboede verden symboliserer Arktis for kulturen et tomt og øde sted. Og sandt nok er det arktiske område ikke tæt befolket i sammenligning med mere tempererede områder. Jordklodens demografiske fordeling viser en tydelig koncentration af den menneskelige befolkning den lange vej rundt langs Ækvator. Den kolde verden har dog også sine landsbyer, byer og sågar metropoler, som handskes med betragtelige udfordringer af menneskelig, samfundsmæssig, teknisk, kulturel og energiforsyningsmæssig art. Den kolde verden har tillige sæsonskifter så markerede mellem sommer og vinter, at det arkitektonisk kræver opbygning af dobbeltudstyr. Montreal kan fx med sine 3,5 millioner indbyggere regnes for verdens koldeste storby (defineret som en by med over en million indbyggere) – ikke qua sin breddegrad på 45 grader, men grundet dens strenge og lange vinter. Hvad betyder det ud over det rent klimatiske og set fra et kulturelt og samfundsmæssigt synspunkt at bo i en by med et klima, der veksler mellem subtropisk og subarktisk? De nordlige forholds indvirkning på det bebyggede miljø, på byplanlægningen, på ressourceadministrationen og på tilpasningen af den kollektive og individuelle levevis er ikke blevet undersøgt nærmere før nu, ikke mindst fordi den folkekære forståelse af det nord-

Inuit from Hebron, Labrador, Montréal: Imaginaire | Nord, samlingen ”Isberg”, 2017.

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

lige omhandler et øde og underbefolket område. Det er bare ikke altid tilfældet: ikke alt nordligt er øde og mennesketomt. Igen engang står forestillingen i vejen for at begribe det nordlige og Arktis i al deres kompleksitet. For rigtigt at forstå den cirkumpolare verden er det vigtigt at betænke både de urbaniserede og de ikke-urbaniserede problematikker.

For at nå frem til en forståelse af de forskellige synspunkter, som støder sammen og påvirker hinanden i den cirkumpolare verden, må man erkende, i hvor høj grad en lang række sprog – de være sig oprindelige og tilkomne såvel som fremmede – har opbygget forestillingen og paradigmerne. Sprog, som ikke tales meget ude i verden, men gør det i de nordlige egne (fx dansk og norsk), har haft en stor indflydelse på definitionen af Arktis, særligt i kraft af de første polarforskere, der kom fra lande med disse sprog og har udgivet talrige skildringer af deres rejser. Fremmedsprog som eksempelvis tysk har ikke haft den store forbindelse til udforskningen og kolonialiseringen af de nordlige egne, men spiller en væsentlig rolle i at forstå dem. Og endelig er den cirkumpolare region den, hvor de oprindelige folks sprog er bedst bevaret i verden: cri, inuktitut, grønlandsk, jakutsk er – skønt de er lidet kendte uden for deres oprindelige områder – stadig i brug og anvendes til kulturskabelse og -overførsel. Man må derfor medregne en mangesproget dimension i ethvert forskningsprojekt om det nordlige og Arktis og besinde sig på, at ensprogetheden eller sågar tosprogetheden fører til et partisk eller ukomplet syn på det nordlige. Lige så byrdefuldt det også måtte være, er mange løsninger at finde i det personlige kendskab til flere sprog, oversættelse såvel som flersprogede teams, der

DANSK VERSION

gør det muligt at mildne ukendskaben til det, der er på spil.

Norden udgør et "interkulturelt laboratorium". Vi plejer at tænke på det 20. århundredes byer som de første arnesteder for interkulturel udveksling. Men faktisk har de isolerede udposter i Arktis ofte helt fra deres grundlæggelse været samlingssted for mænd og kvinder, der hidrørte fra forskellige kulturer og indgik i kontakt og udveksling. Det gælder både for missionerne og senere også minerne, dæmningsbyggerier og afsoningsanstalter, at de tæller populationer fra forskellige kulturer, der er ankommet fra forskellige dele af landene selv og udefra gennem indvandring. Desuden er hver af de cirkumpolare kulturer et produkt af en syntese af to eller flere kulturer fra syd eller nord. Den flerkulturelle interageren er således definerende for det nordlige og Arktis. Alt efter det konkrete sted er der en større eller mindre grad af blandethed og en større eller mindre harmoni mellem de oprindelige folk og de tilkomne. Den grønlandske identitet er i dag fx en syntese af flere forskellige inuit-kulturer med hundredvis af år bag sig og tilsat de kulturer, som missionærerne og de danske koloniherrer bragte med sig og tillige en nyligere tilvandring.

Det cirkumpolare, flerfaglige, oprindelig, urbane, mangesprogede og interkulturelle pålægger hver især metodologiske forsigtigheder i forskningen i det nordlige og Arktis, og de er forudsætninger uden hvilke den cirkumpolare verden nok engang bliver forsimplet og frataget sin evne til at tænke selv. Hertil kommer, som det fremgår af førnævnte Hamelins arbejde, at det nordlige påkalder sig skabelsen af nye begreber og et eget ordforråd for at udtrykke sin specificitet og origi-

FORESTILLINGEN OM DET NORDLIGE

nalitet.¹² Disse nydannelser er opfundet på fransk, men oversat til mange andre cirkumpolare sprog. Nogle af dem er trådt ind i hverdags sproget: ”*nordicité*” (”nordlighed”), ”*hivernité*” (”vinterlighed”), ”*glissité*” (”isetthed”). De gør det muligt at åbne en ny byggeplads, hvor forskningen i det nordlige kan tilvirkes – i respekt for såvel de forskelligheder, som udgør regionen, som for det, de har til fælles med hinanden, og som skiller dem fra resten af verden.

Konklusion

I enhver forskning i det nordlige og i Arktis er det nødvendigt at medtage de kulturelle og menneskelige aspekter, endskønt de er blevet marginaliseret i den vestlige tradition, som kaster sine ”arktiske drømme” ud over den kolde verden for nu at bruge Barry Lopez’ udtryk.¹³ Uanset hvor righoldig en forestilling, hvor fascinerende et tegnsystem, der er blevet konstrueret op igennem århundreders diskurser, har de udelukket betragtninger fra dem, der faktisk lever i området såvel som også en del af dets geografiske realiteter. Der er brug for at foreslå og forsvare tanken

¹² Af Louis-Edmond Hamelin, se i tillæg til *La Nordicité du Québec* [Québecs nordlighed], Québec: Presses de l’Université du Québec, 2014 også: *Écho des pays froids* (citeret ovenfor i fodnote 10), *Discours du Nord* [Diskurser fra de nordlige egne], Québec: GÉ-TIC, Université Laval, samlingen ”Recherche”, 2002, *Le Québec par des mots. Partie II: L’hiver et le Nord* [Québec sat på ord. Del II: Vinteren og de nordlige egne], Sherbrooke: Presses de l’Université de Sherbrooke, 2002.

¹³ Barry Lopez: *Arctic Dreams. Imagination and Desire in a Northern Landscape*, New York: Scribner, 1986.

DANSK VERSION

om en kompleks forståelse af det nordlige, vinteren og Arktis for at kunne forny en ”virkelig økologi”, som tager højde for den cirkumpolare verdens righoldighed og forskelligartethed. For at nå dertil må man forsvare følgende hypoteser: a) de nordlige egne og Arktis består af steder, der påvirker hinanden gensidigt og konstant; b) de kulturelle og menneskelige aspekter afgør forholdet til området; c) de nordlige egne og Arktis bør anskues flerkulturelt og cirkumpolart i et tværfagligt perspektiv; d) en cirkumpolar forståelse antager, at de nordlige egne er et samlet hele med behov for fælles løsninger, overvejelser og standpunkter – alt sammen uden at glemme kulturforskellene og de mange sprog, der udgør det nordlige på en flernational, flersproget, flerkulturel og ofte også konfliktfyldt vis.

De nordlige egne, vinteren og Arktis vil forblive rum, der er tømt for deres kulturrigdom og tilbøjelige til at reduceres til klicheer, hvis vi ikke tager udgangspunkt i denne dobbelte anstrengelse, denne forståelse og denne såen tvivl om det tegnsystem, som forestillingen om det nordlige er, og i dette flerkulturelle og historiske synspunkt og en etisk forsigtighed i principperne for forskningens udførelse, som skal være tværfaglig, flersproget og i overensstemmelse med studieobjektet.

Daniel Chartier

Université du Québec à Montréal

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”? ЭТИЧЕСКИЕ ПРИНЦИПЫ

Перевод с французского – Ольга Кузьменко, редакция перевода – Елена Филиппова и Любовь Марковская.

Аннотация – Север, это пространство, которое на протяжении веков воображали и представляли себе художники и писатели западного мира, что с течением времени привело к наложению слоев дискурсов, к созданию “воображения Севера” Скандинавии, Гренландии, Крайнего Севера или полюсов. Представители Запада достигли Северного полюса лишь век тому назад, что делает “Север” результатом двойного восприятия: извне – внешних, прежде всего западных, представлений, и изнутри – северных культур (скандинавы, инуиты и кри). Если мы желаем изучать “Север” в его совокупном единстве, то должны задать два вопроса: как определить Север через представления о нем? На основании каких этических принципов должны мы рассматривать северные культуры, чтобы охватить их все – в том числе и те, значение которых до сих пор преуменьшалось Югом? Мы ответим на эти два вопроса, прежде всего определив “воображение Севера”, а затем предложив интегративную программу для “усложнения” культурной Арктики.

На протяжении уже многих веков¹, художники и писатели западного мира воображают и представляют себе мир холода. При более внимательном рассмотрении этот мир состоит из разных образов (“Севера”, Скандинавии, Гренландии, Арктики, Южного и Северного полюсов или даже зимы), отличающихся друг от друга и опирающихся на упрощение форм (горизонтальность) и цветов (белый, голубой, оттенки розового), на присутствие льда, снега и других признаков холода, на моральные и этические ценности (солидарность).

¹ Первый русский перевод этой статьи был опубликован под названием “Что такое 'воображаемый Север'?” в журнале *Этнографическое обозрение*, 2016, n° 4, с. 20-29.

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

Помимо этого, они связаны с областью, находящейся “за пределами” и означающей начало Арктики и конец европейской ойкумены – той областью, где лежит мир “природный”, неизведанный, пустынный, необитаемый и удаленный: Крайний Север. Совокупность этих представлений – мы к ним еще вернемся – образует знаковую систему, которую я называю здесь для удобства “воображением Севера”.

Подобно любому представляемому пространству, “Север” является результатом двойного восприятия: извне и изнутри, что можно увидеть в “представлениях” о Севере и в произведениях “северных культур”. Первые, являющиеся плодом воображения в основном немецкого, французского, английского, затем североамериканского, практически не делают различий между разными культурными пространствами территории и обращают свой взгляд к Арктике и полюсам, уделяя мало внимания местным культурам (инуитов, саамов, кри, инну, скандинавов и т.д.). Вторые выходят иногда за собственные пределы (так, в частности, обстоит дело со скандинавскими культурами, отношение к которым в Европе однозначно положительное), что неприложимо, однако, к автохтонным культурам, которыми долгое время пренебрегали, иногда в риторических целях – часто для усиления образа Арктики необитаемой и безлюдной исходя из устойчивых политических и этнических предрассудков. Как бы там ни было, “представления о Севере”, созданные извне, и “северные культуры” территорий “Севера” мало пересекаются, представляя собой, по большей части, отличающиеся друг от друга слои дискурса, притом, что и те, и другие связаны с одной и той же территорией. Это расхождение может наблюдаться и в представлениях о других террито-

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

рий, но воображение Севера, в особенности “Крайнего Севера”, отличается тем, что оно в течение веков основывалось более на дискурсе, чем на опыте, а это усилило автономный характер словесного дискурса “изнутри” и “извне”. Напомним, что человек достиг Северного полюса лишь сто лет назад, тогда как воображал он его в течение тысячелетий. Наконец, необходимо напомнить два социополитических феномена, влияющих на воображение и восприятие Севера и Арктики: с одной стороны, общий контекст колонизации автохтонного населения, который усилил замалчивание культурных и гуманитарных аспектов холодных территорий, а с другой – общая тенденция в управлении “Севером” доминирующими державами Юга, действующими исходя из имеющихся у них знаний, мало связанных с опытом, и своих собственных нужд, что не может не повлечь за собой неизбежные искажения.

Таким образом, имеются “представления” о Севере и Арктике, чаще всего западные, легкодоступные и отличающиеся семиотической связностью (упрощенной), и “культуры” Севера: некоторые – хорошо известные (России, Скандинавии), другие – практически неизвестные (остальных циркулярных областей и автохтонного населения). Если мы желаем изучать “Север” в его целостности и с учетом его неравномерно известного многообразия, мы должны задать два вопроса, на первый взгляд, далеких друг от друга: как определить Север через воображение? На основании каких этических принципов должны мы рассматривать северные культуры, в том числе те, значение которых до сих пор преуменьшалось Югом, чтобы получить о них полное представление?

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

Определение Севера через воображение

Совокупность дискурсов о Севере, зиме и Арктике, которые мы можем проследить как в плане синхронном (для данного периода), так и диахронном (для конкретной культуры), дискурсов, созданных разными культурами и в разных формах, накопленных на протяжении веков согласно двойному принципу синтеза и конкуренции², образуют то, что можно назвать воображением Севера. Речь идет о множественной и подвижной знаковой системе, по-разному функционирующей в зависимости от контекста высказывания и рецепции.

Развивая десять лет тому назад это понятие “воображение Севера”, я параллельно выдвинул гипотезу о том, что за различными культурами и не совпадающими восприятиями Севера и *о Севере* кроется единая эстетическая основа, которую можно затем разложить на характеристики, не определяющие Север каждая в отдельности, но составляющие совокупность оригинальных черт, присущих тому, что представляет собой Север с точки зрения культуры. Совокупность знаков, выработанных на протяжении веков западной культурой для репрезентации идеи Севера, постоянно обновляется, причем сегодня в этом обновлении участвуют наконец-то принимаемые во внимание автохтонные и региональные культуры, которые подтверждают или модифицируют отдельные ее характеристики. Воображение Севера, таким образом, представляет собой жи-

² Этот принцип синтеза и конкуренции дискурсов, возникший под влиянием теории прочтения, предложенной Вольфгангом Изером и вписанный в эстетику восприятия, был изложен в моей книге (Daniel Chartier, *L'Émergence des classiques*, Montréal, Fides, 2000).

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

вой, “органический” ансамбль, эволюционирующий в разных исторических периодах и контекстах; как любая знаковая система, образы Севера позволяют раскрыть воображаемый мир частичным названием его характеристик, что ведет к экономии средств для репрезентации. Например, эту функцию сегодня выполняет голубой цвет. Достаточно использовать этот цвет, чтобы вызвать у читателя или у зрителя идею о целом мире холода, необъятности и льда, что отсылает его к системе знаков в их совокупности.

Так же, как в случае с любой системой представлений, сформированной на протяжении столетий, чтобы размежеваться с ней или оспорить ее основы, необходимо ее деконструировать или переработать: именно это с большим умом делают создатели первого инуитского полнометражного художественного фильма “Атанаржуат” (*Atanarjuat*)³, перебирая одну за другой типичные для западной культуры характеристики Арктики, чтобы разрушить их⁴. Они знают, что зритель владеет кодами созданной западной культурой знаковой системы, каковой являются образы Севера, и используют их, чтобы предложить новое восприятие этой территории, которое добавляется к предыдущим и смещает акценты проблем и кодов. Подобно тому, что происходит в процессе чтения, описанном Вольфгангом Изером, культура получает, накапливает, располагает, сталкивает между собой новые высказы-

³ Zacharias Kunuk, *Atanarjuat*, 2001, 172 мин.

⁴ Например, никто из персонажей не страдает от голода и холода (в одной из сцен обнаженный человек бежит по льду), никто не сбивается с пути, некоторые из инуитов изворотливы и коварны, конфликты отличаются сложностью.

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

вания, которые питают и направляют воображение⁵. Последнее сохраняет внутреннюю логику, двигаясь в направлении новых культурных высказываний, отфильтрованных в процессе накопления и конкуренции. Например, премия Каннского фестиваля позволила фильму “Атанархуат” сыграть определенную роль в современной ориентации воображения Севера; если бы этой премии не было, фильм, безусловно, внес бы свой вклад в копилку дискурса этого воображения, но не сумел бы столь существенно сместить коды.

Введение понятия “воображение Севера” изменяет подход к этой территории таким образом, чтобы включить в него культурные и гуманитарные аспекты, а также открывает поле для критики, чтобы суметь уловить эстетический и политический характер связей между представлениями, воображением, территорией и культурой. Говорить о воображении Севера – значит подразумевать наличие связи между культурными репрезентациями и территориями, что далеко не очевидно, или, что то же, полагать, что реальное место может иметь влияние на формы представлений о нем. На первый взгляд кажется, что это идет вразрез с модернизмом и постмодернизмом, которые утверждают самоопределяемость художественных форм, но только если не рассматривать понятие “места” в перспективе культурного конструирования, тоже регулируемого собственными правилами. Остается выяснить, какова связь между реальным местом и воображаемым местом, что позволяет сделать идея места, когда она определяется как наложение или конкуренция дискурсов. Это означает, что материальное не обязательно порождает идею места, и наоборот, что дис-

⁵ Wolfgang Iser, *L'acte de lecture. Théorie de l'effet esthétique*, Bruxelles, P. Mardaga, coll. « Philosophie et langage », 1985 [1976].

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

курс не может быть полностью отделен от понятия реальности. Место формирует сложную гуманитарную комбинацию, созданную из опыта, дискурса, материальности, культуры и памяти. Все это отсылает к действительному, к человеческому и к реальности, будь она материальной, дискурсивной или семиотической.

Вопреки привычному дискурсу резонно задать вопрос: может ли Север рассматриваться как “место”/“локус” в западной культуре? Ознакомление с историей репрезентации Севера убеждает скорее в том, что “Север” был определен как “пространство”, но не “место”: акцент на характеристиках, связанных с пустотой, необъятностью и белизной привел к разработке системы представлений, порой игнорирующей человеческий опыт на этой территории⁶. На протяжении веков феноменологическое знание о Севере давалось с трудом: Запад предпочитал рассматривать Север как территорию за пределами ойкумены (которую, тем не менее, усиленно пытался исследовать и осваивать, что заняло немало времени, одновременно выстраивая представления о нем на основе текстов) и, следовательно, изъятую из системы знаний. Кроме того, Запад игнорировал (сначала по неведению, потом намеренно) дискурс тех, кто там живет (инуитов, самов, кри, и т.д.). Во многих западных рассказах Север отсылает к нейтральной матрице, на которой можно поместить повествование безотносительно к материальной или феноменологической реальности, при условии соблюдения набора критериев и характеристик, присущих воображаемому Северу.

⁶ Об отношениях между местом и пространством на Севере, см. *Le lieu du Nord. Vers une cartographie des lieux du Nord*, Québec et Stockholm, Presses de l'Université du Québec et Université de Stockholm, coll. « Droit au pôle », 2015.

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

От рассказов путешественников до поэзии, от массовой культуры, кинематографа до визуального искусства, от песен до приключенческих романов – все эти репрезентации описывают Север, который можно рассматривать в исторической перспективе как человеческую и культурную конструкцию, некое широкое эстетическое целое, пересекающее эпохи, жанры, техники и культуры, приспособляясь к контекстам. Культуры, позиционирующие себя как северные, сочетают в себе часть универсального и часть особенного: так, Исландия на свой манер присвоила себе воображение Севера, добавив его к другим слоям идентичности, которые ее определяют (островной характер, принадлежность к Скандинавии и т.д.).

Таким образом, разговор о воображении Севера требует рефлексии об идее места, об отношениях между местом материальным, обжитым, воображаемым и представляемым, о понятиях пространства и места, о системном и диахронном устройстве знаковой системы, о поликультурности, о частном и универсальном, о включении и исключении определенных дискурсов западного описания Севера. Это целая программа – методологическая, теоретическая, эстетическая и политическая, еще в значительной мере незавершенная, но позволяющая наконец-то включить культурные и гуманитарные аспекты в исследования Севера и Арктики.

Эта знаковая система характеризуется двойной особенностью: она разработана не теми, кто проживает в этих районах, а по большей части теми, кто никогда там не был. Это не умаляет ее когерентности и весомости дискурсивного и имажинативного подходов, но создает серьезные проблемы для истинного понимания холодного мира, признания дискурсов, потребностей и устремлений тех,

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

кто там живет, а также, с культурной и интеллектуальной точек зрения, для их собственного осмысления Севера, Арктики и холодного мира. В силу своей историчности эта система также требует – по причине внешнего дискурса о территориях, осмысляемых скорее, как пространства, чем места, и контролируемых державами, видевшими в них лишь источник средств для собственного существования – соблюдать некоторые этические ограничения и предписания, чтобы выявить всю присущую ей сложность.

Интегративная программа для “усложнения” культурной Арктики

Исследование воображения Севера означает анализ с позиции поликультуры и циркумпolarity различных представлений о Севере, о зиме и Арктике в междисциплинарной парадигме. Основываясь на концептах культурной квинтэссенции Севера и зимы, а также на определении Севера “прежде всего как культурного дискурса, применяемого конвенционально к данной территории⁷”, можно исследовать историческую эволюцию и вариации этого дискурса, и вследствие этого – эволюцию идеи об Арктике и о Севере.

Предлагаемая мною интеллектуальная позиция нацелена на выработку новой междисциплинарной

⁷ Daniel Chartier, « Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives », Joë Bouchard, Daniel Chartier et Amélie Nadeau [dir.], *Problématiques de l'imaginaire du Nord en littérature, cinéma et arts visuels*, Montréal, Université du Québec à Montréal, Département d'études littéraires et Centre de recherche Figura sur le texte et l'imaginaire, coll. « Figura », 2004, p. 7.

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

перспективы изучения Севера и Арктики, интегрирующей научные, исторические, социальные и художественные вклады. Такая интеграция осуществляется путем изучения представлений (понимаемых как “образы” Севера и Арктики: медийные, научные, художественные и т.п.). Эти представления издавна воодушевляли многих ученых, а иногда служили источником вдохновения для новых открытий. Эти представления (в частности, сформированные миноритарными или маргинальными культурами) создают условия для поведенческих и социальных изменений. Таким образом, культурные и иные представления являются определяющими в истории, так как могут иметь далеко идущие последствия для многих сфер познания.

Такая перспектива создает условия для небывалой до сих пор встречи на общей почве различных исследовательских традиций, которые объединяются, чтобы попытаться осуществить то, к чему долгое время призывали исследователи Севера: “междисциплинарный” и “поликультурный” подход в изучении Севера и Арктики, единственно возможный для учета сложности и хрупкости этой социокультурной экосистемы.

Защищая идею циркумполярной, а не территориальной, как это было прежде, концепции холодного мира, мы позиционируем его как единое целое, требующее совместных решений, совместной рефлексии, совместной позиции, но с учетом образующих его различных культур и языков. И в этом контексте представляется невозможным предложить приемлемое видение холодного мира, не выразив его многоязычным, поликультурным и нередко конфликтным способом. Исследования культуры Севера, опирающиеся на изучение культурных представлений, стремятся, таким образом, к выра-

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

ботке нового взгляда на отношения человека и его воображения – посредством дискурсивного анализа проблематики Севера, Арктики и зимы, а также благодаря мультинациональному, междисциплинарному и плюралистскому подходам.

Рассмотрение культурных и гуманитарных аспектов является необходимой и неотъемлемой частью любого исследования Севера и на Севере; вместе с тем, именно о них часто забывают и ими пренебрегают северные и арктические программы, соглашения, направленные на управление холодным миром, а также научно-технические исследовательские проекты. К примеру, историческое соглашение, заключенное в 1977 г. с инуитами и кри Севера Квебека (Конвенция о развитии залива Джеймса и Севера Квебека⁸) и часто приводимое в качестве образца первых современных соглашений между правительством и коренным населением, не содержит никакого упоминания о культуре, за исключением традиционных практик, которые имеют непосредственное влияние на совместное или исключительное землепользование. Игнорирование культурных и гуманитарных аспектов Севера ведет к отрицанию сложных связей и представлений циркумполярного мира и может привести к созданию политики, не адаптированной для северных территорий. В этом смысле необходимы размышления о принципах, методологии и практиках, на которых строится определение Севера и Арктики в социокультурной перспективе, поскольку они имеют фундаментальные политические и этические последствия.

⁸ Об этом знаменитом соглашении и его последствиях см., напр.: Alain-G. Gagnon et Guy Rocher [dir.], *Regard sur la Convention de la Baie-James et du Nord québécois*, Montréal, Québec/Amérique, 2002.

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

Следует упомянуть о некоторых базовых принципах и интеллектуальных позициях дефиниции Арктики, среди которых: разнообразие терминов, охватываемых этим понятием; необходимость циркумполярной перспективы; междисциплинарность; учет точки зрения коренного и пришлого населения; “природные” и урбанистические аспекты; многоязычие; межкультурный подход; необходимость выработки новых терминов для “усложнения” Арктики.

Беглый взгляд на терминологию, используемую для обозначения и выделения холодного мира, обнаруживает взаимоналожение определений, которые частично пересекаются, частично отличаются друг от друга, а иногда используются безразлично. Разумеется, есть термины Арктика, Антарктика, полярные регионы, Северный полярный круг, которые отсылают к достаточно хорошо определенным территориям, однако их жестко очерченные границы вызывают сомнения у географов. Кроме того, есть понятия “Север”, “холодный мир”, “зима”, отсылающие к более расплывчатым представлениям, различающимся в зависимости от позиции говорящего: что такое холод? Как определяется Север относительно того, кто находится в Лондоне, в Мехико, в Буэнос-Айресе, в Нууке или в Якутске? Помимо этого, имеются историко-политические совокупности: Скандинавия, Россия, Сибирь, Канада, Нунавик, Аляска. Наконец, существуют группировки, которые накладываются на эти совокупности: инуитский мир, Североатлантический регион, циркумполярная зона, циркумнордическая зона и т.д. Каждый термин имеет свое значение и выделяет определенные характеристики (географические, политические, язык, культура, климат), при этом часто пренебрегая другими. Каждый из этих терминов смещает границы употребления других терминов

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

нов, которые определяют в общем смысле холодный, полярный, арктический, нордический и зимний мир. Учет существования этих понятий позволит, по крайней мере, уточнить объект осмысления и исследования Севера.

Большинство исследователей арктического мира настаивают на рассмотрении региона как циркумполярного “целого”, как совокупности различных государств, наций, культур, историй и отношений. Арктика должна определяться через себя самое как идея, тогда как исторически она мыслилась, определялась и управлялась скорее под влиянием Юга. Так, Икалуит долго зависел от Оттавы, Фэрбенкс от Вашингтона, Нуук от Копенгагена, Якутск от Москвы. С точки зрения культуры, как мы видели, в воображении Запада, Арктика является смешением культур Англии, Германии, Франции, к которому прибавилась также народная североамериканская культура. С точки зрения материальной эксплуатации, железная дорога перевозит с Севера полезные ископаемые, в которых Юг нуждается для своего развития; линии электропередач несут электричество в большие города, дороги позволяют древесине попасть на рынки Юга. Таким образом, Север осмыслен “южноцентричной” культурой и обеспечивает материальные потребности Юга. В этой перспективе не стоит удивляться “упрощению форм и функций”, когда речь идет о культурной репрезентации Севера и Арктики⁹: далекий, пустой,

⁹ Об этих отношениях упрощения и сложности, связанных с экологическими концептами в современном творчестве, см., напр., мою статью о циркумполярном художнике Патрике Хьюзе (Daniel Chartier, « Simplification / Complexity of the Arctic: The Work of Norwegian Artist Patrick Huse », dans Patrick Huse, *Northern Imaginary. 3rd Part*, Oslo, Delta Press and Pori Art Museum, 2008, p. 49-53).

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

чистый, “находящийся в опасности”, чарующий, белый, холодный, покрытый льдом – свои характеристики Север получает “извне¹⁰”, в системе мышления, ограничивающей его воображением и материальными потребностями Юга. Напротив, “циркумполярное” видение настоятельно потребовало бы взгляда на Север как таковой, в онтологическом и определяющем порядке, учета связей составляющих его частей, а также различий между культурами, положением и историей этих составляющих. Такая точка зрения позволяет представить Север как единство, одновременно самоопределяющееся и разнообразное, обнаруживающее богатство и сложность.

По мнению квебекского лингвиста и географа Луи-Эдмона Амлена, Север и Арктику нельзя рассматривать в монодисциплинарной перспективе: “Монодисциплинарный подход не позволяет выработать достаточно знаний, уместных и необходимых для понимания этого сложного вопроса¹¹”.

Ввиду своей хрупкости, особого климата и недостаточной изученности Север должен рассматриваться с плюридисциплинарной точки зрения, которую можно определить как холистическую, что близко к инуитским понятиям *nuna* и *sila*. То, что истинно для любого другого региона, истинно вдвойне для регионов со столь хрупкой социокультурной экосистемой. А это предполагает постоянный диалог между естественными и социальными науками, но также между социальной наукой и культурологией, между культурологией и практиками культурного

¹⁰ О некоторых характеристиках Севера как дискурса см.: Daniel Chartier, « Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives », p. 9-26.

¹¹ Louis-Edmond Hamelin, *Écho des pays froids*, Sainte-Foy, Les Presses de l'Université Laval, 1996, p. 86.

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

творчества. Этот междисциплинарный подход не роскошь, а настоятельная необходимость для любого проекта, связанного с исследованием или эксплуатацией Севера.

Некоторые географы сравнивают Арктику со Средиземноморьем: разумеется, не по причине климата, а по причине того, что вокруг полюса живут самые разные народы, коренные (инуиты, кри, саамы, инну и др.) и пришлые (исландцы, финны, русские, американцы и др). Поэтому исследование Севера без учета позиций как коренного, так и пришлого населения может привести к неверному истолкованию региона. Исключение одного из этих компонентов не позволит правильно оценить совокупность отношений, представленных на Севере.

Существует важное этическое предписание для исследований: исторически сложилось так, что голоса местного населения игнорировались и практически не сохранились в виде культурных институтов, поэтому они требуют к себе особого внимания. Здесь уместно привести пример поселения Эброн на побережье Лабрадора. Эта деревня, населенная инуитами, находилась в административном ведении моравских миссионеров, действующих от имени правительства Ньюфаундленда; поставки туда осуществляла Компания Гудзонова залива. В 1959 г., административное решение самым варварским образом положило конец существованию этой деревни. Желаящие восстановить сегодня события, приведшие к этой трагедии (многие насильственно переселенные инуиты умерли вскоре после ликвидации их деревни), могут ознакомиться с правительственными архивами Ньюфаундленда. Они без труда найдут сводки и отчеты Компании Гудзонова залива, бывшие предметом публикаций и объектом охраны национального

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

достояния; так же легко они смогут ознакомиться с подробнейшей перепиской моравских миссионеров, которая перенесена на цифровой носитель и доступ к которой можно получить в архивах конгрегации. Чего же здесь не хватает? Реакций, мнений и голосов инуитов, канувших в небытие из-за того, что у них не было институциональных инструментов для сохранения своей памяти. Чтобы возникнуть из небытия, точка зрения коренного населения требует от исследователя особого внимания. Иногда, за невозможностью ее обнаружить, нужно будет оставить место для “истории молчания”, свидетельствующей о соотношении сил на Севере, чтобы честно и этически корректно рассказать о некоторых исторических событиях. История Эброна, охарактеризованная Кароль Брис-Беннетт как “экспроприация¹²”, тому яркое, но, конечно же, не единственное свидетельство.

Арктика в общепринятом представлении являет собой белый мир, холодный, далекий, нежилой и необитаемый, пустой и замороженный. С такой точки зрения Арктика рассматривается как природная и неурбанизированная. Находящаяся вне ойкумены, она символизирует для культуры тщету и запустение. Следует признать, что арктический регион менее заселен по сравнению с регионами с умеренным климатом. Распределение народонаселения Земли свидетельствует о ярко выраженной

¹² Кароль Брис-Беннетт рассказывает об истории и последствиях вынужденного переселения автохтонного населения на Лабрадоре; это не единственный случай, и у других насильственных переселений также были трагические последствия (на Аляске, в Гренландии, в России) (Carol Brice-Bennett, *Dispossessed: The Eviction of Inuit from Hebron, Labrador, Montréal et Nain* (Labrador), *Imaginaire | Nord et Government of Nunatsiavut*, coll. « Isberg », 2017).

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

концентрации населения в широком поясе вокруг экватора. Но между тем в холодном мире также есть деревни, города и даже метрополии, которые противостоят вызовам гуманитарного, социального, технического, культурного и энергетического порядка, не считая ярко выраженных перепадов между летними и зимними температурами, усложняющих архитектурные решения. Так, например, Монреаль с его 3,5 миллионами жителей может считаться самым холодным большим (с более чем миллионным населением) городом в мире – и не из-за того, что он находится на 45 градусе северной широты, а из-за суровости и продолжительности в нем зимы. Помимо собственно климатических сложностей – что значит жить в городе, где климат меняется от субтропического к субарктическому, с социокультурной точки зрения? Влияние условий Севера на обустройство, городское планирование, управление ресурсами, коллективную и индивидуальную адаптацию образа жизни до сих пор недостаточно изучено, поскольку популярный образ Севера – это малонаселенный, пустынный регион. Но это не всегда так. Созданный образ вновь мешает увидеть сложность Севера и Арктики. Чтобы понять циркумполярный мир, важно учитывать проблемы как городских, так и не-городских районов.

Чтобы понять различные точки зрения, которые противопоставляются и взаимодействуют в циркумполярном мире, необходимо признать, до какой степени различные языки – коренного, пришлого населения или иностранные – определили его идею и парадигмы. Мало распространенные в мире, но бытующие на Севере языки (например, датский или норвежский) оказали огромное влияние на определение Арктики, в частности, благодаря путеше-

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

ственникам из этих стран, оставившим множество путевых заметок. Иностранные языки, например, немецкий, менее связаны с освоением Севера и колониальной экспансией, но сыграли огромную роль в понимании Севера. Наконец, циркумполярный регион – это тот регион, где языки коренных народов остаются самыми жизнеспособными: например, кри, инуктитут, гренландский, якутский языки широко используются в быту, в творчестве и культурной трансмиссии, несмотря на то, что вне зоны их первичного распространения число их носителей ограничено. Следовательно, в любой проект исследования Севера и Арктики следует включить многоязычное измерение и признать, что моноязычие и даже двуязычие ведут к искаженному и неполному видению Севера. Решений, хотя и непростых, существует много: знание исследователем нескольких языков, а также перевод и многоязычные команды исследователей позволят нивелировать незнание проблемы.

Север является “межкультурной лабораторией”. В силу привычки мы видим в городах XX века первые очаги межкультурных обменов; однако удаленные друг от друга станции Арктики с момента их основания часто были местом встречи носителей разных культур, местом контактов и обменов: это были миссии, затем шахты, далее стройки плотин или же места заключения – все они изначально рассчитывались на население с различными культурами, как на выходцев из разных регионов страны, так и на иммигрантов. Кроме того, каждая циркумполярная культура является продуктом синтеза двух или более культур Юга или Севера. Мультикультурные взаимодействия имеют определяющее значение для Севера и Арктики. В разных местах наблюдается большее или меньшее смешение куль-

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

тур, большая или меньшая гармония отношений между коренным и некоренным населением. Например, гренландская идентичность сегодня является синтезом нескольких древних культур инуитского происхождения в сочетании с культурами миссионеров, датских колонизаторов и недавних иммигрантов.

Циркумпольярность, междисциплинарность, автохтонность, взаимное уважение, многоязычие и межкультурное взаимодействие – каждое из этих понятий должно быть принято во внимание в методологии исследований Севера и Арктики. Они должны стать предпосылкой, без которой циркумпольярный регион снова окажется “упрощенным”, лишится способности воспринимать себя исходя из себя самого. Кроме того, как показано в трудах Л.-Э. Амлена, Север призывает к созданию новых терминов, чтобы учесть его специфику и самобытность¹³. Эти неологизмы, среди которых термины *nordicité* [северность], *hivernité* [зимность], *glissité* [скользкость], придуманные для французского языка, сегодня широко используются, будучи переведены на многие языки других циркумпольярных сообществ, что позволяет открыть новое направление для северных исследований, одновременно уважающее то общее и специфичное, что отличает Север от остального мира.

¹³ Louis-Edmond Hamelin, *La Nordicité du Québec*, Québec, Presses de l'Université du Québec, 2014, 141 p., *Écho des pays froids, Discours du Nord*, Québec, GÉTIC, Université Laval, coll. « Recherche », 2002; *Le Québec par des mots. Partie II: L'hiver et le Nord*, Sherbrooke, Presses de l'Université de Sherbrooke, 2002.

ЧТО ТАКОЕ “ВООБРАЖЕНИЕ СЕВЕРА”?

Заключение

В любом исследовании Севера и Арктики необходимо учитывать культурные и гуманитарные аспекты, хотя им не уделялось достаточного внимания в западной традиции, проецирующей на этот холодный мир, по выражению Барри Лопеса, свои “арктические мечты¹⁴”, благодаря богатому воображению и сформированным веками рассуждений завораживающей знаковой системе, в которой, однако, не нашлось места для соображений живущих там людей, равно как и для части географической реальности региона. Следует продвигать и защищать эту идею – “вновь усложнить” Север, зиму, Арктику, чтобы восстановить “экологию реального”, которая учитывала бы богатство и разнообразие циркумполярного мира. Для этого необходимо защищать гипотезы, согласно которым: а) Север и Арктика состоят из мест, находящихся в постоянном взаимодействии; б) культурные и гуманитарные аспекты определяют связь с территорией; в) Север и Арктика должны изучаться междисциплинарно, с позиции поликультуры и циркумполярности; г) циркумполярная концепция позиционирует Север как целое, требующее совместных рефлексии, решений и подходов (учитывая при этом разные языки и культуры, составляющие его), а также их рассмотрения с многонациональных, многоязычных, поликультурных, и нередко конфликтных позиций.

Без этого двойного усилия – прежде всего, понимания и переосмысления в поликультурной и истори-

¹⁴ Barry Lopez, *Arctic Dreams. Imagination and Desire in a Northern Landscape*, New York, Scribner, 1986.

РУССКАЯ ВЕРСИЯ

ческой перспективе знаковой системы, каковой являются образы Севера, затем – этической осторожности, состоящей в междисциплинарных и мультиязыковых принципах проведения исследования в согласованности с самим изучаемым объектом, Север, зима и Арктика так и останутся пространствами, лишенными своего культурного содержания и легко сводящимися к общим местам.

Даниэль Шартье

Université du Québec à Montréal

What is “the Imagined North”? Ethical Principles

Translated from the French by Christina Kannenberg

Abstract – The North has been imagined and represented for centuries by artists and writers of the Western world, which has led, over time and the accumulation of successive layers of discourse, to the creation of an “imagined North” – ranging from the “North” of Scandinavia, Greenland, Russia, to the “Far North” or the poles. Westerners have reached the North Pole only a century ago, which makes the “North” the product of a double perspective: an outside one – made especially of Western images – and an inside one – that of Northern cultures (Inuit, Sami, Cree, etc.). The first are often simplified and the second, ignored. If we wish to understand what the “North” is in an overall perspective, we must ask ourselves two questions: how do images define the North, and which ethical principles should govern how we consider Northern cultures in order to have a complete view (including, in particular, those that have been undervalued by the South)? In this book, I try to address these two questions, first by defining what is the imagined North and then by proposing an inclusive program to “recomplexify” the cultural Arctic.

Over the centuries, artists and writers of the Western world have imagined and represented the cold world. Upon closer inspection, it falls into differentiated imaginaries – the “North,” Scandinavia, Greenland, the Arctic, the poles, even the winter – that are presented often as an amalgam supported by a simplification of forms – horizontality – and colours – white, pale blue, pink hues –, by the presence of ice, snow, and the complete range of cold, by moral and ethical values – solidarity –, but also, by its connection with a “beyond” where the Arctic begins, at the end of the

WHAT IS “THE IMAGINED NORTH”?

European ecumene and the beginning of a “natural,” unknown, empty, uninhabited, and remote world: the Far North. The entirety of these representations forms a system of signs, what I call here out of convenience “the imagined North.”

Like all represented space, the “North” is the product of a dual gaze, from the outside and from the inside; we can distinguish between the “representations” of the North and the works of “Nordic cultures.” The first, fruits of principally the German, French, English, and then US-American imaginary, seldom distinguish the different cultural spaces of the territory and focus their attention up towards the Arctic and the poles, with little consideration for the cultures (Inuit, Sami, Cree, Innu, Scandinavian, etc.) that originate in these territories. The latter sometimes have an extension beyond themselves – this is notably the case of Scandinavian cultures, whose reception in Europe benefits from a clearly ameliorative prejudice. This does not, however, apply to Indigenous cultures, which have long been marginalized, at times with the rhetorical objective of reinforcing the image of an uninhabited and uninhabitable Arctic, often by persistent political and ethnic prejudices. In any case, the “representations of North” created from the outside and the “Nordic cultures” derived from the territories of the “North” have little in common, often placed as differentiated discursive layers, even though they are both connected to the same territory of reference. This distance can be observed for other represented geographic areas, but the imagined “North,” especially the “Far North,” is distinguished in that it has been forged on discourse more than on experience for centuries, which accentuates the autonomy of the discursive

ENGLISH VERSION

layers “from the inside” and “from the outside.” Let us bear in mind that man went to the North pole only a century ago whereas he has been imagining it for millennia. Lastly, it is important to remember two sociopolitical phenomena that have had an effect on the representation and the reception of the North and the Arctic. On the one hand, the general context of indigenous colonialism, which reinforced the silencing of cultural and human aspects of cold territories, and on the other hand, the general tendency of the governance of the “North,” dominated by the capitals or the powers of the South, who administrate according to their knowledge (seldom based on experience) and the circumstances of their own needs, with the gaps that this can create.

There exist “representations” of the North and the Arctic, often Western, that are easily accessible and of a great (simplified) semiological coherence. There are also “cultures” of the North, some of which are well known (those of Russia, Scandinavia) and others are totally unknown – other circumpolar spaces and the Indigenous. If one wishes to study the “North” in a perspective of the whole and take into account its plurality of unequal visibility, we must thus ask two questions which at first glance seem far removed, but must be articulated in our case: How to define the North by the imagination? According to which ethical principals should we consider Nordic cultures in order to have a complete view, including notably those which have been marginalized by the South?

WHAT IS “THE IMAGINED NORTH”?

Defining the North by the Imagination

All of the discourses stated about the North, the winter, and the Arctic, which can be retraced both synchronically – for a given period – or diachronically – for a specific culture –, derived from different cultures and forms, accumulated over the centuries according to a dual principle of synthesis and competition,¹ form what could be called “the imagined North.” It is a plural and shifting sign system, which functions in a variable manner according to the contexts of enunciation and reception.

When developing, a decade ago, this notion of “imagined North,” I simultaneously suggested the hypothesis that there exists, beyond the diverse and divergent cultures and perceptions *about* the North and *from* the North, a common esthetic foundation that could then be segmented according to the characteristics that, if they are not unique to the “North” in their individuality, compose all the same an ensemble of original and unique signs from a cultural point of view. The ensemble of signs established over the centuries by Western culture to represent the idea of North, a whole constantly reworked by new propositions – today, those of regional and Indigenous cultures are finally considered – that by confirming or modifying certain characteristics, constitute that which is “the imagined North.” It is a living whole, “organic,” that evolves according to historic periods and

¹ This principle of synthesis and of competition between discourses, inspired by Wolfgang Iser’s reader response theory and inscribed in reception theory was referred to in my monograph, Daniel Chartier: *L’émergence des classiques*, Montréal : Fides, 2000.

ENGLISH VERSION

contexts; like all sign systems, it allows for the opening of an imaginary world by partial evocation of its characteristics, which permits an economy of means for representing the North. The colour pale blue, for example, exercises this function: it suffices to use it to evoke for the reader or spectator a universe made of cold, vastness, and ice, which refers to the sign system as a whole.

Also, like all systems constituted by centuries of discourse, in order to detach from it or to contest its foundations, one must deconstruct it or rework it. For example, this is what the creators of the first feature-length film of Inuit fiction, *Atanarjuat*,² do intelligently, by taking the Western characteristics of the images of the Arctic one by one to deconstruct them.³ They know that the spectator possesses the codes of the sign system that is the imagined North, constructed by Western culture, and they use them to suggest a new perception of this territory, which is then added to the previous ones and shifts the issues and the codes. In the same way the process of the act of reading is described by Wolfgang Iser,⁴ the culture receives, accumulates and orients the imaginary. The latter keeps its coherence while modifying itself along with new cultural propositions, filtered by the processes of accumulation and competition. The success of *Atanarjuat*, for example, permitted this film to play a role in

² Zacharias Kunuk: *Atanarjuat*, 2001, 172 min.

³ For example, none of the characters suffer from hunger or from the cold (in one scene, a man even runs naked on the ice), no one gets lost, certain Inuit are devious and disloyal, the conflicts are complex.

⁴ Wolfgang Iser: *The Act of Reading: A Theory of Aesthetic Response*, Baltimore: John Hopkins University Press, 1978.

WHAT IS “THE IMAGINED NORTH”?

the contemporary orientation of the imagined North; if the film had not been award-winning, it would certainly have contributed to the accumulation of the discourse on this imaginary, but without displacing the codes to such a significant extent.

To suggest that the notion of the “imagined North” thus transforms the manner of conceiving of the territory, so that it at last includes the cultural and human aspects and opens a field of criticism to be able to grasp the esthetic and political nature of the connections between representations, the imaginary, territory, and culture. Talking about the imagined North assumes the existence of a link between cultural representations and territory – which is not a given – and is to suggest that a *real* place can have an impact on the forms of representation that derive from it. At first glance, this seems to go against modernity and postmodernism, which defend the self-defining character of artistic forms, except that if we consider the notion of “place” in a perspective of cultural construction, then it is also governed by its own rules. It remains to be seen what could be the links between a *real* place versus a *represented* place, which permits the notion of the *idea of place* when it is defined as an overlap and a competition of discourses. Indeed, that implies that the materialist does not necessarily bring about an idea of place and that inversely, the discourse cannot be entirely detached from the notion of *reality*. These places form a complex human composition, made of experiences, discourse, materiality, cultural forms, and memory. All of these refer to the real, the human, and to reality, whether the latter is material, discursive, or semiological.

ENGLISH VERSION

Against the usual discourses, it can be rightly questioned if the North can be considered as a “place” in Western culture. A reading of the history of representations of North convinces, rather, that the “North” was defined as a “space” and not as a “place:” the insistence on its characteristics linked to emptiness, immensity, and whiteness led to the development of a system of representations that sometimes overlooks the human experience of the territory.⁵ Over the centuries, the phenomenological knowledge of the North was not obvious: Westerners preferred to see in the North a territory beyond the ecumene – that they however continued to try to explore, which took time, all the while imagining it in texts – and thus exempt from knowledge.

Moreover, they ignored – first by ignorance, later by exclusion – a part of the discourses of those who lived there (Inuit, Sami, Cree, etc.). In many of the Western texts, the “North” thus refers to a neutral matrix on which we can situate a text without taking into account the material or phenomenological reality, as long as they respect a series of criteria and characteristics that are unique to the “North” in the imaginary. From exploration narratives to poetry, from popular culture, filmic and commercial, to visual arts, from the song to the adventure novel, a whole imaginary forged on representations and perceptions refers to a “North” which can be considered historically as human and cultural constructions, the whole in a transversal aesthetic coherence that spans eras, genres,

⁵ On the relationships between space and place in the North, see the compilation: *Le lieu du Nord. Vers une cartographie des lieux du Nord*, Québec: Presses de l'Université du Québec, and Stockholm: Université de Stockholm, coll. “Droit au pôle”, 2015.

WHAT IS “THE IMAGINED NORTH”?

techniques, and cultures, all while adapting to the contexts. The cultures that claim it combine a part of the individual and a part of the universal in a synthesis that is their own, that defines them: thus Iceland appropriates in its manner the imagined North by adding it to other identity layers that define it (insularity, belonging to Scandinavia, etc.).

To speak about the imagined North thus imposes a reflection on the idea of place, on the relationships between the material place, lived, imagined, and represented, on the notions of space and place, on the systemic and diachronic constitution of sign systems, on multiculturalism, on the individual and the universal, and on the inclusions and exclusions of certain discourses of the Western definition of North. Therein lies a whole methodological, theoretical, ethical, and political program, still largely being constructed, but which permits at last to include cultural and human aspects in the general research on the North and the Arctic.

This system of signs has the dual feature of having been seldom elaborated by those who live there and having been thought of in large part by others who have never been there. This does not take away its coherence and its power from a discursive and imaginary point of view, but it poses considerable challenges for true knowledge of the cold world, for recognition of the discourses, needs and aspirations of those who live there and for, from a cultural and intellectual point of view, thinking of the North, the Arctic and the cold world *by itself*. This sign system also imposes, due to its historicity – made by discourses from the outside, on territories thought of as spaces rather than as places, and controlled by powers that only see

it as a reservoir of resources to assure their vitality – certain ethical constraints and requirements, to be able to extract all of its complexity.

An Inclusive Program to “Recomplexify” the Cultural Arctic

To study the imagined North means to analyze, in a multicultural and circumpolar manner, the different representations of North, the winter and the Arctic from an interdisciplinary perspective. By relying on the concepts of cultural “nordicity” and “winterity” and on the definition of North considered as “first and foremost a cultural discourse, applied by convention to a given territory”⁶ one can study the historical evolutions and the variations of this discourse, and consequently the evolution of the idea of the Arctic and the idea of North.

If we consider the North the way that I propose, via cultural representations, this allows for considering all of the aspects mentioned as one. Cultural representations have been a source of motivation and proposition for scientists, they have permitted human and social changes, they are linked and participate in general history and they form, when one considers them as a whole, a historic and coherent suite in the

⁶ Daniel Chartier: “Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives, in *Problématiques de l’imaginaire du Nord en littérature, cinéma et arts visuels*,” Joë Bouchard, Daniel Chartier et Amélie Nadeau (eds.), Montréal: Université du Québec à Montréal, Département d’études littéraires et Centre de recherche Figura sur le texte et l’imaginaire, 2004, p. 7.

WHAT IS “THE IMAGINED NORTH”?

arts. Thus, this perspective allows for an unrivaled meeting, on common ground, of different traditions of knowledge. These converged to try to realise, as the thinkers on the North and the Arctic have long called it, an “interdisciplinary” and “multicultural” approach, the only possible approach to take into consideration the complexity and the fragility – from an environmental, social, and cultural point of view – of this ecosystem.

By defending the idea of a circumpolar and no longer territorial conception of the cold world, the latter is positioned as a whole that calls for solutions, reflections, and common positions, all the while taking into account the different cultures and languages that compose it. In this context, it seems impossible to propose an acceptable vision of the cold world, without articulating it in a multilingual, multicultural, and often conflictual, way.

The research in cultural studies on the North, supported by an examination of cultural representations, aims therefore at a renewal of studies on the relationships of humankind with its imagination, by a discursive analysis of the issues of the North, the Arctic, and the winter, as well as by a multinational, multidisciplinary, and pluralist approach. Consideration of the cultural and human aspects is an integral and necessary part of all research *on* and *in* the North; yet, therein lies a whole chunk of often forgotten or neglected Arctic or Nordic policies, agreements targeting the governance of the cold world, as well as scientific or technical research projects. For example, the historic 1977 agreement made with the Cree and the Inuit of the North of Quebec, the *James Bay and*

ENGLISH VERSION

Northern Quebec Agreement,⁷ often cited as a model of the first contemporary agreements between the State and its Indigenous peoples, makes absolutely no mention of Indigenous cultures, other than traditional practices that have direct repercussions on the shared or exclusive use of the territory. Ignoring the cultural and human aspects of the North leads to denying the complexity of circumpolar relationships and representations, and can lead to the establishment of policies that are maladapted to the territory. This is why one must reflect on the principles, the methodology, and the practices that set and establish the definition of North and the Arctic in a sociocultural perspective, because they have fundamental political and ethical implications.

Several basic principles and several intellectual positions on the definition of the Arctic should be kept in mind, among them: the variety of the terms that it covers; the necessity of a circumpolar perspective; interdisciplinarity; taking into account Indigenous and non-Indigenous points of view; “natural” and urban aspects; multilingualism; multiculturalism; and finally, the need to propose a new vocabulary to “recomplexify” the Arctic.

A quick inventory of the terms used to designate and circumscribe the cold world reveals an overlap of definitions that intersect with each other and distinguish themselves from each other, and that are sometimes used without discernment. There are of course the

⁷ For more on this important treaty and its aftermath, see for example Alain-G. Gagnon and Guy Rocher (eds.): *Regard sur la Convention de la Baie-James et du Nord québécois*, Montréal: Québec/Amérique, 2002.

WHAT IS "THE IMAGINED NORTH"?

terms "Arctic," "Antarctic," "Polar Region," and "Arctic Circle," which point to regions that are well enough defined, yet the rigidity of the borders is called into question by geographers. Additionally, there is the "North," the "cold world," even the "winter," that are based on more moveable concepts, variable according to the perspective of the speaker: What is cold? Where is the North, according to whether you are placed in London, Mexico City, Buenos Aires, Nuuk, or Yakutsk? Then, there are historico-political entities: Scandinavia, Russia, Siberia, Canada, Nunavik, Alaska. Finally, there are the groupings that superimpose these wholes: the Inuit world, the North Atlantic region, the circumpolar zone, the circumnordic zone, etc. Each term has its own values, an insistence on certain characteristics (geography, politics, language, culture, climate) and neglect others; each term displaces by its use the usage of other notions that define in a general manner the cold, polar, Arctic, Nordic, and winter world. To take note of the existence of these notions permits, at the very least, to specify the object of one's thinking and one's Nordic research.

Most of the thinkers of the Arctic world insist that one consider the region as a circumpolar "whole," as the sum of the different States, nations, cultures, histories, and relationships. The Arctic must be able to define itself as an idea by itself, although it has historically been thought, defined, and governed, especially over the last century, by parallel influences of power from the South. Iqaluit was long determined by Ottawa, Fairbanks by Washington, Nuuk by Copenhagen, and Yakutsk by Moscow. As previously mentioned, from the point of view of the Western imagination, the Arctic as it was positioned by the culture is the

ENGLISH VERSION

combined product of the English, German, and French cultures, to which has been added US-American popular culture. From the point of view of material exploitation, the railroads transport the minerals from the North that the South needs for its development, the electric lines bring electricity to the large cities, the roads allow wood to reach its “markets” of the South. The North is thought of by the “southernist” culture and it responds to its material needs. From this point of view, it cannot be surprising to note a simplification of forms and functions when it is a question of cultural representations of the North and the Arctic:⁸ far, empty, pure, “in danger,” “fascinating,” white, cold, and icy, the “North” finds its characteristics outside of itself,⁹ in a thinking that circumscribes it according to the imaginary and material needs of the South. A “circumpolar” vision would impose, on the contrary, considering the North in itself, in an ontological and definitive manner, to take into account the links that unite the different parts that compose it, as well as the distinctions between their cultures, their positions, and their historicities.

This vision allows for presenting the “North” simultaneously as a self-defined whole and as a diverse whole that reveals its richness and complexity. Because there

⁸ On the relationships of simplification and complexity, linked to concepts of ecology in the contemporary œuvre, see for example my article on the circumpolar artist Patrick Huse in Daniel Chartier: “Simplification / Complexity of the Arctic: The Work of Norwegian Artist Patrick Huse,” in Patrick Huse: *Northern Imaginary. 3rd Part*, Oslo: Delta Press and Pori Art Museum, 2008, p. 49-53.

⁹ On some characteristics of the North as discourse, see Daniel Chartier: “Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives” (n. 6), p. 9-26.

WHAT IS “THE IMAGINED NORTH”?

is a price, according to the Québécois linguist and geographer Louis-Edmond Hamelin, for considering the Arctic in a monodisciplinary perspective: “The monodisciplinary approach does not allow for producing enough of the pertinent and necessary knowledge to understand such a complex question.”¹⁰ By its fragility, by its climatic exception, by the degree of under-knowledge that characterises it, the “North” must be considered from a multidisciplinary point of view, “holistically” if you like – which joins the Inuit notions of “nuna” and of “sila.” What is true for every other region is even more so for such a fragile socio-cultural ecosystem. This implies a constant dialogue between the natural sciences and the social sciences, but also between social sciences and cultural studies and between cultural studies and the practices of cultural creation. This multidisciplinary point of view is not a luxury of the mind: it is a requirement that must be imposed on any Nordic research, intervention, and exploration project.

Some geographers have compared the Arctic to the Mediterranean, not because of its climate of course, but because populations live around the pole stemming from a rich variety of origins, simultaneously Indigenous (Inuit, Cree, Sami, Innu, etc.) and non-Indigenous (Icelandic, Finnish, Russian, US-American, etc.). Research on the North that only considers one or the other of the Indigenous or non-Indigenous perspectives will necessarily lead to a misinterpretation of the region. The exclusion of one or the other does

¹⁰ Louis-Edmond Hamelin: *Écho des pays froids*, Sainte-Foy: Les Presses de l'Université Laval, 1996, p. 86.

ENGLISH VERSION

not allow for considering the ensemble of the relationships that are at stake in the North.

There is an important requirement from the ethical point of view of research: as Indigenous voices have historically been ignored and few of them are preserved in cultural institutions, they require particular attention today. I submit here the example of the village of Hebron, on the coast of Labrador. This village, occupied by Inuit, administered by Moravian missionaries in the name of the government of Newfoundland, and supplied by the Hudson's Bay Company, was savagely closed by an administrative decision in 1959. Today, if one wishes to reconstruct the events that led to this tragedy – several Inuit, forcibly removed, died in the years following the closure of their village – one can read the government archives in Newfoundland; one could also easily find the reports and records of the Hudson's Bay Company, which have been the subject of publications and heritage protection; one could also easily consult the meticulous correspondence of the Moravian missionaries, which have all been digitized and are available in the archives of the congregation. But what is missing? The reactions, the opinions, and the voices of the Inuit who, without any institutional instruments to conserve their memory, have disappeared. The Indigenous point of view necessitates a special attention on the part of the researcher to emerge; sometimes, if it cannot be found, a space must be left for a "history of silence," significant of the issues and power relationships in the North, for ethically and honestly recounting certain historical events. The history of Hebron, that Carol Brice-Bennett describes

WHAT IS “THE IMAGINED NORTH”?

as “dispossession,”¹¹ is a clear case of it, but certainly not unique in the Arctic world.

Popular representations of the Arctic present it often as a white, cold, distant, uninhabited and uninhabitable, frozen, and empty world. It goes without saying that the Arctic is seen in this sense as nonurban and “natural:” beyond the ecumene, it symbolizes for the culture a space of emptiness and desolation. One has to admit that the Arctic region is sparsely populated, if we compare it to more temperate zones. The demographic disposition of the Earth clearly shows a concentration of the human population, in the broad periphery of the equatorial zones. However, the cold world also counts villages, cities, and even metropolises, which face considerable human, social, technical, cultural, and energetic challenges, as well as a pronounced alternation between the summer and winter seasons, which obliges the construction of dual architectural structures. Montreal, for example, with its 3.5 million inhabitants, can be considered – not for its latitude at 45 degrees, but in regards to the severity and length of its winter season – as the coldest large city (of more than a million inhabitants) in the world. What does it mean, beyond the direct climatic constraints, to live in a city with an alternating subtropical and subarctic climate, if we evaluate it from a social and cultural point of view? The impact of Nordic

¹¹ Carol Brice-Bennett’s essay retraces the history and the consequences of an involuntary movement of the Indigenous population of Labrador; this case is not unique, and other forced movements (in Alaska, in Greenland, in Russia) had equally tragic repercussions. Carol Brice-Bennett: *Dispossessed: The Eviction of Inuit from Hebron, Labrador*, Montréal: Imaginaire | Nord, coll. “Isberg”, 2017.

ENGLISH VERSION

conditions on the built environment, urban planning, the management of resources, and collective and individual adaptation of lifestyle has been little studied up until now, notably because the popular image of the North refers rather to a sparsely inhabited region, desolate, and of low population. Yet, this is not always the case. Here again, the images act as barriers to understanding the complexity of the North and the Arctic. To understand the circumpolar world well, it is thus necessary to take into consideration the urban and non-urban problems that characterize it.

To understand the different points of view that oppose each other and interact in the circumpolar world, one must recognize at what point several languages, whether they are Indigenous, non-Indigenous, and foreign, have constructed the idea and the paradigms of it. Languages that are little-spoken in the world but are spoken in the North (for example, Danish and Norwegian) have had a great influence on the definition of the Arctic, notably by the explorers originating from these countries who published numerous narratives of their travels. Foreign languages, for example German, have few ties with the colonial exploration or expansion of the North, but play an essential role in understanding it. Finally, the circumpolar region is one where the Indigenous languages remain the liveliest in the world: Cree, Inuktitut, Greenlandic, Yakut, although their knowledge outside of their primary zones is limited, remain the usual languages, and the languages of cultural creation and transmission. It is therefore necessary to presume a multilingual dimension in all research projects on the North and the Arctic and recognize that monolingualism and even bilingualism lead to a biased or incomplete vision of

WHAT IS “THE IMAGINED NORTH”?

the North. The solutions, though heavy, are multiple: personal knowledge of several languages, translation, as well as multilingual teams, which can iron out misconceptions of the issues.

The North constitutes an “intercultural laboratory.” Out of habit, we see the cities of the twentieth century as the first hotbeds of intercultural exchanges. However, the isolated posts of the Arctic were often, since their foundation, places of convergence for men and women from different cultures, in a contact and trading situation: this is the same in the case of missions, then mines, sites of dam construction, even places of confinement, which relied on a population of varied cultures, coming both from different regions of the countries concerned and, by immigration, from overseas. Furthermore, each circumpolar culture is the product of a synthesis of two or more cultures, from the South and from the North. Multicultural interactions are thus definitive of the North and the Arctic. Depending on the place, there is more or less diversity, more or less harmonious, between those of Indigenous and non-Indigenous origins. The Greenlandic identity, for example, is today a synthesis of several centuries-old Inuit cultures combined with those of the missionaries, the Danish colonizers, and recent immigration.

The circumpolarity, multidisciplinary, Indigeneity, urbanity, multilingualism, and interculturalism each impose methodological precautions on research on the North and the Arctic, and they are prerequisites without which the circumpolar region finds itself once again “simplified” and robbed of its capacity to think for itself. Furthermore, as Louis-Edmond Hamelin has shown in his work, the “North” calls for the crea-

ENGLISH VERSION

tion of new terms and its own vocabulary to appreciate its specificity and its originality.¹² These neologisms, among which we count terms that have become part of common speech in French today, like “nordicité” (nordicity), “hivernité” (winternity), and “glissité” (slipperiness), invented for the French language, but widely translated into several other circumpolar languages, allow for the opening of a new field of research on the North, at the same time respectful of the differences that compose the region and the convergences that make it different from the rest of the world.

Conclusion

In all research on the North and the Arctic, the cultural and human aspects must be considered, even though these have been marginalized by Western tradition that projects on the cold world its “Arctic dreams” – to borrow Barry Lopez’s expression¹³ – by a rich imaginary, a fascinating system of signs, constructed over centuries of discourse, but from which the considerations of those who live there have been precisely excluded, as well as a part of the geographic reality of the region. We must propose and defend the idea of “recomplexifying” the North, the winter, and

¹² By Louis-Edmond Hamelin, in addition to *La Nordicité du Québec* (Québec: Presses de l’Université du Québec, 2014), see: *Écho des pays froids* (n.10); *Discours du Nord*, Québec: GÉTIC, Université Laval, 2002; *Le Québec par des mots. Partie II : L’hiver et le Nord*, Sherbrooke: Presses de l’Université de Sherbrooke, 2002.

¹³ Barry Lopez: *Arctic Dreams. Imagination and Desire in a Northern Landscape*, New York: Scribner, 1986.

WHAT IS “THE IMAGINED NORTH”?

the Arctic, to re-establish an “ecology of the real” that takes into account the richness and the variety of the circumpolar world. To achieve this, the following hypotheses must be defended, according to which a) the North and the Arctic are composed of places in constant interaction; b) the cultural and human aspects predetermine the relationship to the territory; c) the North and the Arctic must be envisaged in a multicultural and circumpolar manner, according to an interdisciplinary perspective; d) a circumpolar conception presents the North as a whole which calls for solutions, reflections, and common positions, all while taking into account the different cultures and languages which compose it, in a multinational, multilingual, multicultural, and often conflictual manner.

Without this double effort, first, of understanding and questioning the sign system that is the imagined North, from both a multicultural and historic point of view, and second, of establishing ethical principle to achieve research that is multidisciplinary, multilingual, and in agreement with the object studied, the North, the winter, and the Arctic will remain spaces considered empty and devoid of their cultural richness. We will thus also renew commonly held ideas about the Arctic and concerning the people who live there.

Daniel Chartier

Université du Québec à Montréal

Mii lea davi govvádallan? Ehtalaš prinsihpat

Jorgalan dárugielas sámegeilli: Ámmá giella

Abstrákta – Oarjemáilmmi dáiddárat ja čállit leat govvádallan ja ovdanbuktán Davviriikkaid jahkečuđiid čađa, mii lea dagahan ahte, logijagiid suksessiva akkumulašuvnnain diskurssaiguin, leat ráhkaduvvon "davi govvádallamat" - mat vulget "Davvin" Skandinávia, Ruonáeatnamiis ja Ruoššas, "davvi allagassii" dahje Davvináhpái. Oarjemáilmmálaččat leat johtán davvináhpái beare jahkečuđi dás ovdal, mii dagaha ahte "Davvi" lea buođus duppalgeahčastagas: Geahčastat mii boahdá olggobealde - hábmecuvvon erenoamážit oarjemáilmmálaš govvádallamiiguin - ja geahčastat mii boahdá siskkáldasat - Davi kultuvrrain (Inuit, Skandinávia, Cree, jna.). Dat vuosttaš dávjá álkiduvvo ja nubbi hilgojuvvo. Jus mii háliidat áddet mii "Davvi" lea oppalaš perspektiivvas, fertet jearrat guokte jearaldaga: mo definerejit govvádallamat davi, ja makkár ehtalaš prinsihpat berrejit stivret mo mii dulkot davi kultuvrraid oažžun dihte ollislaš oainnu das (maiddá, erenoamážit daid maid lullin leat badjelgeahččan)? Dán artiikkalis geahččala čálii loktet dán guokte jearaldaga, vuos dan bokte ahte definere mat leat govvádallamat daviin, ja dasto evttohusain fátmmastit prográmma "rekomplexeret" kultuvrralaš Ártkisa.

Jahkečuđiid čađa leat oarjemáilmmi dáiddárat ja girječállit govvádallan ja govvidan galbma máilmmi. Dát ovdanbuktojuvvo iešguđetge govvádallamiiguin "davi"¹, Skandinávia, Ruonáeatnamiis, Ártkisa, polaid ja dálvvi birra, mat dávjjimusat ovdanbuktojit álkiduvvon ollisvuohtan horisontálalaš hámiiguin, ja

¹ Fránka originálačállosis geavahuvvo doaba "le Nord", man mii leat válljen jorgalit "daviin" čájehan dihte ahte ii leat dušše sáhka geográfalaš guovlluin nu mo Davviriikkat dahje sullasaš, muhto ahte lea doaba mii fátmasta sihke geográfalaš, dáiddalaš ja olmmošlaš aspeavttaid. Muhtin sajiin čállosis, gos bohtet ovdan ahte lea sáhka davi birra geográfalaš guovlun, geavahat mii "daviguovllut".

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

ivnniiguin nu mo vielgadiin, čuvges alihiin ja šovkes čuvgesruoksadiin. Jiekŋa, muohta ja visot galmmas lea vuodđun dán govvádallamii, muhto maiddá moralalaš ja ehtalaš árvvut mat leat čadnon solidaritehtii. Sidjiide lea poeaŋŋa ahte lea oktavuohta dasa mii lea "don bealde buot", ahte lea gos Árttis álgá, eurohpálaš ekumenaid geažis, dan Eurohpá man sáhtttá ipmirdit ja gos ássat olbmot, ahte lea "lunddolačča" álggus, amas, ávdin máilbmi guhkkinn eret: Davvi allagasas. Dát govvádallamat oktiibuot dagahit mearkavuogádaga man mun dás gohčodan "Davi govvádallamat".

Nu mo buot govvádallon lanjain lea "davi" ovdanbuktin maiddá duppal geahčastat, okta geahčastat olggobealde ja okta siskkobealde. Das mii sáhttit earuhit ovdanbuktimiid mat *bohtet davvin* ja ovdanbuktimiid *davi kultuvrrain*. Leat eanaš duiska, fránska, eŋgelas ja amerihkálaš ovdanbuktimat mat govvádallet davi olggobealde, ja dát hárve earuhit iešguđetlágan kultuvrralaš lanjaid ovttá guovllus. Dain lea Árttis ja polat guovddážiis, muhto eai váldde vuhtii kultuvrraid (inuihtaid, sápmelaččaid, creaid, innuaid, skandinávid, jna.) mat bohtet dáid guovlluin. Govvádallamat mat *bohtet davi* kultuvrrain fátmastit muhtomin viidát go dušše iežas, juoga mii erenoamážit guoská skandináválaš kultuvrraide, mat go vuostáiváldojit Eurohpás atnet ávkki positiivvalaš guottuin. Dát dattetge ii guoskka eamiálbmogiidda, mat guhká leat marginaliserejuvvon, dávjá retoralaš ulbmiliin nannet gova ahte Árttis eai ása olbmot ja doppe ii sáhte ássat, áinnas man bastevaš politihkalaš ja etnalaš ovdagáttut dorjot. *Davi govvádallamat*, mat leat olggobealde hábmejuvvon, ja *govvádallamat davi kultuvrrain*, mat leat davviguovlluin hábmejuvvon, hárve deaivvadit, muhto dattetge orrut leamen dego

SÁMI VERŠUVDNA

guokte iešguđetlágan diskursiiva joavkku, vaikke vel goappašiin lea seamma guovlu čujuhusčuokkisin. Dát gaska guoská maiddá eará ovdanbuktojuvvon guovlluide, muhto davi govvádallan, ja erenoamážit "davvi allagasas", leat earaláganat go daid vuolggasadji lea diskursa ii ge dat mii lea vásihuvvon jahkečuđiid čađa. Dát leat dagahan ahte dat guokte diskursiiva joavkku, nubbi hábmejuvvon siskkobealde ja nubbi olggobealde, gávdnojit beroškeahtta nubbi nuppis. Jurddaš beare ahte olbmot ollejedje Davvináhpái vuos jahkečuođi jagi áigi, muhto ledje govvádallan báikki mánggaid duhátjagiid dan ovdal. Lea maiddá dehálaš muitit guokte sosiopolitihkalaš fenomena main leamaš váikkuhus mo davviguovllu ja Ártkis lea ovdanbuktojuvvon ja mo dat lea vuostáiváldon: Vuos lea eamiálbmogiid koloniseren. Mii lea dagahan ahte kultuvrralaš ja olmmošlaš aspeavttat galbma guovlluin leat jávohuhttojuvvon. Ja nubbi lea ahte mii oaidnit oppalaš tendearasa das mo davviguovllut stivrejuvvojit, leat oaivegávpogat ja eiseválddit lullin mat hálddašit dáid guovlluid iežaset máhtu (man vuodđun eai leat báljo vásáhusat) ja iežaset dárbbuid vuodul, dainna gaskkain maid dát sáhtta dagahit.

Gávdnojit nappo ovdanbuktimat, dávjá oarjemáilmmálaš, daviin ja Ártkisis, mat leat hui olámuttos ja main sakka vuhtto (álkiduvvon) semiologálaš šiehttan gaskaneaset. Dasa lassin leat ovdanbuktimat davi kultuvrrain, muhttin kultuvrrat leat hui dovddus, nu mo Ruošša ja Skandinavia, ja eará áibbas amas, nu mo eará sirkumpolára guovllut ja eamiálbmogat. Studeret "davi" oppalašperspektiivvain, mii váldá vuhtii mánggabealatvuoda ja iešguđetge dásiid oidnomis, fertet mii danne jearrat guokte jearaldaga mat álggos orrut dárbbasmeahttumat,

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

muhto mat min oktavuodas leat dehálaččat: Mo sáhtta defineret davi dan bokte mii lea govvádallojuvvon? Ja makkár ehtalaš prinsihpaid berret váldit vuhtii vai sáhttit studeret davi kultuvrraid oppalašperspektiivvain mii fátmasta daid kultuvrraid maid lulli kultuvrrat leat marginaliseren?

Defineret davi dan bokte mii lea govvádallojuvvon

Iešguđetge diskurssat davi, dálvvi ja Árktisa birra bohtet iešguđetge hámiin, bohtet iešguđetge kultuvrrain ja leat čohkkejuvvon jahkečudiid čada duppál prinsihpa bokte syntesa ja gilvvu birra.² Diskurssaid sáhtta kategoriseret juogo addon áigodaga dahje dan dihto kultuvrra vuodul man ovdanbuktá, ja mii ollislaččat dagaha dan man mii sáhttit gohčodit "davi govvádallamin". Lea sáhka mearkavuogádagas mii rievdá ja lea mánggabealat, mii doaibmá iešguđetge láhkai dan duohken makkár konteavsttas juoga ovdanbuktojuvvo dahje vuostáiváldojuvvo.

Go mun muhttin logijagiid áigi ovdánahtten doahpaga "davi govvádallamat", almmuhin seammás hypotesa ahte beroškeahhtá daid iešguđetge kultuvrrain davvin ja dain vuostálasti ipmárdusaid davi birra, maiddá gávdno estehtalaš vuodđu mas leat erenoamáš dihto

² Prinsihpa syntesa ja gilvvu birra diskurssain, masa Wolfgang Iers girjjálašvuodateoriija lea addán inspirašuvnna, mas lohkan lea guovddážis ja mii gullá estehtalaš responsateoriijii, lean mun ovdanbuktán Daniel Chartier:i: *L'Émergence des classiques*. Montréal: Fides, 2000.

SÁMI VERŠUVDNA

kultuvrralaš mearkkat das mii lea davvi. Dát mearkkat, maid oarjemáilmmi kultuvra lea čuohtejagiid čohkken ja mat galge ovddastit jurdaga davi birra, leat álelassii meannuduvvon odđa jurdagiiguin. Govvádallamat daviin nannejuvvojit ja divvojuvvojit ovdamearkka dihte dan bokte ahte eamiálbmogat ja báikegotteolbmot viimmat lohkkojit. Mearkavuogádat lea ealli ja "orgánalaš", ja dat rievddada historjjálaš áigodagaid ja iešguđetge dilálašvuodaid mielde. Nu mo buot eará mearkavuogádagat, dagaha dát vejolažžan govvádallat máilmmi go mearkkaid geavaha, juoga mii dagaha vejolažžan ovddastit olles konseptta davi birra mottiin mearkkain. Čuvgesalit ivnnis lea earret eará dát doaibma: lea doarvái dan atnit buktin dihte geahččái ovdan galbma ja agálaš univearssa, mii biddjo mearkavuogádahkan ollislačcat.

Nu mo buot vuogádagat mat leat jahkečuđiid hábmejuvvon diskurssaiguin, ferte, jus sáhtta problematiseret dan vuodu ja beassat das eret, odđasis konstrueret ja rievdadit. Seammás ferte váldit vuhtii vuogádagat mii jo gávdno, nu mo sii guđet ráhkadedje vuosttaš inuihtalaš guhkesfilmma, *Atanarjuat*,³ dahke ja lihkestuvve go geavahedje oarjemáilmmi jurdaga Ártkasis vuodđun ja de odđasis konstruerejedje dan.⁴ Sii dihte ahte geahččit máhtte kodaid mearkavuogádagas mat dagahit davi govvádallamiid, ja maid oarjemáilmmi kultuvra lea hábmen, ja atne dáid vuolggasadjin go ovdanbukte sin iežaset govvádallama dán báikkis. Dát govvádallan šaddá oassin

³ Zacharias Kunuk: *Atanarjuat*, 2001.

⁴ Ovdamearkka dihte de ii leat oktage rolla guhte váivašuvvá nealggi dahje buollaša dihte (ovtta scenas lea vel okta almmái guhte viehká álás jieŋa rastá), ii oktage láhppo, muhttin inuihtat leat skealmmat ja eahpelojála, leat mánggabelat riiddut.

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

govvádallamis mii jo lea, muhto buktá ođđa čuolmmaid ja kodaid. Nu mo Wolfgang Iser resepsuvdnateoriija,⁵ váldojit ođđa áššit mat ealihit ja hábmejit govvádallama kultuvrii, gosa dat čohkkejuvvojit ja biddjojit vuostálagaid. Govvádallan sealluha iežas kohereansa seammás go hábmejuvvo ođđa kultuvrralaš evttohusaid mielde, mii lea filtrerejuvvon čohkkenproseassa ja gilvvu bokte. *Atanarjuat* lihkostuvvan lea ovdamearkka dihte dagahan ahte filmmas leamaš mearkkašupmi davi govvádallamiid dálá áiggi. Vaikke dat ii livčče ožžon ollu bálkkašumiid, de dat goitge livčče buktán juoga govvádallama diskursa-čoakkáldahkii, muhto de ii livčče seamma viidát rievdadit kodaid.

Geavahit "davi govvádallamiid" doahpaga vuolggasadjin rievdata dáinna lágiin mo mii ipmirdat guovllu, go mii fáttmastat daid kultuvrralaš ja olmmošlaš aspeavttaid, ja go álggahat kritihkalaš barggu vai sáhttit oažžut ipmárdusa estehtalaš ja politihkalaš čanastumiin gaskal ovdanbuktimiid, govvádallamiid, guovllu ja kultuvrra. Hállat davi govvádallamiid birra eaktuda ahte gávdno oktavuoha gaskal kultuvrralaš ovdanbuktima ja ieš dan guovllu, juoga mii ii leat diehttelas, ja geažuha ahte duohta oktavuoha sáhttá hábmet ovdanbuktimiid mat bohtet doppe. Sáhttá orrut ahte dát vuostilda modernismma ja poastamodernismma oainnu iešguđetge dáiddahámiid iešstivrejumis, muhto jus ii geahča "báikki" kultuvrralaččat ráhkaduvvon, nappo juoga mii maiddá stivrejuvvo iežas njuolggadusain. De báhcá vel ásahit dan mii lei sáhttit leat oktavuoha gaskal dan

⁵ Wolfgang Iser: *L'Acte de lecture. Théorie de l'effet esthétique.* Brussel: P. Mardaga, 1985 (1976).

SÁMI VERŠUVDNA

duohta báikki ja *ovdanbuktojuvvon* báikki, mii dagaha ahte mii sáhttit hállat dan birra mii lea "jurdda báikkis". Dán oktavuodas ferte "jurdda báikki birra" definerejuvvot submin buot gilvaleaddji diskurssaiguin mat bohtet oktanaga. Dát mearkkaša sihke ahte ii leat celkon ahte duohta báiki buktá jurdaga (seamma) báikki birra, ja nuppi láhkai, ahte diskursa ii sáhte leat ollislaččat sirrejuvvon *duohtavuodas*. Báikkit dagahit mánggabealat olmmošlaš konstrukšuvnna, hábmejuvvon vásáhusain, diskurssain, konkrehta, kultuvrralaš ovdanbuktimiin ja muittuin. Buot dát čujuhít juoga masa nu mii lea duohta, olbmui ja duohtavuhtii, vaikke vel lea sáhka konkrehta, diskursiiva dahje semiologálaš duohtavuodas.

Ášši man dábálaš diskurssat eai digaštala, muhto maid lea riekta jerrat, lea ahte sáhtta go oarjemáilmmi kultuvrrain oaidnit davviguovlluid "báikin". Go davvi ovdanbuktojuvvo de davviguovllut historjjálaččat leat gehččojuvvon "latnjan" eaije "báikin". Go mearkkat mat leat čatnon ávdin guovlluide, agálašvuhtii ja vielgadii deattuhuvvojít de dat lea dagahan ahte lea šaddan vuogádat mas ovdanbuktimat eai álo váldde vuhtii olbmui vásáhusaid guovllus⁶. Jahkečuđiid čađa ii leat fenomenologálaš máhtu davviguovlluide leamaš diehttelas. Oarjemáilmmi olbmot liikojit áicat davi dego livčče leat nuppe bealde dan gos olbmot sáhttet ássat ja man sáhtta ipmirdit. Goitge lea guovlu man ovdii rážastit guorahallat, muhto dát lea váldán ággi go sii leat govvádallan dan čállosiid bokte, ja nu leat garván máhtu. Dasa lassín leat hilgon/garván - vuos

⁶ Lohkan dihte eanet gaskavuoda birra gaskal lanja ja báikki davis, geahča čoakkáldaga *Le lieu du Nord. Vers une cartographie des lieux du Nord*, Québec: Presses de l'Université du Québec ja Stockholm: Université de Stockholm, coll. "Droit au pôle", 2015.

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

váilevaš máhtu dihte, dasto olggušteame dihte - oasi diskurssain dain geat áppet guovlluin (inuhtain, sápmelaččain, creeain, jna.) Mánnga oarjemáilmmi muitalusain orru davvi nu leamen bealátkeahes matrisan gosa sáhtta bidjat mitalusa nu ahte ii váldde vuhtii konkrehta dahje fenomenológalaš duohtavuoda, nu guhká go gudnejahtta mánnga eavttu ja dovdomearkka mat leat dábálaččat govvádallamiidda davi birra. Gávnnumuitalusas poesijji, popularakultuvrra filmmas ja máidnosiin govvadáidagi, ja lávlagis máinnasrománii, lea olles govvádallan huksejuvvon ovdanbuktimiiguin ja ipmárdusaiguin. Dát govvádallan čujuha masa nu mii lea "davvi" mii historjjálaččat gehččojuvvo olmmošlaš ja kultuvrralaš konstrukšuvdnan mas lea estehtalaš kohereansa mii rasttilda áigodagaid, šáŋŋeriid, teknikaid ja kultuvrraid, seammás go heiveha iežas iešgudege konteavsttaide. Gullevaš kultuvrrain lea juoga individuála ja oppamáilmmálaš, ja dát dagaha dievaslaš syntesa mii sin iežaset ja mii sin definere. Islánda lea iežas vuogi mielde oassin davi govvádallamis, seammás go eará dovdomearkkat (stáhtus suolun, gullevašvuolta Skandináviai jna) maiddá definerejit dán kultuvrra.

Hállat davi govvádallama birra buktá nappo reflekšuvnna jurdaga birra báikkis, oktavuodaid gaskal dan mii lea konkrehta, vásihuvvon, govvádallon ja ovdanbuktojuvvon báikkis, mearkavuogádagas mii sihke lea vuogádatlaš ja diakrona, mánnggakultuvrralaččas, erenoamážis ja oppamáilmmálaččas ja fátmteamis ja hilgumis dihto diskurssain oarjemáilmmi definišuvnnain daviin. Lea metodalaš, teorehtalaš, estehtalaš ja politihkalaš bargu mii ain lea ovdáneamen, muhto mii addá vejolašvuoda viimmat

SÁMI VERŠUVDNA

fátmmastit kultuvrralaš ja olmmošlaš aspeavttaid davi ja Árttisa oppalaš dutkamis.

Dat mii lea erenoamáš dáinna mearkavuogádagain lea ahte sii geat ássat guovllus leat unnán daid guorahallan, seammás go leat hábmejuvvon earáin geat eai goassige leat leamaš daid doppe. Govvádallan ja diskurssat dagahit nana ja oktiibiddjon vuogádaga, muhto dat dagaha stuorra hástalusaid mat gusket dasa ahte duodaid oahpásnuvvat galbma máilmmiin, dohkkehit sin diskurssaid, dárbbuid ja sávaldagaid geat ássat doppe, ja vai sii sáhttet govvádallat galbma máilmmi ieža, kultuvrralaš ja intellektuála perspektiivvas.

Dán mearkavuogádagas leat historijá čada leamaš vuodus diskurssat mat bohtet olggobealde, guovlluid birra mat leat gehččojuvvon latnjan, eaige báikin, ja maid eiseválddit mat dušše gehččet daid resursan sihkkarastin dihte iežaset birgenlági leat stivren. Danne lea dárbu eaktudit veahá ja dárbbasat ehtalaš gohcuma barggus dustet olles kompleksitehta.

Fátmmastahtti prográmma mii dagaha stuorát ipmárdusa kultuvrralaš Árttisis

Guorahallat davi govvádallamiid, mearkkaša dahkat analiissaid daid iešguđetge ovdanbuktimiin daviin, dálvvis ja Árttisis fágaidrasttildeaddji, mánggakultuvrralaš ja sirkumpolára geahččanguovlluin. Go vuodđun leat konseapttat nu go kultuvrralaš "davvivohta" ja "dálvevohta", ja definišuvdna daviin "vuosttažettiin kultuvrralaš diskursan, dábálepmosit geavahuvvon

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

dihto guovllu birra",⁷ de sáhtta studeret historjjálaš ovdáneami ja variašuvnnaid dán diskurssas. Dáinna vugiin sáhtta maiddá studeret mo jurdda Árktsisa ja davi birra lea ovdánan.

Dákkár lahkoneapmi dahká vejolažžan geahččat davi ovdanbuktimiid bokte mat fátmmastit dieđalaš, historjjálaš, sosiála ja dáiddalaš buvttuid. Kultuvrralaš ovdanbuktimat leat buktán dieđalaš ovdánemiid ja olmmošlaš ja sosiála rievdamiid, ja leat leamaš mearrideaddjin davviguovlluid historjái ja sin iežaset kultuvrralaš buvttademiide. Dainna lágiin dahká dát perspektiiva vejolažžan odđa deaivvadeapmái, oktasaš vuodus, iešguđetge máhtoárbevieruid gaskii. Dát deaivvadit geahččalemiin dahkat duohtan dan maid davi ja Árktsisa jurddašeaddjit ja dutkit guhká leat gohčodan "fágaidrasttildeaddji" ja "mánnggakultuvrralaš" lahkoneapmin, mii lea áidna vejolaš lahkoneapmi jus galgá váldit vuhtii dán ekovuogádaga mánnggabelatvuodđa ja raššivuodđa, biraslaš, sosiála ja kultuvrralaš geahččanguovllus.

Go bealušta jurdaga sirkumpolára ipmárdusas ovdal go territoriála ipmárdusas galbma máilmmis, de ovdanbuktá territoriála ollisvuohtan mii gáibida oktasaš čovdosiid, refleksuvnnaid ja oaiviliid, seammás go ferte váldit vuhtii daid iešguđetge kultuvrraid ja gielaid mat dagahit dan. Dákkár oktavuodas orru veadjemeahttun ovdanbuktit dohkálaš govvádallama

⁷ Daniel Chartier: «Au Nord et au large. Représentations du Nord et formes narratives», i Problématiques de l'imaginaire du Nord et littérature, cinéma et arts visuels, Joë Bouchard, Daniel Chartier og Amélie Nadeau (dir.), Montréal: Université du Québec à Montréal, Département d'études littéraires, Centre de recherche Figura sur le texte et l'imaginaire, 2004, s. 7.

SÁMI VERŠUVDNA

galbma máilmmis almma dan ovdanbuktit mángggagielagin, ja mángggakultuvrralažžan mas leat siskkáldas vuostálasvuodát.

Kulturoahpuin leat davi dutkamiid vuodus iskkadeamit kultuvrralaš ovdanbuktimiin, maid mihttomearit leat ođasmahttit dutkosiid mas dutket oktavuodáid gaskal olbmo ja su govvádallama. Dát sáhtta olahuvvot dan bokte ahte dahká diskursaaneliissa jearahallamiin mat gusket davvi guovlluide, Árktsiia ja dálvái, seamma bures go Magga-našuvnnalaš, fágaidrasttildeaddji ja pluralisttalaš lahkoneami.

Kultuvrralaš ja olmmošlaš aspeavttat leat ovttaidahtton ja dárbbalaš oassin davi dutkamis ja dutkamis davi geahččanguovlluin. Dát dávjá vajálduhttojuvvo dahje badjelgehččojuvvo politihkas mii fátmasta Árktsiia ja davviguovlluid, šiehtadusain mo galbma máilbmi galgá stivrejuvvo, ja iešgudetge dutkanprošeavttain. Okta ovdamearka dasa lea historjjálaš šiehtadus mii dahkkojuvvui eamiálbmogii guin creeaiguin ja inuihtaiguin Davvi-Québec 1977:s, la Convention de la Baie-James et du Nord québécois,⁸ mii dávjá atno ovdamearkan ovttá dálááiggi vuosttaš šiehtadusain gaskal stáhta ja eamiálbmoga. Eamiálbmoga kultuvra ii oba namuhuvvo ge šiehtadusas, earret árbevirolaš dábit mat njuolgut váikkuhit dasa ahte lea oktasaš dahje sierra geavaheapmi luondduguovlluin. Go hilgu kultuvrralaš ja olmmošlaš aspeavttaid davviguovlluin dagaha biehttalusa dan mángggabealat govvas

⁸ Loga eanet dán dehálaš šiehtadusa birra ja dan váikkuhusain, ovdamearkka dihte dáppe: Alain-G. Gagnon ja Guy Rocher (dir.): Regard sur la Convention de la Baie-James et du Nord québécois, Montréal: Québec/Amérique, 2002.

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

sirkumpolára diliin ja davi ovdanbuktimiin, ja sáhtta mielddisbuktit politihka mii ii leat heivehuvvon guvlu. Berre jurddašit prinsihpaid, metodologiija ja bargovugiid mat hábmejit ja leat oassin davi ja Árktsisa definišuvnnas sosiokultuvrralaš geahččanguovllus, jus dat dagaha mearrideaddji politihkalaš ja ehtalaš váikkuhusaid.

Mii guoská Árktsisa definišuvdnii, berre dovdat muhttin vuodđoprinsihpaid ja ideologalaš oaiviliid. Dát sisttisdoallet earret eará variašuvnna terminologijjas maid Árktsis gokčá, dárbbu sirkumpolára geahččanguvlui, fágaidrasttildeapmái, eamiálbmogiid ja ii-eamiálbmogiid oaiviliidda, "lunddolaš" ja urbána aspeavttaide, mánggagielatvuhtii, interkultuvrralaš ipmárdussii ja loahpalaččat dárbbu ráhkadit ođđa sátneriggodaga hábmet eanet kompleksa gova Árktsisis.

Jus johtilit geahčasta makkár doahpagat geavahuvvojit čilget ja ráddjet dan man mii ipmirdat Árktsisiin, de dat čájeha ahte leat definišuvnnat mat leat lahkalaš ja main lea erohus, ja mat muhtomin geavahuvvojit alma daid earuhit. Doahpagat nu mo "Árktsis", "Antárktis", "polára guovllut" ja "davvi poláragierdu" čujuhit oalle dárkilit definerejuvnon guovlluide, muhto geográfat goitge digaštallet man čavga dát ráját galget leat. Dasa lassin gávdnojit doahpagat "davvi", "galbma máilbmi", ja "dálvi" mat čujuhit eanet johti konsepttaide mat rievddadit dan duohken makkár geahččanguovlu lea. Mii lea galmmas? Mii lea "davvi" go dan oaidná Londonis, Meksikos, Buenos Airesis, Nuukas ja Jakutskas? Viidásat leat mis historjjálaš ja politihkalaš ovttagat nu mo Skandinávia, Ruošša, Sibir, Kanada, Nunavik ja Alaska. Loahpas leat

SÁMI VERŠUVDNA

joavkkut mat rasttildit dáid definišuvnnaid, nu mo inuihttamáilmmis, davvi-Atlántalaš guovllus, sirkumpolára guovlu ja sirkum-davviriikkalaš guovlu. Juohke doahpagis lea iežas mearkkašupmi mii čuoččuha alddis leat dihto erenoamánvuodát (geografiija, politihkka, giella, kultuvra, dálkkádat) ja mii hilgu earáid. Doahpagiid geavaheapmi hoigá eret eará doahpagiid mat oppalaš vuogi mielde definerejit galbma, polára, davviriikkalaš ja dálvvalaš máilmmi. Go lea dihtomielalaš ahte dát doahpagat gávdnojit, sáhttá, aŋkke, deattuhit mii dat man birra smiehttá ja studere daviin.

Eatnašat geat dutket árktalaš máilmmi čuoččuhit ahte ferte geahččat guovllu sirkumpolára "ollisvuohtan", submin daid iešguđetge stáhtain, našuvnnain, kultuvrrain, historjjáin ja dilálašvuodain. Árkttis berre sáhttit iežas defineret sierra jurddan, vaikke vel guovlu historjjálaččat lea jurddašuvvon, definerejuvvon ja stivrejuvvon váikkuhanfámuin lullin, erenoamážit maŋimuš jahkečuodi. Ottawa stivríi guhká Iqaluita, Washington stivríi Fairbanksa, Københámman stivríi Nuuka ja Moskva stivríi Jakutska. Mii leat oaidnán ahte Árkttis, jurddašuvvon oarjemáilmmi geahččanguovlluin, nu mo ovdanbuktojuvvo kultuvrras, lea seagáš buvttá man engelas, duiska ja fránska kultuvra lea hábmen, ja maiddá amerihkálaš popularakultuvrras. Mii guoská ávnnaslaš geavaheapmái, de fievrída ruovdemáđii minerálaid davvin lulás, elrávdnjejohtasat fievrídit elrávnnji stuorra gávpogiidda, ja geainnut dagahit ahte meahcci sáhttá fievríduvot "márkaniidda" lullin. Lea "lulli" kultuvra mii lea defineren davi, ja dat vástida dán kultuvrra ávnnaslaš dárbbuide. De ii berre olmmoš leat hirpmástuvvan go konstatere ahte hámit ja doaimmat

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

leat álkiduvvon go lea sáhka kultuvrralaš ovdanbuktimiin daviin ja Árktesis.⁹ Davviguovlluin ipmirduvvo juoga mii lea guhkkín, ávdin, buhtisin, "áitojuvvon", "hirpmáhuhti", vielgadin, galmmasin ja jiekŋan, ja dan erenoamášvuodát leat olggobealde iežas,¹⁰ jurddašanvuogis mii hehte sin daid jurddašuvvon ja ávnnaslaš dárbbuiguin lullin. "Sirkumpolára" višuvdna bágge min dattege geahččat davi alddis, ontologalaš ja definerejeaddji vuogi mielde, ja váldit mielde geahčastahkii dan mii čatná daid iešguđetge osiid, muhto maiddá dan mii earuha daid iešguđetge kultuvrraid, posišuvnnaid ja historjáiid nubbi nuppis. Dát govva diktá min sihke ovdanbuktít "davi" iešdefinerejeaddji ollisvuotán, ja čájehit dan variašuvnnaid, riggodaga ja kompleksitehta.

Ii leat nuvtá geahččat Árktsa monodisiplinera geahččanguovllus, lingvistta ja geográfá Louis-Edmond Hamelin, Québecas, oainnu mielde. "Monodisiplinera lahkoneapmi ii divtte min buvttadit dehálaš máhtu dan birra mii lea dehálaš ipmiridan dihte ná kompleksa ášši."¹¹ Danne go lea nu rašši, go lea erenoamán dálkkádatdilli ja go váilu máhtu mii

⁹ Mii guoská oktavuhtii gaskal álkidahttima ja kompleksitehta, oktavuodas ekologalaš konsepttaiguin dálááiggi buktaigiin, geahča ovdamearkka dihte mu artiikkala sirkumpolára artista birra Patrick Huse Daniel Chartier:s: « Simplification / Complexity of the Arctic: The Work of Norwegian Artist Patrick Huse » Patrick Huse:s: Northern Imaginary. 3rd Part, Oslo: Delta Press og Pori Art Museum, 2008, s. 49-53.

¹⁰ Lohkan dihte moadde karakteristihka birra daviin diskursan, geahča Daniel Chartier: «Au Nord et au large. Représentation du Nord et formes narratives» (n. 6), s. 9-26

¹¹ Louis-Edmond Hamelin: Écho des pays froids, Sainte-Foy: Les Presses de l'Université Laval, 1996, s. 86.

SÁMI VERŠUVDNA

karakterisere "davi", de ferte dán geahččat fágaidrasttildeaddji perspektiivvas, "holistihkkálaččat" jus háliida, mii vástida inuihtaid doahpagiidda "nuna" ja "sila" birra. Dat mii lea duohta vaikke guđe eará regiovdnii, guoská seamma ollu dákkár rašis sosiokultuvrralaš ekovuogádahkii. Dát gáibida maiddá bistevaš dialoga gaskal luonddudiehtaga ja sosiáladiehtaga, muhto maiddá gaskal sosiáladiehtaga ja kulturoahpu ja gaskal kulturoahpu ja hábmejeaddji dáidaga. Dát fágaidrasttildeaddji oaivil ii gula dušše fantasiijii, muhto juoga man ferte gáibidit buot dutkanprošeavttain mat váldet oasi ja ávkkástallet davi.

Muhttin geográfat leat buohtastahtán Árktisa Gaskaábiin. Dieđusge ii dálkkádaga geažil, muhto go davvináhpi birra ášset álbmogat rikkis ja mánggabelat duogážiin, sihke eamiálbmogat (inuihtat, cree, sápmelaččat, innuat, jna.) ja ii-eamiálbmogat (islándalaččat, suomelaččat, ruoššat, amerihkálaččat, jna). Dutkkus davviguovlluin mii dušše oaidná ovtta dain geahččanguovlluin, diehttelas dagaha boasttuipmárdusa regiovnas. Olmmoš ii dutkka ollisvuoda dain mii sáhtá manahuvvot jus hilgu ovtta dahje mánga dain perspektiivvain.

Gávdno okta dehálaš gohččun mii guoská ehtalašvuhtii dán dutkosis. Go jo eamiálbmogiid oaivilat leat historjjálaččat hilgojuvvon ja unnán seilon kultuvrralaš ásašusain, dárbbášit sii dál liige fuomášumi. Okta ovdamearka lea gilli Hebron Labradoršittus. Dát gilli, gos inuihtat ásse, man Brødremenigheten miššonearat stivrejdedje Newfoundlanda namas, ja man Hudson's Bay Company ruhtadii, giddejuvvui fasttes vuogi láchkai maŋŋá ovtta hálldahaslaš mearrádusa 1959:s. Ollu

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

inuihtat bággejuvvo fárret dahje jápme jagiid manjá go giddejedje gili. Jus odne háliidivčče rekonstrueret dáhpáhusa mii dagahii dán roasu, de sáhtta lohkat Newfoundlanda ráđđehusvuorkkáin. Lea maiddá álki gávdnat raporttaid Hudson's Bay Company, go dat leat almmuhemiin ja kulturárbbis. Lea maiddá álkit geahččat miššonearaid vuđolaš gulahallamiid, go buot lea digitaliserejuvvon ja olámuttos searvegotti vuorkkáin. Na mii de lea mii váilu? Inuihtaid reakšuvnnat, oaivilat ja jienat, main ii leat ásašuslaš reaidu seailuhit iežaset muittu, lea jávkan. Vai eamiálbmogiid oaivilat galget oidnot, ferte dutki addit daidda erenoamáš fuomášumi. Muhtomin ferte, jus ii gávdno, čorget saji "jávohis historjái" mii čilge dan mii sáhtta manahuvvot ja mo fápmooktavuođat leat davviguovlluin. Nu sáhtta ehtalaš ja vuoiggalaš vuogi mielde mitalit dihto historjjálaš dáhpáhusaid birra. Hebron historjá, mas Carol Brice-Bennett oaivvilda ahte álbmot lea "suoláduvvon",¹² lea buorre ovdamearkan, muhto ii leat vealttakeahtes erenoamán dáhpáhus árkttalaš máilmmis.

Árktis ovdanbuktojuvvo dábálepmosit guovlun mii lea vielgat, galmmas, guhkkin, ávdin ja gos ii sáhte ássat, jikjon ja guorus máilbmin. Lea diehttelas ahte Árktis dán geahččanguovllus adnojuvvo eahpe-urbánan ja "lunddolažžan". Kultuvrras symboliserejuvvo Árktis guorus ja ávdin guovlun don bealde ekumena. Jus

¹² Carol Brice-Bennett essay čilge historjáa ja váikkuhusaid go Labrador eamiálbmot bákkuin fárrujuvvo: dán ášši ii leat erenoamán, ja eará bággosirdimat (Alaskas, Ruonáeatnamis, Ruoššas) leat dagahan seamma garra roasuid. Carol Brice-Bennett: *Dispossessed: The Eviction of Inuit from Hebron, Labrador*, Montréal: *Imaginaire | Nord*, coll. "Isberg" ilmmai 2017.

SÁMI VERŠUVDNA

buohtastahtta dan eanet temperejuvvon sonaiguin, de ferte dovddastit ahte Árkntalaš regiovnnas ášset unnán olbmot. Eatnama demográfalaš disposišuvdna čájeha čielga konsentrašuvnna olbmuin ekvatoriála sona birrasis. Galbma máilmmis leat goitge maiddá gilit, gávppogat, ja vel metropolat ge, main leat stuorra olmmošlaš, sosiála, tehnikkalaš, kultuvrralaš ja energiijalaš hástalusat, dasa lassin čielga erohus gaskal geasi ja dálvvi, mii gáibida ahte konstruere duppál arkitektonalaš huksemiid. Okta ovdamearka lea Montréal, mas leat 3,5 millijovnna ássi, rehkenastojuvvo, ii fal govdotatceahki dihte mii lea 45 gráda, muhto dan garra ja guhkes dálvvi dihte, galbmaseamos stuorragávppogin (mas leat eanet go 1 millijovnna ássi) máilmmis. Maid dat mearkaša, jus eat beroš dálkkádatlaš ráddjemiin, eallit gávppogis gos rievddada gaskal subtropihkalaš ja subárktalaš dálkkádaga, jus dan geahččá sosiála ja kultuvrralaš perspektiivvain? Mo davi dilat váikkuhit ráhkaduvvon birrasii, dan urbána plánemii, resursahálldašeapmái ja kollektiivvalaš ja individuálalaš heiveheapmái eallinláhkái, lea unnán studerejuvvon dássáži, justa danne go dat dábálaš govva mii olbmuin lea davviguovlluin lea ahte dat lea ávdin regiovdna gos ášset unnán olbmot. Dattege ii leat álo nu. Govvádallamat sáhttet maiddá diktat min fátmmastit davi ja Árkntisa kompleksavuoda. Vai duodaid ipmirdat sirkumpolára máilmmi, de ferte danne fátmmastit sihke urbána ja eahpeurbána váttisvuodaid mat karakteriserejit guovllu.

Ipmirdan dihte daid iešguđetge oaiviliid mat vuosttildit nubbi nuppi ja váikkuhit nubbi nubbái sirkumpolára máilmmis, ferte dohkkehit guđe dásis máŋga gielat, leaš dal camialbmotgielat, majoritehtagielat dahje

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

vierisgíelat, leat ráhkadan jurdaga ja paradigmaid dan birra. Gíelat mat unnán hálluojuvvot máilmmis muđui, muhto mat leat dábálaččat davviguovlluin (ovdamearkka dihte dánska ja dárugiella) leat sakka váikkuhan mo Árttis lea definerejuvvon, erenoamážit golgolaččat fearániid maŋis geat bohte dáin riikkain ja geat leat almmuhan ollu mátkemuitalusaid. Vierisgíelain, ovdamearkka dihte duiskagielas, lea unnán dahkamuš davviguovlluid fuomášemiin dahje koloniseremis, muhto dat mearkkaša ollu mo guovlluid ipmirda. Viidásat lea sirkumpolára regiovdna dat báiki máilmmis gos eamiálbmotgíelat orrut buot eanemus eallin. Cree, inuktitut, ruonáeatnangiella ja jakutsk leat ain dat gíelat mat geavahuvvojit kultuvrralaš hábmemii ja sirdašupmái, vaikke vel máhtu dáid gíelaide olggobealde sin váldosona lea ráddjejuvvon. Danne ferte fátmastit máŋggagíelat dimenšuvnna buot dutkanprošeavttain davi ja Árttisa birra, ja ferte dohkkehit ahte ovttagíelatvuohta ja vel guovttegíelatvuohta ge dagaha ovttageardán ja beallemuttus oainnu daviin. Vaikke vel dat gáibida olu, de gávdnojit ollu čovdosat. Persovnnalaččat dovdat máŋga gíela, jorgaleapmi ja máŋggagíelat bargojavkkut sáhttet hehttet boastuipmárdusaid.

Davvi dagaha "interkultuvrralaš laboratoria". Dábálepmosit mii rehkenastit 1900-logi giliid vuosttaš báikin gos máŋggakultuvrralašvuohta lonuhuvvui. Isolerejuvvon báikkit Árttisis leat dattege, dan rájes go áсахuvvo, leamaš deaivvadanbáikkit nissonolbmuide ja dievdduide iešguđetge kultuvrrain, sihke oktavuodaid ja gávppašeami oktavuodas. Miššovdnabargu, ruvkedoaimmat, buođđudanhuksemat ja giddagasčohkkán dagahii ahte olbmot eará regiovnain dain riikkain ja, sisafárrema geažil, olgoriikkas, go dát

SÁMI VERŠUVDNA

doaimmat dárbbášedje álbmoga iešguđetge kultuvrrain. Dasa lassin lea juohke sirkumpolára kultuvra boadus ovtta syntesas mas leat guokte dahje mánga kultuvrra, lullin ja davvin. Mánggakultuvrralaš ovttasdoaibman lea danne mihtilmas davviguovlluin ja Árktesis. Iešguđetge báikkiin leat sihke eamiálbmogat ja iieamiálbmogat, leat erohusat das man olusat sii leat ja mo sin harmoniija lea. Ovdamearkan dasa lea ruonáeatnanlaš identitehta, mii dál lea syntesa mánggačuodi boares inuihttakultuvrrain, ovttastahtton kultuvrraiguin mat bohte miššonearaid, dánska kolonijafámu ja odđa sisafárremiid mielde.

Sirkumpoláritehta, fágaidrasttildeapmi, eamiálbmogiid vuhtii váldin, urbánitehta, mánggagielatvuohta ja interkultuvrralašvuohta gáibidit buohkat metodologalaš sihkkarastindoaimmaid davviguovlluid ja Árkalisa dutkamis. Dáid eavttuid haga orru sirkumpolára guovlu fas "áلكiduvvon" ja alma vejolašvuođa defineret iežas. Dasa lassin, nu mo Louis-Edmond Hamelin lea čájehan iežas bargguiguin, gáibida "davvi" ahte ráhkada odđa doahpagiid ja geavaha iežas sátneriggodaga čilget dan erenoamášvuođaid ja originalitehta ¹³. Dát neologismmat fátmastit doahpagiid mat dál jo gávdnojit árgabeaivválaš ságastallamis. Doahpagat nu mo «nordicité», «hivernité» ja «glissité» leat ráhkaduvvon fránskagilli, muhto leat maiddá ollu jorgaluvvon eará sirkumpolára gielaide. Dát doahpagat dahket vejolažžan dutkat odđa

¹³ Lohkan dihte eará maid Louis-Edmond Hamelin lea čállán, earret La Nordicité du Québec (Québec, Presses de l'Université du Québec, 2014), geahča Écho des pays froids, Discours du Nord (Québec, GETIC, Université Laval, coll. «Recherche», 2002); Le Québec par des mots. Partie II: L'hiver et le Nord (Sherbrooke, Presses de l'Université de Sherbrooke, 2002).

MII LEA DAVI GOVVÁDALLAN?

suorggi daviin, mii sihke gudnejahttá erohusaid regiovnnas ja oktasašvuodaid, ja mii earuha dan muđuid máilmmis.

Konklusuvdna

Buot dutkan daviin ja Ártkisis ferte váldit vuhtii kultuvrralaš ja olmmošlaš aspeavttaid, vaikke vel oarjemáilmmi árbevierru lea daid marginaliseren. Dát projisere iežas "áktalaš nieguid" galbma máilmmis, luoikkahan dihte doahpaga Barry Lopezis¹⁴, rikkes govvádallamiid ja hirpmáhuhtti mearkavuogádagaid bokte. Govvádallamat leat dattetge olgguštan sin geahčastaga geat áset guovlluin, ja vel oasi dan geográfalaš duohtavuodas doppe. Fas ásahit "eksisteansa ekologijja" mii oaidná mánggabealatvuoda ja variašuvnna sirkumpolára máilmmis, fertet mii ovdanbuktit ja bealuštit jurdaga davi, dálvvi ja Ártkisa birra mii lea eanet mánggabealat. Vai dan sáhttit dahkat, de ferte bealuštit hypotesaid ahte a) daviin ja Ártkisis leat báikkit mat álelassii váikkuhit nubbi nuppi ovttađásásaččat; b) kultuvrralaš ja olmmošlaš aspeavttat mearridit oktavuoda guvlu ovdalgihitii; c) ferte govvádallat davi ja Ártkisa mánggakultuvrralaš ja sirkumpolára vuogi mielde ja fágaidrasttildeaddji perspektiivvain; d) sirkumpolára ipmárdus ovdanbukta davi ollisvuhtan mii gáibida oktasaš čovdosiid, reflekšuvnnaid ja posišuvnnaid. Seammás ferte váldit vuhtii buot daid iešguđetge kultuvrraid ja gielaid mat dagahit dán ollisvuoda, mii lea mángganašunála,

¹⁴ Barry Lopez: Arctic Dreams. Imagination and Desire in a Northern Landscape, New York: Scribner, 1986.

SÁMI VERŠUVDNA

máŋggagielat, máŋggakultuvrralaš ja mas dávjá leat riiddut.

Ferte ražastit vai oažžu ipmárdusa ja vai sáhtta problematiseret mearkavuogádaga mii dagaha govvádallama daviin. Ferte geahččat dán máŋggakultuvrralaš ja historjjálaš perspektiivvain, ja váldit ehtalaš, fágaidrasttildeaddji ja máŋggagielatvuođa vuhtii ovttas dainna maid dutká. Jus dan ii daga, de nohká davvi, dálvi ja Árkis kultuvrralaš máŋggabealatvuohtha, ja lea riska ahte mii sealluhat stereotiippaid.

Daniel Chartier

Université du Québec à Montréal

多言語出版

北方の想像界 とは何か？

ダニエル・シャルティエ



北方は、西欧世界の芸術家や作家たちによって何世紀も前から想像され、表象されてきた空間である。それによって、時間の経過とともに言説の層が次第に厚みを増し、「北方の想像界」が作られてきた。その北方とは、スカンジナビアのことであつたり、グリーンランド、ロシア、北極圏、あるいは南北両極のことであつたりする。ところが、

西欧人たちが北極に到達したのはわずか1世紀前のことにすぎない。そのため「北方」は二重の視線の産物となる。すなわち外部の視線（表象、とりわけ西欧的表象）と、内部の視線（イヌイット、スカンジナビア、クリーなどの北方文化）である。前者はしばしば単純化され、後者は無視されるため、もし「北方」について全体的な視野から研究したいと思うなら、次の2つのことを問わなければならない。すなわち、北方を想像界によってどのように定義するか？ 南によつて

軽視されてきた文化も含めて、北方諸文化について完全な視点を獲得するために、われわれはどのような倫理上の原則に基づいてそれらを検討すべきか？ われわれはここでこれら2つの問いに答えようと思う。まず、北方の想像界を定義し、次に、文化的北極地方を「ふたたび複雑化させる」ための包括的プログラムを提案することによってである。

この日本語版は日本ケベック学会の協力のもとに出版されました。ここに厚く御礼申し上げます。

多言語出版：日本語、フランス語、ノルウェー語、デンマーク語、ロシア語、英語、北部サーミ語。この出版物は北方の14言語に翻訳されています。

Édition multilingue en japonais, mais aussi en français, norvégien, danois, russe, anglais et sâme du Nord. Des éditions existent dans 14 des langues du Nord.

